名聲は普通の讀詩社會には、一時は、夫よりも高かりき。女史は一千八百六年ダルハムなるカールトンホールに生れき。父は西印度なる某地の領主なりしが、家産豐かなりしかば、或はヒヤフォオドシャヤに或、はロンドンに轉住し、又デヴンシャヤに漫遊せりき。

此の漫遊中エリサベスはいたく健康を害ひ、加ふるに、父、厄に遭うて其の資產を失ひしかば、決然一枝の彤管によりて一家を支へんと志し、廣く古今の詩歌、小說を讀み、作文の初步より自修を始め、兼ねて希臘語をも學び、刻苦精勵の末、遂に一千八百二十五年 "Essay on Mind" (『人心論』といふ論文と數篇の詩歌とを世に出だしき。時に齡二十歳なりき。これより十餘年間は別にいふべき程の作なし。同三十八年 "The Seraphims" 外數篇の詩を物しき、是れロバアト、ブラウニングが初めて文壇に出でし頃の事なり。同四十六年『詩集』を出版し、此の年ブラウニングと結婚す、時に女史年四十一歳、ブラウニングは三十五歳なりき。ブラウニングは、其の家人の不承諾を意とせずして女史がみづから擇びし夫なりきといふ。かくて夫に從ひて伊太利のフロレンスに其の病を養ひ、同四十九年一子を擧げ、翌年其の『詩集』を出版しき、女史が名作は大抵前年の詩集と此の集とに收めらる。其の翌年 "Casa Guidi Windows" 及び "Aurora Leigh" 成り、同六十年 "Poems before Congress" 成りぬ、件の三篇には所天(をつと)の詩に呼應する所少からざる爲め、却りて其の特得の長所を損ぜし趣あり。翌年六月フロレンスに歿しき。遺稿 "Last Poem" は其の翌年世にいでき。

ロバアト、ブラウニングがもてはやされしは夫人が歿後なり、其の生前にはベーレット女史あるを知りてブラウニングあるを知らざりし者も多かりき。高遠なる詩人としては、女史の其の夫に及ばざるや明かなれど、夫人また英國の女流詩人(抒情詩人)としてクリスチナ、ロセッチ女史を除きては、前後及ぶものなき伎倆を有せり。其の詩(殊に晩年の作)は夫ロバアトの詩風を學びたるが爲め、詞句の意義不明なる所少からねど、尙ほ其の夫の如く甚しからざりしのみならず、間々其の朦朧たるが爲に神秘的感情を寓し得たることもあり、而して其の少時の不幸と多病とより來れる悲哀の感想は、屢〻可憐巧妙の詩となりて、其の愛讀者を泣かしめたり。蓋し(一)其の至誠なる宗教心はよく其の作品を高からしめ ("Cowper's Grave" は其の好例)(二)其の博愛、慈悲の主義は、フッドが作、ヂッケンスが作と呼應し ("The Cry of the Children")

(三)其の女性の特技は其の家庭的切哀を寫すにあらはれ("Isobel's Child")(四)其の傳奇的空想("The Duchess May" 及び "The Brown" "Rosory")と(五)其の倫理及び政治の思想("Lady Geraldine's Courtship")はた讀詩社會の愛を博しき。さて其の辭句は律格、押韻共に嚴正なるにはあらねど、諷詠の間言ふべからざる情趣あり、其の詞の選擇は間〻宜しきを得ざりしかど、尙創新の譽れあり。其の悲哀を敘するや、女子の癖としてやゝ饒舌に流れたる所もあれど、眞實と純粹とを失はずして、句々能く人を動かす。而して自然の風物を歌うて繪畫の如き妙ある、當時テニソンを除きては敢するものなかりき。按ふに、夫人が長く病みて其の病室に閉居せしや、嘗て刻苦自修の際に、硝窓を隔てゝ觀賞せりし遠山、近水を憶ひ起し、其の身の自由ならざる爲に一しほ自然の悠々たるを慕ひ、之れを翫賞するの念更に深きを致しゝものあらんか。女史が十四行詩に至りては、遠くテニソンの上にあり、其の夫に送れる "Sonnets from Portuguesee" の諸篇の如きは、シェークス、ピヤ以後(十六七世紀)の名篇と伯仲の間にありと稱せらる。

但し、女史が作に一大缺點あり、そは女流作者の通弊ともいふべき一種の自信强く、毫も他の批評を顧みざるのみならず、反省の念に乏しく、只管才に任せて作せしことと是れなり。識見、素養の深からざる一女子にして之れを爲す、失なきを得べけんや。其の律格と其の押韻とが杜撰に流れたること屢〻にして、破格の詞句頗る多かりき。此の弊尤も其の初期の作に多し、ブラウニングと結婚するに及びて、夫に敎へられて、やゝ此の失を改めきといふ。而して其の主題を擇ぶや、亦た甚だ杜撰なりき、或は他が物せる小說の筋を其まゝに歌ひ、或は一知半解にして或種の哲理を詠ずるなど、識者の顰を買ひしと一再のみならず。女史が長所の缺點と共に夥しきは、彼のバイロンにいとよく似たりき。一言もて蔽へば、女史は實に一世の才女にして、鬼才ブラウニングの妻たるに愧ぢざりし者なり。

第十六章　其の他の詩人

マッシュー、アーノルド——プリ、ラファエル派——其の作及び特質——ロセッチ兄妹——其の作及び特質——オショーチシー及びトムソン——タッパア以下の諸詩人——スパスモザック派(際物派)——クラッブ——ロッカ——リットン——モオリス——スヰンバアン

テニソンとブラウニングとが第十九世紀後半の文壇に日月の如く輝きし時、尙別に幾多の明星ありて天の各方に燿けりき。中につきて最も著きをマッシュー、アーノルド。ロセッチ。ロセッチ孃。トムソン。クラッフ。ロッカア。リットン等とす。左に順次に略叙すべし。

マッシュー、アーノルドは、詩人としてテニソン、ブラウニングに亞ぎしのみならず、批評家としても一世に推重せられたり。一千八百廿二年に生れぬ、父は有名なる博士アーノルドにして、ラグビー大學の敎頭なりき。幼時にはニューヂゲートとラグビーとの小學にて敎育を受け、後ちベルリオルに轉じて、一千八百四十年同校を卒業し、同四十五年オーリエルの校友に推選せられき。これより視學官となりて、終生此の務めに服しき。同五十七年より十年間はオックスフォオドの詩學敎授を兼ね、其の名いと高かりき。是れより先き同四十九年、始めて "The Strayed Reveller and Other Poems" と題せる一詩篇を公にし、又同五十三年には「"Poems" 『詩集』を世に出だしゝが、後者は其の序文の巧妙なると名篇の多く收められたるとを以て名あり。」「同五十八年希臘劇と英國劇とを折衷せる劇詩 "Merope" といふを物せしが、

此の篇は、スヰンバアンが "Atalanta in Calydon" 及び "Erechtheus" と共に、其の種の作中の傑作と稱せらる。」かくて後ち暫くは、公務の多忙なりしと散文の著述の繁かりしとによりて、詩歌を作する暇なかりしが、同六十七年に至りて又 "New Poems" と題せる詩集を出版し、爾後陸續作を絶たず、一生中の作集めて五百ページの大冊をなすに至りき。一千八百八十八年歿しき、齡六十七。

現今に及ぶまでアーノルドを批評する者に二派あり、一は彼れが散文を推重して詩歌を貴ばず、一は彼れが詩歌を愛でゝ散文を珍とせず。兎も角も彼れは兩方面に秀でたり、就中詩人として世に知られしは、散文家としてよりも二十年の前にありき。

アーノルドは其のはじめ深くウォオヅチオスを景慕せりき、其の晩年にはウォオヅチオスが缺點若干を擧げて論難せしことも少からず。而もテニソン、キーツ等がローマンス（ニューヘランツ）の詩躰に揭焉たり。又ミルトンの風調をも學びたる跡あり。又半無意識にしてテニソンの影響を受けしことも少からず。而もテニソン、キーツ等がローマンス（ニューヘランツ）の流麗華縟なる作に對しては反動し、力を竭して別に新古詩派を建設せんと欲

しき。一面よりいへば、アーノルドは所謂「正格」派に屬する者なり、ポープが十八世紀の正格派なりしが如く、アーノルドは十九世紀の正格派なりき、換言すれば、「結構、音韻の格法を重んじ、辭を彫琢すると共に、情理、趣致の洗錬を勗めたりき。されば其の作の最も秀でたるものに至りては、其の妙十九世紀詩人中第一に位すべきものもありしなり。」批評と創作とが別才に屬するとは嘗て論ぜられたる所なれども、最近代の論者は一歩を進めて、「批評の能なき詩人は未だ圓滿といふべからず、而して詩才ある批評家は眞に無上なり」といはんとす。第十九世紀の詩人について之れを見るに、獨りコールリッヂは、アーノルドより五十年代の前に出でゝ、アーノルドにひとしき學者にして、兼ねて詩人としては寧ろ一級を進めたるものなりき、而も其の自作、自評はアーノルド程には嚴ならざりき。スコット、バイロン、キーツに至りては、もとより正當の學者、批判家にあらず、シェリー、テニソンはた批判家たる譽れなかりき。是れに由りて之れを觀れば、或一派の徒がアーノルドを稱揚して九天の高きに置かんとするも、其の所以なきにあらず。

自作、自評して自ら勵むことはアーノルドの夙に實行せりし所なるが故にや、其の初期の作既に見るべきもの多し。中にも最も名あるもの二三を擧げんに、シェークスピヤを歌へる十四行詩は莊麗にして嫻雅、坐ろにドライデンが名句を聯想せしめ、"Myeerinus" といふ六行一解の詩はよく光をテニソンと爭ひ、"The Church of Brou" は結尾に無限の餘韻あるを以て名あり(こはアーノルドが一生に通じたる特色なり)。其の他 "Requiescat" は精妙なる挽歌と稱せられ、"Switzerland" には斬新奇警の詞致あり、而して其の獨白劇 "Strayed Reveller" 及び "Empedocles on Etna" はやゝ後に成れる "Merope" と共に、一種の抒情歌として大に見るべきものなり。物語歌には優婉なる "Sohrab and Rustum" あり。"The Sick King in Bokhara" "Balder Dead" "Tristram and Iseult" "The Scholar-Gipsy" の如き皆佳作なり。總じて短篇を佳とす、是は十九世紀後半期の詩歌の特質なるが如し。中にも "The Forsaken Merman" は觀念の深邃よりは思想の創新と興趣の湛々とを以て著はれ、"Dover Beach" は彼れが散文中の殊なる宗教思想を聲調めでたき韻語をもて表はしたるが故に名あり、而して "Bacchanalia" 及び "Summer Night" これに次ぐ。彼れは頗る追懷の詩を好みき、ウォオヅヲオス及びハイヂを歌へるものの如きは其の好例なり。就中『ウェストミ

ンスタア、アッベー』は其の語、意の莊重端嚴、ミルトンが "Nativity Ode" に匹敵すと稱せらる。蓋し此の作ミルトンを聯想せしむるものあるは決して偶然にあらず、アーノルドは常に詩題の選擇に重きを置きて、經營頗る力めたりしなり。現に、前にいへる『詩集』の序文中に「詩題」に關して論じたることあり、思へらく、詩歌の貴きと然らざるとは、全く主題の大小によるともいふべし、些末の事を捉へ、刹那の感想を寄せて之れを歌ひ、以て一時の歡を買はんとするは、是れ豈に最近詩人の通弊にあらずや。かゝる詩篇を取りて之れを推奬し、其の多く產出せられんを望む、是れ豈に最近批評家の通弊にあらずや。百千の螢火は一月の明に如かず、片々たる小品朝に作せられて夕に讀まる、爲す所果して幾何かある」と。セインツベリ氏以爲へらく、「古今の大詩篇主題の大なるものもとより多からん、而も其の盡く然るか、否か、輕々しくは斷ずべからざるなり。所謂大詩篇とは何ぞ。絕妙の詩篇といふ意か。主題の大ならざるもの何故に絕妙なるを得ざるか。大主題のみを歌ふべしとせんか。詩人の主題は遂に盡くるの虞なきか。悉くアーノルドがいふ所に從はゞ、吾人は遂にミケランゼロ又はレオナルド、ダ、ヴィンチ等をすてゝ、彼のピラミッド若しくはエスキュリヤルなどいふ粗大なるものゝ計畫者を尊ばざるを得ざるに至らん。豈にかゝる理あらんや」と。アーノルドが作とても必しも其の言に副はざりしなり。そは兎も角も、彼れが作の最も妙巧なる者に至りては、其の數割合に少きだけに、英詩の衆妙を盡したりと稱して溢美ならざるもの間〻あり。是れ彼れを好む者の、彼れをテニソン、ブラウニングの上に置かんと欲し、彼れを好まざるものだに、其の人道(所謂大題目)發揮の功をたゝへて彼れに同情を表する所以なり。

前にもいへる如く、マッシュー、アーノルドは、もとウォオヅヲオスの流れを汲みて其の詩田に灌せし人なり、而して彼のキーツ、テニソン一派がローマン派の潮流に對して力を極めて其の防遏に勗めしが故に、此の流れは爲めに方向を轉じて所謂ブリ

ラファエル的運動 (Pre-Raphaelite Movement)

の一潮流となり、延いて今日の詩界に及べり。ローマン派とブリ、ラファエル派とは共に彼の宗教上の一派オックスフォオド派の運動と密接の關係を有し、始終これに助けられて其の勢を加へしものなり。さてブリ、ラファエル派の起りしは第十九世紀の中葉にて、當時はアーノルドを首めとして有名なる詩人、批評家のうちに之れに反抗せし者も少からざりしが、此

等二三子の死後は其の志を繼ぐ英才なく、而して新派の方にはロセッチ、モオリス、スヰンバアン等の名家出で、中にもスヰンバアン氏の如きは今も尙存生せる程なれば、此の派は遂に全勝を得、現に英國詩壇の大半を占領す。

G. C. D. Rossetti.

ガブリエル、チャールス、ダンテ、ロセッチ(通稱ダンテ、ガブリエル、ロセッチ)は一千八百二十八年ロンドン府に生れき。父は詩人と批評家とを兼ねたる伊太利人なりしが、本世紀の初め故ありて脫國し、先づメンタに走り、次いで英國に住みこみにき。かくて英國にて妻(伊太利人と英國婦人との間に生れし女)を聚り、四子を擧げき、皆文才あり、ガブリエルは其の第三子なり。兄W. M. Rossettiは有名なる批評家にて、姉マリヤ、フランセスカもダンテの批評を著して名あり。妹クリスチナ、ジョールジナにつきては後にいふべし。さて父はロンドンなるキングス、コレッヂといふ大學にて伊太利文學の敎師となりて、熱心にダンテを講說し、ガブリエルも夙に此の學校にて敎育せらるゝことゝなりしが、生來いたく繪畫を好みしかば、十五歲の時同校を退學し、ロイヤル、アカデミーに入りて畫を專攻することゝなりぬ。かくて二十年間は此の業に從事して名聲ありき。されども幼時より作詩にも從事し、一千八百五年にはプリ、ラファエル派の雜誌"Germ"と題せる詩篇を揭げ、同五十六年には『オックスフォオド、アンド、ケムブリッチ、マガジン』といふ雜誌の寄書家となり、同六十一年には古代伊太利詩の飜譯と自作の『詩集』とを公けにしき。同七十年又『詩集』を著し、後八年にして"Ballads and Sonnets"を出版せり。一千八百八十二年病を得て歿しき、齡五十五。

以上の詩篇は、大抵彼のモオリス、スヰンバアン等の作に先導せられて世に出でしが、實際を言へば、ロセッチが二人に影響せし所も尠からざりき。此の三詩人は全く同一の詩風を奉じて立ち、以て一派の根柢を固めし者なれど、流石に各〻特色あり。モオリスは佛蘭西、英吉利の中古の詩風を慕ひ、スヰンバーンは古代及び列國の作に其の模範を求め、而してロセッチは主として伊太利文學の上に脚を立てんと試みき而も共に中古派に屬せしは明かなり。ロセッチが壯時の作"The Blessed Darozel"を取りて之れに見るに、其の想を全くダンテが或節より取り來りて、之れに中古佛蘭西風の快活と中古英國風の創新とを加へたるが如き跡歷々たり。否、彼れが一生の作は大抵然るのみならず、中古の荒唐なる思想、感情に加ふるに十九世紀風の

半ば神秘的なる幽玄の趣致を以てせしものいと多し。初期の作中見るべきは "Love's Nocturn" "Troy Town" "Sister Helen" "Penumbra" "The Woodspurge" 等なり。

第二の『詩集』は前の『詩集』に追加せしものにて、前のに比して異なれるは "Rose-Mary" "The White Ship" "The King's Tragedy" 等の物語歌の加はりたるにあり。以下少しく彼れが特質を許せんか。エミー、シャープは曰はく

彼れに取りては戀愛は一種の神祕的情熱にして、美もまた幽遠不可思議なる精靈の意義を一種の符號を以て表現せるものに外ならず。

と。げにや彼れはかゝる點に關してはダンテとやゝ趣きを同うせるならん。蓋しロセッチの所謂戀愛は闇黑面なき戀愛なり。人間に於ける天道を鞏固にするもの是れ即ち彼れが所謂戀愛にして、斯かる戀愛は男女が形躰以上の美若しくは恒に「精靈に宿れる形躰の美」を思慕するより生ずるものなり。而して其の精靈といふは皆中世伊太利詩人のいへりしものに同じく、最近英國の思想には既に跡を絶ちしものなりしなり。實に彼れは最近の思想に對しては殆ど同感ずる所なかりしものゝ如し、十九世紀歐洲思想のほのかにも見らるゝ者は、一生中二三篇に過ぎず。

要するに、ロセッチが特質は其の作の繪畫的なるにあり、其の中古の思想、感情をスコットより一層深く詩中に蘇生せしめんと勗めながら、尙十九世紀的幽玄の趣致を帶ばしめたるにあり、其のコールリッヂ、キーツによりて一たび試みられ、更にテニソンに至りて漸く成熟するに至りしローマンス風の詩句と語調とを一層圓熟せしめたるにあり。シャープ又曰はく

壯年期に於けるウォオヅチオスとコールリッヂとの間には、作詩の標的に於て著き差あり、日常の生活を詩界に攝入せんとするはウォオヅチオスにして、實在の眞意義を現はさんが爲めに實際以上の事柄を歌ひ、以て人間の感情の度を知らんとせしはコールリッヂなり、『エンシェント、マリナア』『グリスタベル』『クブレ、カン』の如きはこれなり。而してキーツまた彼の「永く忘られたる仙境」の祕を探りて、其の "La Belle Dame Sens Merci" "The Eve of St. Mark" の篇を得たりき。而してこの二人が數回遊歷を試みし此の異境は、實にロセッチが生國にして、妖魔、仙童の出沒往來する此の夢幻の靈域はロセッチが得意の彩筆に最も適したるものなりしなり、云々』。

ロセッチの小妹は名をクリスチナ、ジョールジナと云ふ、ロセッチ孃とて才貌双

絶の名ありき。嘗て兄ロセッチがテニソンの作"Morte'd Arthur"に基きて、皇后の愁然として思ひくづをれたる姿を畫きし時、其の畫の標本となりしは此の女なり。一千八百十三年に生れき。熱誠敬虔なる教會員にして、母に仕へて孝順身を持すること貞淑、女詩人の模範たるに堪へたりき。同九十四年に歿しき。

其の作は多からず。はじめてものせし詩篇は、題して"Goblin Market and Other Poems"といひ、一千八百六十一年出版せられき。次ぎを"The Princes' Progress"といひ、同六十六年兄ロセッチの挿繪を添へて公にしき。數年の後"Sing Song"を著しゝが、それより同八十一年までは取りたてゝいふべき作なし。此の年"A Pageant and other Poems"を著はしき。

今日に於けるロセッチ嬢が評價は甚だ高く、批評家は之れをブラウニング女史に比較して、其の變化の多きと作の夥しきとに於ては彼れに劣る所あれど、其の瑕疵いと少なく、未練と長舌との弊なく、温柔優雅なる點は、彼れに優るとなせり。兎に角、大躰よりいへば、英國女詩人中(抒情詩につきていふ)嬢に匹敵するもの殆んど無しともいふべからん。其の最初の集に於ては、彼のプリ、ラファエル派の特質のあまり著く現はれ、やゝ厭はしく思はしむる情を惹起するものあれど、次ぎにものせる"Dreamland""Winter Rain""An End""Echo""The Three Enemies""Sleep at Sea"樂曲"When I am Dead, My Dearest"及び夥多の十四行詩(ソネット)は何れも精妙の頂に達し、よく此の派の粹を表はせり。而して"A Pageant and Other Poems"は前の二集に比して、嚴肅の趣致、滑稽の旨味、双つながら勝りたり、蓋しロセッチ兄妹は共に諷諧(ユーモア)に長じたりしなり。要するに、其の名作を收めたる"Collected Poems"一卷は、英國古今の抒情詩集中稀に見る所なり、最も可憐にして情趣深き花籠にも喩ふべく、嬢が贈遺の餘香は今尚馥郁たる感あるなり。

プリ、ラファエル派は今も尚ほ盛んなれども、當時(今より三十年前)に於ては、ロセッチ及びロセッチ嬢とモオリス、スヰンバアンとの外は、其の派の作家中世に聞えたるものもなかりしが、尚仔細に該派中の英才を探れば、散文の名家を兼ねたるヂョン、シモンヅ John Addington Symonds、逸才の盲詩人にして其の名はたゞ朋友の間にのみ高かりしフィリップ、マーストン Philip Bourke Marston、二十年間教會の僧官となり、それがため詩名中道にして滅せしホプキンズ Gerard Manley Hopkins、及びオシューチシ

ー及びトムソン等十數名あり。こゝには末の二家のみを叙して止まんとす。

オシーガッシー　(一八四四——八一)は大英博物館の館員なりき。詩集三卷あり、"The Epic of Women" (一八七〇出版) "Lays of France" (一八七二)及び "Music and Moonlight" (一八七四)是れなり。別に遺稿一卷 "Songs of a Worker" と題して歿後に出版せられしが、其の中 "Lays of France" は Marie の意譯にして "Songs of a Worker" の大部分もまた佛蘭西の最近の詩歌を飜譯せしものに過ぎざれば、彼れが眞技倆は殘れる、二卷に於てのみ見るべし。彼れは例のプリ、ラファエル派の夢幻詩想の極端を悅べりしがゆゑに、其の作世俗に厭はれ「人間的興趣(インテレスト)を缺けり」といふ批難を得て、空しく其の生を畢へたり。按ふに、彼れは自家のみを宗とせりし詩人にはあらず、例へば米の詩人エドガー、ポーに負ふ所なゞいと多し、又彼れが音樂の好尚に富めりしは "Music and Moonlight" の詩編によく見えたり。其詩のあまりにローマン派風に馳せて荒唐怪僻となりたるは厭ふべしと雖も、尙ほ流石に棄てがたき趣味もありとぞ。

ヂェームス、トムソンは、十八世紀の末に出でゝ『四季の歌』の作者として詩名を

一世に揚げしヂェームス、トムソンと同姓、同名の詩人にして、プリ、ラファエル派中最も異色ありし詩人也。一千八百三十四年に生れき。其の父は舟夫にして家甚だ貧なりしかば、幼にして救貧院 Royal Caledonian Asylum に送られて教育を受け、業を卒へて後或る兵學校に奉職せしが、性其の職に適せざるのみか、チャールス、ブラッドロー Bradlaugh 等一派の感化を受けて懷疑說をよろこび、共和主義などを奉ぜしかば、遂に一千八百六十二年に其の職を辭しにき。或は謂ふ、其の厭世の最も著き動機は其の愛着せし少女が死去せし事なりと。かくて後、或は狀師の書記となり、或は鑛山の吏となり、或は軍事擔當の新聞記者となりて數年を送り、竟に印刷業に從事し、こゝに漸く生計の安途を開き、同八十二年に歿しき。要するに、不平の間に人となり、不平の間に業を執り、終始不平の歲月を送りて生を了へし詩人なり、而して其の不平の氣はよく其の詩にあらはれたり。又夙に散文家、時文家として名をあらはし、時文學を評せしが、殊なる素養あるにもわらず、識見はた卓拔とは稱し難けれど、着眼流石に奇警にして筆鋒鋭利なりき。彼のブラッドローが主筆たりし "National Reformer" といふ雜誌に、BV といふ假號にて屢〻時文評を揭げしものは、即ち此の

トムソンなりき。當時はシェリーに私淑せりしものゝ如し。さて其の批評中間々見るべきものもあり、フルード、キングスレー等は賛稱せりきといふ。一千八百七十四年初めて"The City of Dreadful Night"といふ詩をものして例の雜誌に掲げしが、顧るものなかりき、かくて後八年にして又"Von's Story"など題せる篇を著しゝが世間の冷遇は以前の如くなりき。かくして轗軻の間に逝るに及びて、世人は遽かに其の作に注意し、其の詩集は忽にして二三版を重ねしが、作いと少なかりしかば、今尚其の眞價を評定すると難し。"The City of Dreadful Night"は厭世的精神の一貫せる作也、宛たる虚無黨主義の深刻なる作にして、冷酷なる狂憤の語時に人をして悚然たらしむ、而もところ〴〵華麗莊嚴、掬すべき情致あり。最後の作"Insomnia"亦た鬼氣あり。而して其の未だ幸福なりしころの作"Sunday at Humpstead""Sunday up the River""the Naked Goddess"等の二三篇はやゝ光明界に近き作なれど、尚ほ狹隘一律にして不自然背理の悲愁あるを免れず。其の消極的、絶望的なる神秘界の消息を傳へて鬼哭啾々の聲あるところ、彼のロセッチ孃が瑞氣靄々たる積極的、有望的の神仙界を歌ひたる聲と相對してプリ、ラファエル派の兩面を代表せるもの

と評すべし。

マーチン、ファークヮー、タッパアは一千八百十年に生れき。父はチャンネル島にて有名なる外科醫なりき。タッパアはチャータアハウスとクライスト、チャアチとにて教育せられ、業を卒へて後ち評議員の職に就きしが、性文學を好みしかば、程なく職をすてゝ鉛槧に從事し、重に韻語の作をなしき。一生の著作中最も有名なるをば"Proverbial Philosophy"となす、こは一千八百三十九年に出版せられき。當時の批評家は其の平凡庸劣を難じたりしが、讀者の多きことは古今比なく、版を重ぬること四十、純益二万磅に及びきといふ。同八十九年に歿しき。温厚の士なりき。未だ出版に及ばざりし詩篇數十あり、いづれも短詩の模範とするに足るものなり。前にいへる"Proverbial Philosophy"は其の傑作なり、其の平易にして花やかなる、尤も俗衆によろこばれし所以なり。

アルフレッド、テニソンが作"Poems by two Brothers"は其の二兄と共に作せしものなることは已に前にいひしが、其の中長兄フレリデックは今年九十二歳の高齢に達して今も尚ほ存生せりといふ。次兄チャールス(一八〇八——一八七九)亦詩名あり、殊

に十四行詩に秀でたり。彼のテニソンをして『インメモリヤム』をものせしめし親友アーサア、ハラムもまた散文にも、韻語にも名ありき。取り出でゝいふべき長所とてはなけれど、雅馴にして瑕疵の少きは見るべし。彼の「スタアリング」社を開きし散文家チョン、スタアリング亦たテニソンが親友にして、時々作詩あり、常にテニソンの詩風を模せりき。カーライルは彼れを評して、詩文共にテニソンとハラムとの間にありとなせりき。

リチャード、ヂェ子、井クス、トレンチ(一八〇七——一八八四)は、ケムブリッヂの神敎大學を卒業して監督長(アーチビショップ)となりし人なり。其の名著"Study of Words"は「學者的の著述中最も通俗、而して通俗的なる著述中最も學者的なるもの」と稱せらる。彼れは重に中世紀のラテン文學中神秘端嚴なるものを英國に紹介することに力めたり。創作にては、アルマの戰を歌へるものゝ外は別にいふべき作なし、但し十四行詩及び讃美歌には見るべきもの多し。

トマス、ゴオドン、ヘークの作は多く稱せられざれど、詩としては珍とすべきものあり。"Old Souls" "the Snake Charmer" 及び "The Palmist" を其の三傑作とす。

其の平生の主義に曰はく

> 苟くも完全なる詩歌と稱すべき詩歌は、其の意義を理解するが爲めに讀者をして多量の智識を要せしむる底の者なるべからず。さりとて一讀して其の內容の一切が明々白々に讀者の眼に入るがよしとにはあらず、たゞ智を以て謎語を解するに心を奮はれ、詩を樂むの餘裕なきに至らざらんを要す。

と。彼れが作は此の主義を實現せるものといふべし。前に擧げたる三篇は更ら なり、"Madeline" "Parables and Tales" "New Symbols" "Legends of the Morrow" 及び "Maiden Ecstasy" 等皆同じ趣きあり。「多少の作詩の經驗あるものにして之れを讀まば、げにもとうなづかるゝふし多かるべし」とセインツベリ氏はいへり。

ウィルヤム、エーツーン(一八一三—一八六五)は『ブラックウッド雜誌』の重要なり し記者にして、法律と文學との論說に名ありき。地方長官にして大學敎授を兼ね、共に令名あり、齡十七歲にして初めて其の詩を公けにしき。其の傑作は大抵"Bon Gaulitier Ballads" 及び "Lays of the Scottish Cavaliers" の中に收められたり。後者は一千八百五十四年の出版なり。翌年 "Bothwell" といふ長篇をあらはし、又同六十一年には "Norman Sinclair" といふ小說をものしき、共に好著なり。彼れが一生の作を代

表すべき "Lay of the Scottish Cavaliers" の詩躰は悉くスコットのに倣ひたれば、彼の平板の失に陷りたるは惜むべし、但し瑰麗なる詞句に其の平板を破りたる所間々あり "The Island of Scots" "The Heart of Bruce" 等は其の例也。要するに、小スコットともいふべき作家、熱心なる保守黨にして兼ねて中古武士の愛慕者たりき、されど其の抒情的伎倆は大なりといふべからず。

此のころスパスモヂック派(痙攣派)といふ一種奇異なる名稱によりて文壇に知られたりし一派の詩人あり、もとより明かに誰れ〳〵と定まりたりしにはあらず、或時はカーライルの如きも此の派中に算入せられしことあり、テニソンもまた此の派に流れたりと見做されしことあり。そも〳〵如何にして此の稱は起りしか、また何人がかゝる稱を作りしかといふに、名附親はエーツーンにして、其の動機は此の派の詩人を嘲倒せんとするにありしなり。按ふに、痙攣的とは、其の着想の不自然牽強なると其の措辭の奇矯破格なるを、病者が煩悶して七顛八倒する容態の苦しげなるに比喩したるよりの稱ならんか。強ひて感慨し、強ひて伸吟し、強ひて激越するの癖は、げにも此の派の弱所なりしなるべし。十分の詩才なくして強ひて

人を動かさんとすれば、主として想の奇、辭の奇を求め、往往にして此の失に陷る、スパスモヂック派は特りヰクトリヤ文學の所產にあらず、文學の革新期はかゝる派を產するとに多緣なるなり。

一時此の派の牛耳を執りしはシドニ、ドーベルとアレクサンダア、スミッスとなり。共に十分の敎育もなく、秀でたる詩學上の意見もなく、衣食に追はれて筆を一時の爲に執りしものゝ如し。

シドニ、ドーベルは一千八百二十四年に生れぬ、家貧にして小學にも入る能はず、家庭にていさゝかの敎育を受けしのみなりき。長ずるに及びて父の業を嗣ぎて酒商となり、處々の市府に轉住し、此の間に見聞を廣め、後の著作に益する所ありき。一千八百七十四年に歿しぬ、處女作を "The Roman" といふ、こは所謂書齋劇 closet drama なり、一千八百五十年に出版せられき。後三年にして又 "Balder" をものせり。此の作を彼のイブセンが "Brand" と比較するものあれど、如何あらん。クリミヤ戰爭はドーベルが得意とせし題目なり、"England in Time of War" と題したる作あり、尙其の外にスミッスとの合作 "Sonnets on the War" といふものあり。

アレクサンダア、スミス(一八三〇——一八六七)が生涯と詩風とはドーベルの
と大差なし。廿歳の頃"Life Drama"をものして喝采を博し、後ち"City Poem"(一八五七)
"Edwin of Deira"(一八六一)等を作せしが、晩年散文に從事して小話の類を綴りき、
"Dreamthorpe"(一八六三)"A Summer in Skye"(一八六五)は其の著きものなり。
ドーベルの作の取るべきは着想の異風なるにあり"Tommy's Dead"は其の傑作な
るべし。たゞ其の篇餘りに長く、且つ詞調平板なれば、讀過に堪へ難し。スミスは
着想ドーベルに劣れども、辭句は巧なり、其の處女作"Life Drama"最もよし。此の
派に屬せしものゝうちにて、他にやゝ名あるはベンヂット W. C. Bennet、コーリー
William Cory (?—1892)、ロスコー W. C Roscoe (1823—59)、アリングハム William Allingham
(1824—89)、ウールナア Thomas Woolner. 等なり。

A. H. Clough　　A. Smith.

アーサア、ヒュー、クラッフは、如何なる故ありてか、當時上流の人々より「悪詩人」(スウィドボーエット)と
いふ綽號を得たりしが、こは別に故ありての悪名らしく、彼れが作は決して悪詩と
稱すべきものにあらず、其の"Qua Cursum Ventus"の篇の如きは諷誦三嘆指く能は
ざる名句に富めり。一千八百十九年リヴァプールに生れき。幼時を亞米利加にて
送り、年少にしてラックビー黌に入り、かしこにて夙に其の名をあらはせりき。後ち
オーリエルの校友に推選せられしが、一千八百四十八年之れを辭してロンドンな
るユニヴァーシチー、ホールといふ教育會院の長となり、轉じて教育局 Educational Office
に入り、一千八百六十一年伊のフロレンスにて歿しき。初めてものせし詩を"The
Bothie of Tober-na-Vuolich"といふ。次ぎて"Amours de Voyage"及び"Dipsychus"成り
ぬ。此の三篇はやゝ彼の遲疑派の風あり。其の他尚數篇を出版しき。
全躰に亘りて彼れが作を見るに、クラッフは十九世紀の懷疑思想に感染したりしあ
と歴然たり。按ふに、クラッフの出でし時は、恰もフルードのいへる如く「オックスフォオ
ドは信仰と不信仰との二氣が有爲なる青年の腦裡に旋風の秋葉を捲くが如く相
追驅せし中心」にして、クラッフは此の間に於て兩者の一に就くの輕忽にして危險な
るを知り、斷然中立してたゞ最も穩健なる道念に依頼して一身を修め、以て靜かに
大聖の降誕を待ちしが故に、其の外見一見甚だ卑屈なるが如く、遂にセィンツベリ氏
等をして「彼れは信ずるの力を缺き、反抗するの勇氣を缺きし」ものなる如く思はし
むるに至りぬ。されどこは、畢竟ずるに、彼れが中心の頗る强健なりしが爲なるべ

し。ダウデン氏のいへる如く、彼れが健全なる道念底より出でたる詩歌は、他の徒らに懊惱する青年輩に取りては一貼の安慰劑とも稱しつべし。たゞ惜むらくは、彼れが心中の信仰と不信仰とが兩々相軋轢して火を發するに至らざりしが故に、其の詩篇に於て雲湧き龍躍るの壯絶快絶の觀を見る能はざりしことを。

フレデリック、ロッカアは一千八百二十一年に生れき。初め海軍省に奉職せしが、後ち官を辭して文學に從事し、一千八百五十七年初めて "London Lyrics" といふ作を公けにせり。爾後多く作らず、只だ時々彼の篇に追加せし外に、同六十七年 "Lyra Elegantiarum" と題せる詞華集(アンソロヂー)を出だし、同七十八年詩歌と散文との雜著集 "Patchwork" を公にしき、其の伎倆はこの篇に於て見るべし。或はこの作を評して其の外形サウヂーが "Omniana" に似たりとせり。"My Guardian Angel" は短篇の逸話にして文致の簡潔雅馴なる、同種中稀れに見る所なり。セインツベリ氏曰はく、若しチャールス、ラムをして此の時代に生れしめて此の境遇に立たしめば、必ずロッカアと同一樣の作をなしゝならん」と。

エドワード、ロバアト、リットンは小說家として名高かりしリットン卿の子なり。其の世に出だしゝ詩篇には、久しく Owen Meredith といふ假號を用ひたり。一千八百三十一年に生れき、十八歲にして外交官となり、爾後三十年間歐洲の各國に轉任し、遂に父の爵を紹ぎ、同七十六年には印度總裁に任ぜられき、同八十年辭して國に歸り、七年の後全權公使となりて佛京パリに赴き、同九十二年かしこにて歿しき。其の政治上の生涯かくの如くに煩劇なりしにも拘らず、詩歌の作頗る多し、"Clytemnestra" (1855) "The Wanderer" (1859) "Lucile" (1860) "Songs of Servia" (1861) "Fables in Songs" (1874) "Glenaveril" (1885) "After Paradise (1887) 等は其の重なるものなり。此の他、傳記、小說及び他人との合作詩集あり、又遺稿は "Marah" といふ詩集及び "King Poppy" といふ敘事詩の二卷となりて歿後に出版せられき。

リットンが全作についての眞價は今なほ定まらず。其の作いと多きのみか、諸種の詩人の影響を受けて、其の躰も種々なり。さりとて摸倣者とはいふべからず、獨創の才も見ゆればなり。又批評家に擯斥せらるゝは、俗受けを主となせるが故かと見れば、世俗には寧ろ高尙に過ぎて悅ばれざる趣あり。隨うて批評は紛々たれど、

要するに、彼れが聲價は其の眞價よりも下にあるが如し。彼れが詩風の晩年に至りて粗〻一定せしが如くなれど、はじめはテニソン、ハイネ、ブラウニング等其の他あらゆる名家の作に摸倣し、時には換骨奪胎にもあらず、斷章取義にもあらず、他の趣向をも、詞藻をも其のまゝに借り來て、殆ど增減せざりしことあり、爲めに剽竊家といふ非難を被るに至りき。然れども第一彼れが詩は抒情詩として得難き實際的、眞誠的、不易的の質あり、以て其の詩躰の蕪雜なる弊を補へり。"The Wanderer" の "Fata Morgana" "Buried Heart" の如き "Marah" の "Experientia Selenites" の如き、是れなり。第二は其の獨得の獨語風の話說なり、こは他の企て及ばざる所にして、後には一變して寓言風となりしが、若し初めより終りまで此の詩躰に從事して此處に其の脚を立てしめば、其の名聲或は今日の如きに止まらざりしならんか。

モオリスとスヰンバアンとは、詩統の上より見れば、前にも云へる如く、彼のロセッチと同派に屬す。其の中後者は尙現に生存し、モオリス將た一昨年逝りしばかりにて、其の評未だ定まらざる有樣なれば、茲には唯〻一わたり其の名作に付てのみ略說し置くべし。

ウィルヤム、モオリスは一千八百三十四年ロンドンに生れ、オックスフォードなる Exeter College といふ大學にて敎育せられし人也。其の全躰の詩風はチューサアが物語歌を師とし、且つ荒、唐、復、古 "Renaissance of Wonder" を主義とせる一種新躰の物語歌を以て本領となせりしが如し。處女作を "The Defence of Guevevere" といふ傳奇風の短篇を集めたるものなり。篇中ブラウニングにひとしく、晦澁の個處も少からねど、又一種の妙味あり。其のアーサアに關する物語歌は、テニソンが "Idylls of the King" に比すれば遙かに劣れる作なれど、テニソンの出でざりし前に出版せられしかば、世評は頗る高かりき。モオリスが世界及び人間に對する當時の感想の最もよくあらはれたるは "Haystack in the Floods" の篇中にあり。七年の後 "Life and Death of Jason" と題せる長篇の物語歌をものし、こゝに全く其の詩躰を定め、遂に程なく彼の最大作 "The Earthly Paradise" (『地上樂園』) を作するに至りき。『地上樂園』は四長篇より成り、一千八百六十八年より同七十年に亘りて出版せられき。

其處へ赴かんとて、船を艤して、そこともなく漫々たる大洋に乘り出したるが、途中にて暴風に遭ひ、これより數年間海上に漂ひ、種々の艱難を經、遂に蠻民の住める一小島に漂着し、そこにて件の蠻民どもより種々に歡待せられければ、其の報いとしてこれより一年の間、毎月二回、其の知れる奇譚を物語りす。

といふ筋なり。第一卷には三月より八月に至るまでの分十二篇を收め、第二、第三、第四卷には九月より翌年の二月に至る十二篇を收め、都合二十四篇より成れり。

チョーサアが『カンタアベリ物語』の筋と相似たるを見るべし。こは作者も自白せし所なり。詩律もチョーサアのに同じく三種を用ひたり。其のチョーサアと異なる所は、物語の間に劇詩的妙味を加ふる能はざりしことゝ、其の當代の事件を詩中に取り入れざりしことゝにあり。其の初めの三卷は全く英國古代の文致によりてものせしが、其のアイスランド文學を愛するに及びしころの筆に成れる末卷にては、ノルエー文士の敘事的筆致をも摸したり。卷中の物語は、孰れも作者の創案にあらず、或は古詩歌、或は古傳説の中より得たるものにて、通常人の見聞きて無趣味、殺風景の物語となせるものゝ中に一種の生命を發見し、これを醇化して生氣を與へ、是れに衣するに典麗華彩の章を以てしたる也。而して此の長篇は話説の程合

ひ其の宜しきにかなひ押韻、句法亦た頗る變化に富めるが故に、讀者厭倦の情を催さゝるのみならず、よく篇中の人物と共に夢幻の境に遊ぶを得。且つ作者は大に自然界を愛し、戸内よりは寧ろ戸外に於て生活せし人なるが故に、篇中こゝかしこゝ、モオリスの作は、尙"The Story of Sigurd the Volsum"及び"Hope and Fear for Art"の二著あり、前者は一千八百七十六年に出版せられき。『アセニヤム』(雜誌)は此の篇を以てモオリスが最成功の作となし、其の文章の强健なるところ、其の結構の劇詩的なるところ、共に『地上樂園』の上にありとなせり。後者は同八十二年の出版にかゝる美術講話集(五回分)なり、南歐の美術を推稱し、ラファエル以前の典雅高渾なる繪畫趣味を論じたるものなり。

アルヂャアノン、チャールス、スヰンバアンはモオリスよりは三歳の弟にて、同じくロンドンの人なり。少時佛蘭西にて敎育を受け、一千八百五十七年國に歸りてオックスフォオドなるバリオル、コレッヂといふ大學に入りしが、卒業に及ばずして校を退き、二十三歳の時初めて脚本二篇を綴りて公けにしぬ、"The Queen Mother"

及び "Rosamond" 是れなり。共に一種の筆力を具へざるにあらねど、筆路、結構なほ未だたどゝし。同六十五年更に劇詩 "Atalanta in Calydon" といふを作しぬ、想形共に全く希臘風のものなり、想像の豐富シェリーに次ぐとの好評ありき。同年又 "Chastelard" をものしき。蘇國の女王メレーを主人公となせる悲劇なり、女王が冷薄荒淫の性格よく寫されたり、作者は之れが爲めに蘇格土黨の人々には頗る憎惡せらるゝに至りきといふ。翌年 "Poems and Ballads" といふ詩集を出だしき。作者が彼の世間の批難に抗して美術は道德、宗教、政治以外に獨立すべきものなりと極端に論じて、愈〻物議を釀すに至りしはこの時の事なり、但し當時の極端なる主義及び缺點は次第に後年に至りて緩和せられ、若しくは除かれたり。同六十七年 "A Song of Italy" を、翌年 "Seina" を、同七十年 "Ode on the Proclamation of the French Republic" を、同七十一年 "Songs before Sunrise" を、作しき。一生中の最長篇を "Bothwell" とす、同七十四年の作なり、"Chastelard" の續篇として女王メレーの後日譚を劇詩躰にものせる敘事詩なり、凡一万五千行を以て成り、登場人物重要なるもの數十人の多きに及べり、あまりに長篇なれば舞臺に上らしむる望みはなけれど、人物の性格はよく現はれ、殊に彼のフルードの史筆に基きて物せる女王メレーの如きは、執拗多情、酷薄にして詭策に富める、マクベス夫人の面影ありと稱せらる、蓋し彼れが劇詩中の白眉なり。これより現今に至るまでの著作中にて、重なる者を擧ぐれば、"Poems and Ballads" の第二集(一八八〇) "Songs of the Sprigntides" (一八八〇) "Studies in Song" (同) "Mary Stuart" (一八八一) "Tristram of Lyonesse" (一八八二) "A Century of Roundels" (一八八三) "Marino Faliera" (一八八五)及び "Miscellanies" "Victor Hugo" (一八八六)等なり。

さて全躰に亘りてスヰンバアンが作を見るに、シャープのいへる如く、「思想及び意義の深邃幽遠よりも感情の富麗にして光炎あるところに其の長處は存するが如し。彼れが思想は、到底ブラウニング、テニソン、アーノルドの深く且つ高きに及ばず、否、ブリ、ラファエル派中にてもロセッチ、モオリスの飄逸なるに及ばず。而して後年の作を取りて調査すれば(第一)、甚しくポクトル、ユーゴーの感化を受けたること(第二)、甚しく小兒を愛すること(第三)、大に自然界を愛し、殊に海洋を嘆美せしこと、等の特質歴々たり。彼れは其の海洋癖を利用し、以て其の詩調の變化を扶けたり、平潮漫々、

歇帆の斜陽を帶びて走るが如き、激涙澎湃、虬蛟の雨を呼びて叫ぶが如き、皆彼れが聲調の素となれるもの也、宜なる哉、さばかりの長篇に於て讀者の毫も單調に厭くことなきや。實に彼れが詩は「意義の詩」といはんよりも、むしろ「音調の詩」と名づくべし。意義の上に於ては、到底シェリーとも併ぶを得ずと雖も、音調の上に於てはよくテニソンをも凌がんとす。

尙ほ說きもらせる第二流の詩人若干と、其の作の一二とを揭ぐること下の如し。

Lord Houghton ..... "Brookside" "Strangers yet" 等

Alfred Domett (1811–87) ..... "Ranulf and Amohia" 等

Charsle Mankay (181–90) ..... "Cholera Chant" "O, ye Tears" 等

Mrs Archur Clive ..... "IX Poems by V." 等

Roden Noel (1834–93) ..... "A Little Child's Monument" 等

Thomas Ashe (1836-89) ..... "Sorrows of Hypsippyle" 等

Charles Stuart Calverley (1831-84) ..... "Veres and Translations" "Fly Leaves" 等

Lady Dufferin (1807-67) ..... "The Irish Emigrant" 等

Emily Bronte..... "Last Lines" 等

Mrs. Norton (1808-76) ..... "Annuals" "The Lady of La Garaye" 等

第十七章　最近小說家

時勢と小說——シャーロット、ブロンテ女史——其の姉妹——カアラー、ベル——其ノ傑作『ヂエーン、エーヤ』——ジョールヂ、エリオット女史——マリヤン、エヴァンス——其の傳——其の諸作——ヘンリ、リュヰス——チャールス、キングスレー——其の小說及び觀語——アンソニー、トロップ——チャールス、リード——ヘンリ、キングスレー——スチヴンソン

第十九世紀前半の小說家は、曩きに「新代小說家」の章に略說したる如し。彼等はもとより新代小說家の先驅たりしには相違なけれど、之れを同後半期に出でし小說家と比ぶるときは、其の間顯著なる差等なきを得ず。何ぞや。前半期の小說家も、何れも一世の英才にして、其の作に玩賞すべきもの頗る多かれど、よく觀れば時勢、との關係流石に未だ親密ならず、隨うて「第十九世紀前半期の英才」と特稱すべき點乏しく、寧ろいつの時代に置くも差支なき類のものたり、其の然らざる者だに新代小說家の特徵を備へたるは殆どなし。一千八百五十年以後に出でたる小說家は

是れと異なり、いづれも時勢の推動と大關係を有し、オックスフォード派の運動、科學の勃興、教育の普及、美術の重視せらるゝに至りしこと、クリミヤ戰爭後英國の再び大陸政畧に關渉するに至りしこと、盛んに瓦車、瓦船を用ひて大に貿易を興しゝこと、濠太利及び其の附近諸島の開拓、印度騷擾(Indian Mutiny)の後ち東印度會社の權力の移動及び一般社會に於ける改進主義(リベラリズム)の發達、等の如きは、皆此等小説家に影響する所大なるものありき。さて一々につきて其の影響を精査せば我が讀者を益することと多かるべけれど、今は之れを試みん餘地なければ、たゞ就中最も著明なるブロンテ、エリオット、キングスレー等數名の上のみを略叙して止まん。

ロット、ブロンテ女史とす。一千八百十六年に生れき。愛蘭土の人、ヨオクシャヤの牧師の女なり。姉妹五人あり、幼にして母と二姉とを喪ひ、處々に流寓し、窮迫の間に教育せられ、竟に殘る二妹と共に教師となりてブラッセルに赴きぬ。此の三人皆文才あり、一千八百四十六年始めて合作の『詩集』("Poems")を公けにす。此の編皆匿名を用ひ、ブロンテはCurrer Bellと號し、二妹エミリ及びアーンはEllis Bell及びActon Bellと號しき。次ぎに小説の作あり、ブロンテは"The Professor"を、エミリは"Wuthering Heights"及び"The Tenants of Wildfell Hall"を、アーンは"Agnes Grey"を作しき。而してブロンテが"The Professor"は惡作なりとて出版を拒まれしかば、女史はこれより大に發憤し、其の一世の名作『ヂェーン、エーヤ』"Jane Eyre"の著に心を凝らし、遂に一千八百四十七年に脱稿しき。されども之れを購ふ書肆なく、纔かにスミッス及びエルダア二家の好意によりて出版せられしが、攻擊の聲頗る高かりしと共に、讀者また頗る多かりき。翌年エミリ沒し、其の翌年アーン亦た歿しぬ。此の年女史"Shirley"をものし、同二十五年"Villette"の作あり、二年の後結婚し、翌年みまかりき、齢四十歳。

ブロンテが作の、かく一方に於て攻擊せられながら、一方に於て非常の喝采を得たりしは、蓋し女史が作は新小説の先驅たりしに因る。抑〻女史の出でゝ其の彩筆を揮ひしは、恰もスコット既に死して、サッカレー尚未だ出でず、スコットが模倣者も概ね樣に依りて葫蘆を畫くに止まり、讀者漸く其の千篇一律に飽かんとし、ヂッケンス一流が近代的家庭小説はた纔かに呱々の聲を揚げしに止まり、其の四肢は未だ發達せ

ずして宗教的と懐疑的との間に彷徨せりし時にあり。女史が小説は此の過渡時代と新時代との間に架せる一橋梁にして、實に女史が名をして不朽ならしむる所以のものは、一つはかく新代小説の先驅たりしに因り、一つは其の固有の特質の大に見るべき者あるによれり。「所謂固有の特質とは何ぞや。女史が半世の閲歴より得たるもの是れ也。「其の傑作"Jane Eyre"に就きて見るに、女主人公ヂェーンの性格の、其の自叙躰の文に於いていみじく現はれたるは更にも云はず「醜主公(アグリー、ヒーロー)」ローセスタアの如き人物を描きてよく其の神に入りしものは、皆其の閲歴より來れること、衆批評家の嘖々して止まざる所なり。」按ふに、閲歴の用を爲すは、作者に詩人の資ありて後の事にして、閲歴は詩人にとりては到底第二位以上にあるものにあらざれど、三才直觀の大詩人だに、尚且つ其の作礎として若干の閲歴を要すべく、然らざるものだに尚ほ閲歴によりて大に其の文想を發達する機會を得べし、そは彼のバイロン以下の詩人に徵しても明かなり、ブロンテ女史が閲歴の其の小説を幇けしことの少小ならざりしやまた爭ふべからず。然れども第二流以下の詩人を利するものも、害するものも、双つながら閲歴なり、某批評家もいひし如く、女史をして若し尚十年、二十年の壽を保たしめ、これをして例の如く小説に筆を執らしめば其の名聲恐らくは今日の如きを得ざりしならん。何が爲ぞや。女史が閲歴は女史の爲めにほゝ其の用を成し果てたればなり。女史が多少の創意を加へきといふ、醜主公の性格の如きも、沙翁の大才あるにあらずば、よく之れを再びすること能はじ、況んや女史が筆は少妹エミリが如き妖嬌を欠きたれば、永く讀者の愛玩を持續する能はざるべきをや。畢竟ずるに"Jane Eyre"の如きは、たゞ一篇にてこそ珍品なれ、二篇、三篇と續出するに及びては、讀者漸く之れを厭棄せんや必せり。論じてこゝに至れば、ブロンテ女史が夭折は寧ろ其の幸なりしものゝ如し。セインツベリ氏は曰はく

> 女史が文思は、如何に薄弱にして、其の詞藻は如何に粗厲なるも、其の小説は兎に角に全く創新なるものにして、決して過去のものにあらず、現在及び未來へかけて生命を有すべきものにして、其の文學史上の價値に至りては、斷ずてこれを摸倣小説の圓滿なるもの以上に置かざるべからず。

と。

少妹エミリが作また名あり、一時はブロンテ女史を凌ぎたりしこと、上にいへるが

如し。概ね短篇にして其の描く所の性格はた廣からずと雖も、創新の點に於ては其の姉に讓らず、輓近小說壇の一佳什なり

ブロンテがみまかりし一千八百五十五年の翌秋に綴られ、同五十七年の一月より"Scenes of Clerical Life"と題したる小說集陸續『ブラックウッド雜誌』に掲載せられき。著者はジョールジ、エリオットと稱せり。ジョールジ、エリオットとはマリヤン、エヴンスの假號なり。女史が此の匿名を用ひて作せしや其の作巧妙なりしが爲めに大に讀詩社會の好奇心を呼び起し、作者の實名に就いて推測揣摩紛々たりき。或は之れを英國々敎會に屬する牧師輩の著ならんといひ、或は之れをケムブリッヂ出身の牧師ならんといひ、其の他思ひ〳〵に想像して著者の素性を臆測し、評壇騷然たること二年餘、迷誤は迷誤を重ねて著者をマリヤン、エヴンス女と知るものなく、獨りヂ、ケンスが烱眼のみ著者の到底女性なるべきを看破し、万一男子ならば古來未曾有の女性的頭腦を有するものならんと言へりき。マリヤン、エヴンスとは何者ぞ。

マリヤン、エヴンスは一千八百十九年英國ミッドランド山間ウォー井ックシャヤの

一邑に生れき。幼時は全く此の片田舍にて敎育せられ、宗敎上の信仰頗る篤かりしが、二十歲にして父に從ひ、コヱントリに渉り、ユニテリヤン派の人々と相交り、これより漸く信仰上に疑惑を生じ、遂に敎會を脫するに至りぬ。女史がストラウスの"Leben Jesu"『基督傳』を飜譯して、始めて文壇にあらはれしは、此の時なりき。千八百四十九年父を喪ふ、すなはち去りて瑞西に赴き、ゼネヴの湖畔に質素なる生活を營み、靜かに崇高なる道念と微妙なる詩思とを養ひ、且つ古文學を研究することを一年餘、歸り來れば生活の急務焦眉の間にあり、乃ちロンドンにとゝまり、『ウェストミンスタア雜誌』の社員となり、又フォイエルベッハの"Wesen des Christenthums"を飜譯しき。此の時女史はカーライル、ミル、スペンサアの名士と交り、大に啓發せらるゝところあり、又スペンサアの紹介によりてジョールジ、ヘンリ、リュヰスと相知り、遂に之れと婚して獨逸に遊びぬ、時に一千八百五十四年なり。是に於て夫は『ゲーテ傳』を起稿し、妻はスピノザの倫理書を反譯して、辛くも其の生を支へ、此の間若干の知人を得て歸國しぬ。

リュヰスはもと哲學者にして科學者的頭腦を有し、亦た詩人的詞才に富み、小說作者

ともなり得べき資質ありき、其の批評の眼識は最も犀利にして、つゐに其の妻の劇詩家的才能あるを認めしかば、屢〻勸めて脚本を作らしめんとせり。エヴンスは夫に勸められて、遂に年來の神興を驅りて一篇の小說を作しぬ、前にいへる "Scenes of Clerical Life" の第一篇は是れなり。夫妻は世間がこの小說を喝采する聲々をあとにして再び獨逸に遊び、妻は「第二の小說に着筆しぬ。此の著は歸國の後に脫稿し、"Adam Bede" と題して出版せしに、讀者の喝采は前著に過ぎ、ヂッケンス、スペンサーの如きも賞讃措かざりきといふ。」一千八百六十年、第三の小說 "The Mill on the Floss" 出でゝ、エリオットの名聲は全く定まりぬ、英國空前の女作家として騷壇之れを稱揚せざるものなきに至れり。翌年 "Silas Marner" の作あり、同六十三年 "Romola" 成りぬ、學藝復興時代の伊太利の一話を材料となせるものなり。これより "Felix Hort, the Radical" (一八六六)雜詩 "Spanish Gypsy" "Tubal" 等(一八六八——七四) "Middlemarch" (一八七一) "Daniel Deronda" (一八七六)及び論文集 Impressions of Theophrastus Such" 等の著あり。同七十八年夫リュヰス歿しぬ。二年を經て女史はヂョン、クロッスに再嫁し、同年十二月に歿しき。一生の言行と書簡とは、歿後其の夫クロッスの手に輯錄せられ、題して "Life and Letters" といへり。

「女史は、自由を尊尙せしと共に、敬虔の念も深く、剛毅なる氣象と慈悲深き情とを兼ね具へき。」女史が朋友の驚きを顧みずして醜夫リュヰスと婚せしが如き俠氣、將た此の間より起りしものなりといふ。

女史が著作は頗る多し、詩歌、論文、飜譯等、其の冊數殆ど小說に匹敵す。然れども、精しく其の質につきて見れば、「女史が詩歌はたゞ思辨力に富める同代人士の思想を歌へるに止まり、其の歌ひざま淺膚露骨にして、殆ど詩歌的美趣なく、時に辭句の妙なるものなきにあらねど、所謂粗布に施せる色彩にして、絹布の光澤なし。」其の論亦要するに時の風潮の一波たるに過ぎざる概あり、其の崇拜者を悅ばしむるにとゞまり、未だ識者を益するに足らず。」畢竟、女史が眞價はその小說にあり、一千八百六十年より同七十年に至るまで、即ちサッカレー既に筆を絕ちて、ヂッケンス未だ傑作を出ださゞりし間に於て、英國小說壇中人意を强うするに足りしものはひとり女史ありしのみ。」況んやヂッケンスの歿後をや、「英國空前の女作家」といふも敢て溢美にあらざるなり。

エリオットが小說を讀みて何人にも明かに了解せらるゝは、此の作者に二方面あることゝなり、而して件の二方面を代表せる作を"Silas Marner"と"Romola"とす。第一、女史はよくユーモアの眼を以て些末の人事を洞視し、其の奇爪(オッヂチース)を描きて巧みに人情、世相の微を穿てり。"Silas Marner"はいふに及ばず、"Scenes of Clerical Life"の各篇は皆此の種の伎倆をあらはせり。此の伎倆たる、女史が小說に不易の價値あらしむるものにして、亦女史が他の一面に比するも一層健全にして精妙なるものなり。

按ずるに、これ女史が不幸なる半生の長日月間、靜かに人世の辛酸を味ひたる結果にして、其の成功は女史が結構的創才のいみじかりしに因るといはんよりは、寧ろ其の諷諧的觀察の精微なりしに因るといはんかた穩當の評なるべし。蓋し女史が創才は豐かなりしにあらず、寧ろ科學若しくは準科學を好めりしなり、此の科學癖は遂に女史をして第二の方面を營ましめき。女史が科學に偏する傾向は、女史が"Silas Marner"をものせし後更に一層著くなり、遂に特別の蘊蓄によりて"Romola"を作するに至りぬ、女史の"Romola"をものして材を伊太利の學藝復興に取るや、經營慘憺、女史自らも「我れ此の書の稿に著手せしときは妙齡の處女なりしも、其の脫稿の際は、はや白髮の嫗となりにき」といへり。女史が勞苦の大なりしを見るべし。」セインツベリ氏曰はく

こゝに至りては女史の小說は活物にあらず、天才の創造にあらずして研究の製作なればなり、快通の逸作にあらずして苦心の修練なればなり、否、もはや觀察の成果とすらもいふべからざればなり。

と。而して女史が此の研究の作は女史が近代英國を主題とするに及びて、一層著くなりぬ。女史が後期の作は、明に或る「目的」を標幟としてものすることゝなりたり。然らば女史が目的とは何ぞや。女史が所謂科學(準科學)とは何ぞ。

夫れ近世の科學は、其の進步の結果として、人間の情(ハート)を破棄しさながら、其の愉々快々たる希望を絕滅せんとするものゝ如し。此の時に際し、情を以て立たんとする人々は、當さに如何してかこれに處すべき。所謂眞理の迫害に堪へて、よく其の生存を保たんとせば、情は如何なる決心を持して如何なる地步をか占むべき。これ女史が其の想像の才を驅りて自ら解釋を試みし問題なりき。女史は及ばん限り科學的知識を攝取し、科學を經とし、感情を緯として一種の倫理觀を織り成さんと

企てき、即ち其の最高目的の爲めに科學を使用せんと企てしなり。最高目的とは何ぞや。倫理上の大信仰を確立すること是れなり。實に倫理思想は女史にとりて第一義にして、詩歌と學理とは要するに其の器具たるに過ぎざりき。」されば女史の科學を研究せしや、主として倫理の方面に於てせり、及ぶべくんば科學と調和し、人情と調和したる新倫理觀を得んことを望みしなり。而して其の研究の結果として、女史は「世界に和樂なくしてたゞ安心あり」といふ結論に達したり。曰はく

世には(少くも現今の如き世には)眞の和樂なるものなし、若しこれありとせば、これ其の人の心の淺薄狹隘にして世界大の悲痛を感ずる能はざるが故の迷妄のみ。心の大なるものは接觸するもの多し、彼等は概れ悲痛に接觸す。彼れの處すべき唯一の方法はたゞ自棄(セルフリナウンシエイシヨン)の安心のみ、云々。

こゝに於て女史は此の上の研究を無要とし、(或は寧ろ研究するにえ堪べずして)直ちに其の所信を表白することに力めたりき。女史が後期の作は多くかくの如くして成りしものなり。

女史はかくの如く世を哀觀せりき、而も厭世觀に陷りしにはあらず。人間は殆ど必然的に罪惡に傾くものなり、かるが故に毅然として罪惡に打克ち、其の誘惑に堪ふる、是れ即ち最高の德にして、最高の勇(ヒロイズム)なりといふ、是れやがて女史が終世の確信なりき。女史は常に此の思想を以て小説を作せしなり。故に其の人物は多く缺點ある人物にして、美德の模範たるは殆ど絶無也、隨うて、ふと見れば女史が倫理觀と矛盾背馳せるが如く思はるゝも、これやがて女史の小説をして不朽ならしむる所以なり。」女史は人間罪惡の必然なるを熟察し、深くこれに同感し、以て其の筆を執りしなり、是に於て讀者は其の人物の缺點を知りて尙ほ其の愛すべきを感じ、時には以て人間世相の實躰を見得たるが如き感をなす。是れを倫理小説の泰斗たるリチャードソンに比せんに、兩者共に小説に倫理的目的を置く、兩者共に英國的なり、而も前者は自己の感想を作中の人物に注ぎて之れを理想的ならしめ、後者は作中の人物に自己を同化し、自ら其の人となりて「悲喜哀歡す。前者を主觀的と名けば、後者は客觀的、前者を敎訓的といはゞ、後者は心理的なるべし、而も其の倫理的なるに於ては一なり。リチャードソンとエリオットとをしてかくの如く異同せしめしものは、もとより品性の相異にもよるべけれど、一つは明かに時勢の異同すなはち變遷に歸せざるべからず。讀者の人世觀の未だ哲學的ならざる時代に於ける倫

理小說はリチャードソンの敎訓小說にして事足るべけれど、讀者の人生觀の全く哲學的なる十九世紀に於ける倫理小說はエリオットの如き心理的のものならざるべからず。エリオット謂へらく、今代の人士にはもはや敎訓の必要なし、自ら思辨すればなり、且つや小說を以て敎訓の奴となすは美術を賊するもの、と。是に於て女史は其の所觀の世相に從うて心理的に之れを活寫し、讀者をして自ら人間の何物たるを覺らしめ、以て自ら處世安心の最良法を知らしめんと欲しき。是れエリオットが倫理小說の特質にして、亦た最近倫理小說の特質なり。

女史の沒後其の名聲は、生前の勢ひに反動して頓に墜落し、遂に諸批評家をして女史が晩年の理論癖を酷評せしむるに至りしが、よく好惡を離れてこれを觀れば、女史が倫理小說はもとより意義なきものにあらず、また其の小說的伎倆の尋常ならざるは更に拒言を容れざるべきなり。

ジョールジ、エリオット女史と同年に生れ、之れと同時代の小說壇に於て名聲相讓らざりしものをチャールズ、キングスレーとなす。風光畫の如きデヴンシャヤの州中にても最も明媚の一邑に住める牧師の家に生れ、和煦春の如き家庭に生ひ立ち

C. Kingsley.

し、彼れは嚴格にして變化なきミッドランドの山中に生れて夙に蕭殺たる秋霜に惱まされたりしエリオット女史と共に、各〻其の境遇の特色を表せり。前者は和平流暢、後者は森嚴精刻、而も共に十九世紀後半の思想を代表す。

キングスレーは長じてロンドン及びケムブリッヂの大學に入り、優等の譽を得て卒業し、直ちにハムプシャヤなるエヴァスレーといふ地の宣敎師となり、一千八百□十四年牧師長に進み、在職三十二年にして同七十五年に歿しき。是れより先きケムブリッヂ大學に聘せられ、近世史の敎授を擔當し、九年間この職を兼ねたりしが、小說家の眼孔を以て過去を觀察せしが故に、彼の些末の事實を把へて因果纒綿の模樣を述ぶること義兄フルードにも讓らざりしが、彼の「概括的史眼」に至りては、到底フルードの十が一にも及ばず、在職九年にして辭任し、一千八百六十九年チェスタァのカノン法敎師となり、同七十三年又ウェストミンスタァに轉じ、竟に女皇陛下の侍僧に任ぜられき。彼れ嘗て西印度に航せしこと一回、得る所少なからざりきといふ。

キングスレーの作は頗る多し、其の種類亦た甚だ多く、概して佳作なり。始めて其の著を公けにせしは一千八百四十四年なり、題して "Village Sermons" といへるは平

明流暢なる論文集なり。次ぎに韻語の作若干あり、一千八百四十八年「"Saint's Tragedy"といふる悲劇をものしき、ハンガリーのセント、エリザベスの事蹟を材とせるものなり、脚色の變化に富みて、詞句華麗なり。」翌年小説"Alton Locke" "Tailor and Poet"の作あり、且つこれより數年間に若干の詩篇をものしき、(いづれも匿名)皆見るべし。

同五十八年"Andromeda and other Poems"を作しき、此の篇六歩格を用ひて甚妙と稱せらる。其の他の作にて名高きものを擧ぐれば"The Last Buccaneer" "The Red King" "The Three Fishers" "The Starlings"等なり。さて其の本領たる小説の處女作は一千八百四十九年に成りし「"Alton Locke" "Yeast"といふる亦名あり、文躰も結構もなほ未熟にして、生硬の個處多けれど、一種の生氣あり、當時英國を聳動せし勞働問題、民權擴張問題等を捉へて、具象的にその解釋を試みたる點、豁かに一家の風をなせり。」是れより先きキングスレーは基督教的社會主義派に入りてモーリス(Maurice)と相結び、短篇を草して新聞雜誌に盛んに其の主義を發表し、又Fraser's Magazine"の誌上に、富麗の文章を以て文學上、遊戯上、其の他種々の方面より

「同じ主義を唱道せしが、遂に彼の社會主義を描ける第二の小説"Hypatia"をものし、續いて「一千八百四十五年には其の傑作"Westward Ho!"を作しぬ。」二年を經て"Two Years Ago"成りぬ、材をクリミヤ戰爭に取れるもの也。」最後の作を"Hereward the Wake"とす、同六十六年に成りぬ。キングスレーに對する評論は今尚紛々たり。

キングスレーが社會上、宗教上に關する意見は、以上の著作の外、公開の演説及び讃美歌、論文集等によりて發表せられ、何れも多少の聲譽ありき。「但し其の社會改善に熱心なるや、竟に其の小説に累をなして、粗雜の議論癖は常に其の作に伴へり。而して其の議論たるや、論理錯然、趣旨散漫、情あまりありて理隨はず、而して他の攻擊に遇ふや、憤激怒罵、毫も假借する所無し。」ニューマンとの論爭の如きは、この瑕疵の最も著く現れたるものなり。ダウデン氏曰はく。

キングスレーの、一方に於て論客、説教家たりしことは、其の詩人、小説家たりし方面に一方ならぬ不利を與へたり。彼れはあらぬ爭鬪の爲めに靜穩なる創作者たるを得ざりしなり。さはれ、爭鬪はもと人間の本性に屬す、何ぞ獨りキングスレーを咎めん、況んやキングスレーが諸名作は件の鬪爭の主題たる社會問題に對するキングスレーが抱負意見の所産なるをや。吾人はたゞ其の平明なる説明に流れて、美術の神秘を忘れ、人世

の隱微を歎ふ能はざりしを惜む。

と。而も當時の風潮に徵すれば、キングスレーが此くの如きに至れる、亦た止むを得ざりしものあるなり。蓋し、カーライルのいへる如く、所謂勞働問題は吾人が當來直接の大問題なり。苟くも熱誠ある士にしてそが研究に志さんか、一歩は一歩と其の放棄しがたきを感じ來らん。しからば熱誠燃ゆるが如き詩人のこれが研究に熱衷せる、異とすべけんや、況んやあくまでも實際的なる十九世紀の英吉利人をや。此の問題たるや、彼の下級勞働者を煽動することを能事とせる一種の俗社會主義とは大に趣を異にせり。其の主導は彼のモーリスにしてキングスレー、ラドロー (Ludlow) 等これを補翼し、一千八百四十九年一盟社を建てにき。「基督敎的社會主義派」これなり。謂へらく、人間は凡て上帝の兒孫なり、よろしく基督を媒として相結合すべし、基督敎の正敎として奉ぜられん限りは、彼の勞働者も相結合一致すべし、勞働者も兄弟なり、競爭を停めて共働せよ、と。該派の所說は實に此の如き單純なるものにして、或は刺りて「是れ粗暴なる凡神敎的大言」と言ふ者もありたりしが、其の所說の生命に至りては容易に奪ふべからざるものあり、基督敎の經典はこゝに至りて愈〻人間に密接し、又人間の肉躰と密接し、陳腐の凡說と譏られしものも、竟に一世の大問題となりぬ。實に當時英人中にても、精神界の人間にして普通社會の人間たるキングスレーの如きは無く、普通社會の人間にして精神界の人間たるキングスレーの如きはなかりしなり。

今委さにキングスレーが所說を評する餘地なけれど、かくの如くにして成れる彼れが小說は、明かに其の特質を現はし、爲に多少の瑕疵を釀しゝにも拘らず、彼れが天才は小說中の風景、性格、結構等にあらはれ、當代殆ど竝ぶものなき地に達しぬ。其の "Alton Locke" 及び "Hereward" 中の妙句は屢〻激稱せられ、就中前者のロンドン市中勞働社會を描き、又ケムブリッヂの瀟洒なる風景を寫せるなどは、爾後五十年間、幾多の模倣者をして茫然筆を投ぜしむるに足りき。"Yeast" は其の劣作に屬すと雖も、なほ後の批評家をして「熱情溢るゝが如く、靈活の氣全篇に充實したる作にして、この十分一の作だに尙ほ現今の小說界を動かすに足らん」と激賞せしめたり。其の "Hypatia" の悲慘にして結構複雜なる、"Two Years Ago" の妙句に富める、"Hereward" のパノラマ的なる、皆讀むべし。而して "Westward Ho!" の如きは、

愛國の士氣を以て充實せる歴史小説にして、著者が社會問題を離れたる小説の才はよくこの篇にあらはれたり。

アンソニー、トロ、ップは第十九世紀後半に出でたる一派の小説家の泰斗なり、母はトロ、ップ女史(一七八〇—一八六三)とて "The Widow Barnaby" (一八三九) "Domestic Manners of the Americans" (一八三二)等の作を著して頗る文名あり。兄トマス、アドルファス(一八一〇—)亦た歴史小説家にして、盛んに諸種の雜誌に寄稿せりき。アンソニーは此の系に生れて(一八一五)ウィンチェスタァ及びハーローの學校にて教育せられ、長じて郵便局の吏となり、此の間小説の作甚だ多く、讀者の喝采殆んど當代に冠たりき。一千八百八十二年に歿す。翌年其の『自傳』出版せられき。委さに其の作の由來、考察の手續等を發表せしかば、一時話柄となりにき。一生の作甚だ多く、中には散逸せるも少からねど、其の名作の大概は『バーセットシャヤ叢書』のうちにあり、例へば一千八百五十五年にものせし端物(スケッチ) "The Warden" 其の一生の傑作 "Barchester Towers" をはじめ、"Doctor Thorne" "Framley Parsonage" "The Small House at Allington" "The Lost Chronicle of Barset" 等皆この中に收められる。其の他

"The Three Clerks" "Orley Farm" "Can You Forgive Her" 及び "Phineas Finn" 等皆一讀の價あり。

トロ、ップが小説は、嚴にいへば、彼れが世界、人間の眞相につきて深く感得する所ありしが爲めに成りしものにはあらで、寧ろ種々の殊なる境遇に觸れて諸種の人物に接せしより其の皮相上の諸現象に通じ、さながらに之れを敘寫したるものと見るべし、是れ所謂寫實小説の一派にして、理想の分子を含まざるを特色とせるものなり。此の種の小説や、如何に上乘の位置に達するも、なほ世界、人間の眞相と對すれば、間接若しくは二重間接のものなるに過ぎず、他の深く感得する所ありて人生を描くものに比すれば、文學的價値は太く劣れり。宜なり、其の世に行はるゝも、たゞ一時の喝采を博するに止まりて、五年、十年の後には讀者の之れを顧みる者甚だ乏しきに至るや。

チャールス、リードは千八百十四年オックスフォオドシャヤに生れき。幼時は家庭にて教育せられ、其の後は全く獨學し、長じてオックスフォオドのマグダレン大學の校友に選ばれ、同四十二年狀師となりぬ。其の始めて筆を取りしは同五十年の頃に

して、劇詩一篇をものしき。これより始終脚本を綴りしが、成功の作無し。かくて同五十二年始めて "Peg Woffington" (小説)を作し、後更に十餘篇を著し、同八十四年に沒しき。

リードは頓智機才に富めり、"Peg Woffington" "Christie Johnston" "Hard Cash" "Griffith Gaunt" "Put Yourself in his Place" 等の作、皆能く讀者を感動するに足る、然れども往々にして好惡偏局し、褒貶宜しきを得ざりしかば、時に讀者をして眉を顰めしむるものあり。"Never too Late to Mend" (一八五六) The Cloister and the Hearth" (一八六一)などの如きは識者輩の賞美する所也。彼れは、雜報小説家の名ありき、些少の事實を種として咄嗟の間に能く其の詩趣を傳ふるに巧みなりし故なるべし。要するに、彼れはたしかに詩人たるの資を具へたりしなり、只惜むらくは近世詩人に必要なる批評的眼光微々たりしが爲に、主題の高下を選擇するに拙く、隨うて可惜逸才の往々にして其の用途を誤りしことを。

ヘンリ、キングスレーはチャールス、キングスレーの弟にして其の才或は阿兄をも凌ぐべしと稱するものもありき。 按ふに、感想の鋭さは阿兄より微弱なるも、

諷諧の力は阿兄に優りたり、要するに、作者としての性質は阿兄よりも健全なりき。惜むらくは、壽ゆたかならざりしのみか、生活の必要の爲めに筆を執りしこと多かりしかば、十分に驥足を伸ばすに至らざりき。一千八百三十年に生れ、ロンドンなるキングスコレッヂ及びオックスフォードなるウースタアコレッヂにて教育せられしが、中ごろ退學して濠洲に移り、かしこに住すること五年、一千八百五十九年故郷に皈り、彼の地の物語を小説に綴りて "Geoffrey Hamlyn" と題しき。こは二年後の作 "Ravenshoe" と共に一生の傑作と稱せらる。其の後尚第二の濠洲小説 "The Hillyars and the Burtons" 等の作あり。一千八百七十六年に歿しき。其の作大概は腹案粗漏にして、首尾相應ぜず、支離滅裂に了れるもの多けれど、兄チャールスに同じく、光景動作及び性格を寫すことに長じ、且つ十九世紀作者たるの特質あれば、少くも阿兄のに次ぐ作として、何れも讀むに足る。

ロバート、スチヴンソン Robert Louis Balfour Stevenson は十九世紀の後期に出でゝ小説に於けるローマン派風の新派を創始せし人なり。一千八百五十年に生れき。父は燈臺の吏にしてスチヴンソンは其の技師なりき。エヂムバラ大學を卒

業せし後は狀師をも兼ねたりしが、二職共に其の性質に適せざりしかば、齡三十歲の頃より文筆に從事し、『コオンヒル雜誌』に數篇の論文を揭げ、傍ら『ロンドン』の爲めに小話をも綴りき。爾後引續き "An Inland Voyage" (一八七八) "Travels with a Donkey in the Cevennes" (一七七九)『コオンヒル論文集』"Virginibus Puerisque" (一八八一) "Familiar Studies of Men and Books" 等の作あり。而して彼れが名聲の漸く揚がりしは、彼の有名なる "Treasure Island" を著しゝ後にあり。此の作は一千八百八十二年に成りにき、青年の讀み物としてはカピテン、マリヤットの作以來第一に位し、而して文學的價値は負かにマリヤットを凌ぎたり。かくて後更に一轉して神、仙、譚に趣向を凝らし、飄逸なる空想譚 "New Arabia Nights" をものし、次いで同種に屬せしむゝき "Prince Otto" (一八八五) "The Strange Case of Dr. Jekyll and Mr. Hyde" (一八八六) "Kidnapped" (一八八六) "The Black Arrow" (一八八八) "The Master of Ballantrae" (一八八九) "Catriona" (一八九三) 等を作しき。中にも "The Black Arrow" はヨオク、ランカスタア二家の奇話を本としてものせる作、最もよく其の殊才を示せり。"Catriona" これに次ぐ。一千八百九十四年病を得て歿しき。其の作、小說の他に、"Child's Garden of Verse" (一八八五) "Underwoods" (一八八七) "Ballads" (一八九一) 等あり、いづれも韻語なり。

上にも示せる如く、はじめスチンヴンソンは論說家としても知られたり。さて其の論文は一種獨得の着眼の流石に見るべきものなきにあらねど、論旨多くは散漫に失して堅實を缺けり。されば已れもまた論文の其の長所たらざるを曉り、遂に專ら物語をのみ作するに至りしが、其の神、仙、譚は、多少の瑕疵あるにも拘らず、尙ほ十九世紀の奇什として、長く後昆に傳ふるに足るべし。彼れは其の得意の話說文を修得せしに先ちて、大に內外の物語を玩味し、はじめは甲に倣ひ、乙に模し、頗る經營する所ありしが、竟に一家の躰を定め、兎も角も讀者をして一たび其の作を繙けばまた應接に暇なきの感あらしむるの妙に至れり。其のあまりに誇大に失し、形容のわざとらしきは厭ふべしと雖も、こはスコット以下物語作者の通弊ともいふべきものなれば、深く咎むるは酷ならんか。只惜むべきは、女性を描くに拙なることなり、宮媛や、處女や、妖婆や、大抵は活動せず、されば篇中に女性の多きもの程、兎角に興味の索然たるを感ぜしむ。

同時代の小作家にして敘し洩したるは下の如し。

Wilkie Collins (1824-1889) 俗に所謂ヂッケンス派の作家にして、著はす所 "The Dead Secret" "The Woman in White" No Name" "Armadale" (1857-65) "The Moonstone" "Cruise upon" "Wheels" 等あり。一時は名聲籍甚なりしが、今はやゝ饜かれたり。

George Henry Lawrence (1827-1879)……"Guy Livingston" "Sword and Gown" "Barren Honour" "Sons Mercy" 等

Mrs. Gaskell (1810-18)……"Mary Barton" (183) "Cranford" 等、近時却りて重んぜらる。

Dinah Maria Muloch 1826-1888……"John Halifax" "Gentleman" 等

Robert Surtees (?-1864)……"Mr. Forrocks." 等

Major Whyte-Melville (1821-1878)……"Holmby House" "Sarcheden" "Gladiators" 等

Francis Edward Smedley (1818-1864)……"Frank Fairleigh" (1850) "Lewis Arundel" (1852) "Harry Coverdale's Courtship (1854) 等

第十八章　最近評論壇

雜誌世界――『ペンタスホールド、ウォオタ』――主筆ヂッケンス――ウィルキー、コリンス――『サタアデー、レヴュー』――『スペクテートア』――『コオンヒル、マガジン』――『マクミラン、マガジン』――サッカレー及びアーノルド――キングスレー兄弟――雜誌と評論――『フォオトナイトリ』――『コンテムポラリレヴュー』――『十九世紀』――評論家――文章家――バジナット――アーノルド――ラスキン

定期出版物との興隆其の記者の特質とに就いては、既に前章に其の要を示したり、本章に述べんと欲するは、件の定期出版物を牙營として最近の評論壇に覇權を握りし二三論客の特質に關することなり。然るに、第十九世紀後半の文學界は他の點に於ても前半のと其の趣きを異にするが如く、定期出版物に於てもまた頗る從前のと異なれる所あれば、批評界の變遷を敘するにさきだちて、定期出版物の若干種につきて其の變遷の跡を點檢するの要あり。

當時、舊地方雜誌及び月刊雜誌類も未だ悉く廢刊せしにはあらず、『エヂムバラ評論』及び『ブラックウッド雜誌』の如きは、十九世紀の中ごろまでは、盛んにジョールジ、エリオットの小說、キングスレー及びフルードの論文などを掲げて、其の紙面の光彩尙ほ

陸離たる者ありき。されど新をめで、舊を厭ふは、讀書社會のならひなり、彼等は其の記事の質の良否をばさて置きて、只管題號の新を喜び躰裁の奇を求めしかば、こゝに自ら機運一轉して新刊諸雜誌の續出を見るに至りき。もとより此れ等多數の片々たるものゝ過半は、所謂朝起暮廢の「三號雜誌」たりきと雖も、此の間また自ら多少の改善と創意との加はれるものなきにあらず、されば全躰よりいへば、往者よりは、兎も角も幾分の進歩なしゝと共に、一方に於ては、印刷、輸送等の便利も加はり、隨うて紙面も擴張せられ、價額も低減せられ、讀者の數も增し、遂には今日現に見るが如き狀況に達したり。さて此の間に於ける變遷の跡を尋ぬれば、畧〻下の三段をなすべし。第一週刊六ペンニー新聞の流行、第二月刊雜誌の紙面擴張、第三新月刊評論の發行是れなり。而して週刊新聞の中最も著名なるを "Household Words" (『家庭新語』)及び "Saturday Review" (『土曜日評論』)とす。

『ハウスホールド、ウオッズ』は、一千八百五十年の發刊にして、ヂッケンス主筆たりき。大躰に於ては『ブラックウッド』又は『ロンドン』と躰裁を等うせりき、言はゝ、其の發行の回數を增して價額を減じ、論說の程度を低うして通俗的となし、さて政治上の評論を除き去りたるに過ぎざりしものとも見るべし。主筆ヂッケンスは絶えず筆を執り、別にブルワアリヴァなどいふ作家連の寄稿を掲げ、其の餘は自家門下の青年文士をして之れに當らしめき。其のうち前章の末に擧げし小說家ウィルキー、コリンスの如きは最も名ありき。件の週報の長所は議論の通俗にして、雜報文の輕快洒落なるにありき。但し、中には『ロンドン』及び『ブラックウッド』を掛持ちにして勤むる記者も交りたりしことなれば、多少件の二雜誌の特質も加はりたり、隨ひて其の躰裁も全く獨創といふべからず、且つ美術、文學の論の如きは、もと二三の學者に悅ばれんよりは寧ろ多數の好尙を啓導せんことを所志とせしかば、一世の評論壇を支配する力なかりし代りに、これによりて多少文學思想を社會に弘布するの功はありしなり。爾後此の週報に模して成りしもの夥多出づるに至りしが、特に取りいでゝいふに足らず。

『サタアデー、レヰュー』は、主義、特質、共に前者と異なり、小說の如きは之れを掲載することといと稀なり。この種の週報にして著はれしもの既に二種ありき、一は『エキザミナア』と題し、ハンツ、フォン、ブランク、フォオスタア及びミントー等相續ぎて

其の主筆となり、當世紀の三分の二に亘りて、紙面の光彩冒て衰へず。『スペクテーター』といへるは、レンツール Rentoul の主筆となりし以來、聲價はじめて定まり、持續して今日に至りぬ。兩者ともに改進主義を以て立てり、其のうち『サタアデー、レヴュー』は、初めは貴族主義を以てあらはれ、いつしか Independent Tory (獨立トーリー)即ち Liberal-Conservative (自由保守主義)を主張するに至りぬ。されば其の紙上に於ても彼の改進黨及び Radical Party (急進黨)の名士が寄稿を歡迎せしと共にオックスフォード及びケムブリッヂ二大學の俊才に論說の寄稿を請ひて古文學の研究を鼓吹せり。而して、これと共に、彼の當世紀前半に於ける新聞紙の通弊ともいふべき個人の性行を褒貶することを避け、其の主義、持說に付いてのみ堂々論難する方針を取りしかば、其の論說は、兎も角も公平、眞面目の文字として、一世の注目する所となり、特に文學上の評論の如きは頗る勢力あるものとなりぬ。

『ハウスホールド、ウォオヅ』と『サタアデー、レヴュー』とにつぎて世に出でしを "The Cornhill Magazine" 及び "Macmillan's Magazine" とす。概して『ブラックウッド』『フレーザア』などと異なる所も見えねど、價額の半減せると寄稿に知名の士の多くなれるとを見れば、當時新聞、雜誌業の如何に日進の勢ありしかを察することを得ん。

『コオンヒル雜誌』はサッカレーの發行にかゝり、マッシュー、アーノルド之れを扶け『マクミラン』はキングスレー兄弟の寄書を以て其の紙面を飾りき。

雜誌流行の餘勢は、一轉して「評論」の興隆となりぬ。但し「評論雜誌」の興隆は政治思想及び文學思想の廣く社會に布及せりし結果なりと見るべきか、或は單に當時佛國に流行せし "Revue des Deux Mondes" の摸倣と見るべきかは、學者間の疑問に屬す、されど兎に角に其の最初にあらはれし評論雜誌 "Fortnightly" (『隔週評論』) が、徹頭徹尾、件の佛國の評論雜誌に倣ひたりし者なるは事實也。『隔週評論』に次ぎて出でし者を "Contemporary" (『當代評論』) 及び "Nineteenth Century" (『第十九世紀』) とす。何れも、謹嚴周密を以て知られて、今尙持續せる評論、批判の雜誌なり、小說の如きは絶えて掲載することなし。

これ等新聞、雜誌の一々につきては其の特質を叙述するの遑なし、まして、や日刊の新聞紙に至りては、晨に、午に、夕に、其の數幾百千、秋の木の葉の紛々として舞ふが如く、滿庭の碎錦は到底筆箒の掃ひ盡し得る所にあらず。されば、こゝには、週刊以上

のものに就きて、只最も著名なるもの一二のみを擧げ置かん。週刊の雜誌にて最も名高きは"Athenium"にて、刊行七十年の長きに及べり、"Academy"これに次ぎて出で、別樣の趣味を以て名聲を前者と爭へり。此等の雜誌にて、文學上の評論として、一時盛んに流行せしは古人の作を取りて評隲することにして、これと共に古人の詩選を取りて、其の特質を論ずることも盛なりき。

さてこれ等の雜誌新聞紙にたづさはりし批評家中、其の著名なるものを擧ぐれば、チョン、ヴィルソン、クローカア及びアプラハム、ヘーワードは初期の地方雜誌の名家にして、ジョールヲ、プリムリー、ヘンリ、ランカスタア、ウォルタア、バジオット等は第二期の論客なり、中にもプリムリーはテニソンが異材たるを其の初期の作によりて早くも觀破し、これを世人に紹介せし烱眼の解釋者(インタープリター)にして、ランカスターのサッカレーに於ける亦たこれに同じ。バジオットは多能多才、博識洽聞、其の評論は政治、經濟、文學、宗教に亘りて餘す所なし、中にも、復古主義とローマン派主義との中間に脚を立てゝ、仔細にウォオツヲオスが詩能を論じたる一篇の如きは、最も名あり。其の他の文士には、博士チョン、ブラウン("Horae Subsecivae"の著者)チョームス、バンチー("A Course of English Literature"『英文學捷徑』の著者)及びアーサア、ヘルプス等皆名あり。ヘルプスは(一八一三―七五は)政事界と文學界とに跨り、『西領亞米利加論』を以て一方に知られ、"Friends in Council"を以て他方に名あり、後者は論理學上及び審美學上の評論文を集めたるものなり、說は道德と哲學とに亘りて文章雅馴、傍證精到なり。

マッシュー、アーノルドが經歷と詩人としての特質とは前章すでに略說せり。彼の章にても、少しく言ひおきつる如く、彼れが世に現はれしは先づ韻語の作者としてなり、散文家、評論家として出世せしは、それよりも廿年の後即ち一千八百六十年の前後なり。然れども其の批評の論文の初めて世に出でしや、オックスフォオド大學の哲學授敎が所論として、忽ちに世人の注目し推重する所となりき。此のころ諸雜誌の爲めにものせし評論の文は、同六十五年一冊子となりて出版せられき。有名なる"Essays in Criticism"(『批判論文集』)是れなり、收むる所九篇、何れも主として文學に關するものなれども、論旨博大にして科學、宗教、美術、音樂等の諸科に亘り、前人未言の、卓說多し。アーノルドは詩人としては小心翼々の人にして、改削又改創、左顧右眄、一語苟くもせず、寧ろ用意の餘りに周到なるに失せしが如き觀ありし

が、論客としてのアーノルドは殆ど別人の如く、直往勇斷、一氣湖山を呑吐するの概あり。されば着眼は甚だ奇警にして讀む人を啓發する所尠からずと雖も、其のあまりに獨斷的なるや、所謂獨り合點に流れて、時に論理の順道を逸したる憾あり。アーノルドが評論の有名なるものは、以上の外に "Culture and Anarchy" God and the Bible" "St. Paul and Protestantism" "Literature and Dogma" 等あり。行文峭健にして奇氣横溢せり、然れども此等はもと該諸科に對して深邃精到の素養なき著者が咄嗟の感想を錄したるものに外ならざるが爲に、讀者が一時の賞玩を買ふを得べきも未だ以て學者を益するに足らず。アーノルドは晩年に至りて頻りに人物の評傳を試み、遠くはヂョンソンが『詩人傳』中の數人、近くはバイロン、シェリー、ウォオヅヲオス等を論評せり、(中にもウォオヅヲオス論最も名あり)。推想精刻詩人、文客の胸臆に出入すること意の如く、眼光犀利、仔細に作の眞髓と風格とを照破して餘す所なし。殊に行文の勁拔にして諷諧の滑脫なるは殆ど一世に冠たり。

スキンとなす。一千八百十九年に生れき。父はシェリー酒を商ふを業とし、商務アーノルドと共に同時代の散文壇に馳騁して、盛名相讓らざりし文豪をヂョン、ラの爲めに屢〻大陸に旅行せしが、ヂョン亦た常に同伴し、隨うて幼時より見聞を廣うし、殊に各國の山河の景象、自然の風物、及び建築、彫刻、繪畫、音樂等に通ずるに至りき。こは後年に及びて彼れが批評の事業に少からぬ幇助を與へしものなり。ラスキンはかく幼時を處々の異鄕にて送りしが爲め、規律ある敎育を全うする能はず、小學校をも履まずしてオックスフォオドなる基督敎會にて敎育せられ、一千八百四十二年に業を卒へき。ラスキン少にして文才あり、在校中嘗て募に應じて一篇の詩を作し、賞を得たりき。後ち美術によりて其の身を立てんと欲し、ルーベンズ及びレムブラントに私淑して畫を學びき、而も天禀の才技はむしろ文學に在りしかば、常に論評の試文を絶つことなく、遂に卒業論文として彼の有名なる "Modern Painters" 『近代畫家』の第一卷を著しき、時に齡僅かに二十四なりき。此の篇は翌四十三年に至りて出版せられ、後ち三年にして第二卷成り、同六十年に至りて完結しき、總べて五卷なり。終りの三卷は、故ありて匆卒に筆を執りしが爲めに、前の二卷に比すれば經營足らざるが如く、行文また少しく魂麗を缺けり。其のはじめ此の書の第一卷の公にせられしや、文學界一時大に振動しき、蓋し其の論の斬新なると其の行

文の巧妙なるとが、一方に於ては激しき反對論を喚び起し、一方に於ては夥多の歎美者を生ぜしなり。一千八百六十年より同六十七年までの間に、彼れは該著を修正して再版を發刊しき、前説を改正せし箇所いと多しといふ。

さて此の間に於てラスキンは別に建築論數篇を草して陸續出版しき、"Seven Lamps of Architecture" (一八四九)及び "Stones of Venice" (一八五一—五三)是れ也。ラスキンは彼のラファエル以前の畫風を主唱するプリ、ラファエル派の柱石にして、一千八百五十年より同六十年に至るの間、彼の古畫の典雅入神の致あるを説き、熱心に南歐美術の趣味を英國に輸入せんと力めき。"Architecture and Painting" (一八五四)及び "Political Economy of Art" (一八五八)は、當時の講説の草稿なり。爾後引き續き "Unto the Last" (1861) "Munera Pulveris" (1862) "Sesame and Lilies" (1865) "The Cestus of Aglaia" (1865) "The Ethics of the Dust" (1866) "The Crown of Wild Olive" (1866) "Time and Tide by Wear and Tyne" (1867) "The Queen of the Air" (1869) "St. Mark's Rest" "Pretelrita" (1885) 等の著あり。一千八百七十年オックスフォード大學の美術教授に選ばれ、同七十六年再選せられ、同八十年三選せられしが、同八十四年病の爲に辭任しき。其の始めて美術教授となりしや、聽講者堂に溢れて如何ともすること能はざりしかば、同じ講説を二回づゝなしきといふ。『近代畫家』は主として近代の英國派の風景畫を辯護せるものなり、以爲へらく、風景畫に於ては今人は却りて古人に優れりと。ラスキンの著を讀む者の著く感ずるは、著者に二方面あることなり。其の一は詩人たるの方面にして、他の一は批評家、美學家たるの方面なり。(彼れ又社會改革者としても多少思索する所ありしかど、こゝに之れを略す。) ラスキンが著作は常に件の二方面より生れいでゝ、美術の趣味と美の由來とを俗に傳ふるの效果を有しき、即ち自然を觀察するの新眼光を廣く世人に授けしなり。而して其の影響は決して繪畫社會にのみ止まらずして、文學上にも、社交上にも、殆ど繪の何たるを知らざる社會にすらも及びたり。蘇人ピータア、ベイン嘗てラスキンを評して曰はく

> 夫れ自然の美を感受する卓越せる力を賦與せられ、自然の眞を認識する卓越せる力を有する者は、山岳にも聲を與へ、河流にも音樂を附す。彼れ海をながむれば其の海立ちどころに一しほ長閑に美しきものとなり、彼れ雲をながむれば、其の雲忽ち一しほきらきらしく輝きわたる。彼れは神秘に奉仕する神官にて、自然の慈惠を配分するものなり、而して人はかゝる人を詩人と呼ぶ。ラスキンの如きは、斯くして造化の眞趣味を解

釋して、洽く其の豐かなる恩惠を人間に傳へたる二三の名譽ある俊傑の班に列す。彼れは美妙の魔力ある聲を以て、決して交易せざれども常に毎に斬新なる、又已に老いたれども尙毫もすがれず、且つそこなはれざる、自然の繪畫に關して語りたり。蓋し、自然の美たるや、諸の美術の承認する所、又諸の美術の原因する所なれど、其の人の眉間に在るや、幼少の時より不斷なれば、人は往々にして輕々しく其の美しさを看過せんとす。彼れは吾々に憶ひ起さしむらく、ホーマーの時代に等しく、薔薇花なす曙の色は、今も尙曉毎に、新しく珍しき笑を有すと。又曰はく、朝ぼらけが大海原に添うて進みゆくや、海原の水の色は、今も尙常に黃金色と薔薇色との新しき刺繍を以て盛飾せらると。彼れは又何人も得爭ふまゝき證を擧げて示すらく「眞に自然美を愛すらん者は、清水の噴きいづるあたり、若葉の繁れるほとりにて、陽春の來れるに遭遇せば、常に未曾見の美を認めざるを得ず」と。ラスキンの聲に呼び起さるゝや、吾々はた忽然と宇宙の美と大とに關する新意識を感ず。宇宙の何たるかを更に明かに思念し、如何に宇宙をながむべきかを知る、云々。

フィリップ、ギルバアト、ハマアトンも亦た曰はく

我が英國最近の言畫家（ジョオジ、ペイン、ター）にて、其のいみゞき者を韻語の詩人中に求めんか、テニソンは蓋し第一に位し、シェリーこれに次ぎ、バイロン、スコット、ウォオズワスオス及びキーツまた之れに次ぐ。而してこれを散文の作家に求むるに至りては、吾々はラスキンを以て唯一人となさゞるべからず。（中畧）。ラスキンが散文を以て記、叙、論、述をなすの技は、あらゆる方面に於て驚歎するに堪へたり。

と。ペインとハマアトンとは共にラスキンが詩人的方面を贊せるものなり。此れらの贊評を以て多少溢美の傾きありとするも、華文的散文の寥々然たる今の時に方りて、能く此の評を領有せんもの、他に殆ど其の人なきは明かなり。以下少しく批評家、美學家としてのラスキンをうかゝはん。

ラスキンが美術に關する批評の特質ともなり、兼ねて其の重なる價値ともなれるは、其の美術論以外に出でゝ、人生論に及ぶ所にあり。換言すれば、一個の無上なる範疇の裡に倫理的と社會的と美術的とを結合する所、實に彼れが審美論の長處にしてまた其の短處なり。ラスキンが美術の職分、兼ねて其の效用なりとして證說せる所は、甚だ高尙なり。彼れは美術の批評家たると同時に道德論者たり、彼れの美術品を品騭するや、多少倫理的問題に干涉し、人間の義務に說き及ばざることなし。所詮、彼れは美術を以て單に道義に關するものたるにとゞめずして神聖なるものとし、又道義を以て啻り善眞なるものとのみせずして更に美なるものとせり。

ヴァノン、リーといふ匿名にて嘗てラスキンの美論を批評せしものあり、曰はく、「ラスキンは德義と美術とを相關係せしめて双方を神聖ならしめんと欲し、却りて双方を毀ひ了んぬ、德義はこれが爲めに荒寥たるものとなり、美術はこれが爲めに陋劣なるものとなりぬ」と。此の評は酷に過ぎたれど、幾分の眞理を有す。

今こゝにラスキンが美論を詳說する能はず、たゞ其の所說の要旨を紹介せんに、彼れは主張すらく、「圓滿に美なるものゝ中には圓滿に善なるもの存す。かるが故に、人若し眞に美なるものを知りて、脫我してそを愛することを得ば、以て私慾の發動を防ぎ、其の生活を潔うするに庶幾からん。夫れ善と美とは一ならずして相背けり、されど其の根柢を探れば相親和すべき性質を具し、相契合する所あり。抑、何故に人は、この缺陷多き人間界にありて、美の研究に其の一生を委ねんとはするぞ。曰はく、他なし、道義を重んずればこそ美を研究せざるを得ざるなれ。蓋し、道義をして愛重すべく若しくは鞏固ならしめんとせば、啻り美を知るを以て足れりとせずして、そを研究し、且つ愛好せざるべからず」。云々。

言ふまでもなく、ラスキンが美術上の判斷は悉く正確なるものにあらず、然れども眼を轉じて、在來英國美論の經歷を一瞥せんに、古くはバアク、アダム、スミス、アリソン等ありて多少の論說なかりしにあらねど、概して皆蕪雜淺薄、當時の詩歌、小說、劇詩等の作品に對して負に遜色あり、近くはハズリット、ハートリー、コールリッヂ、ラム等に至りて其の考究稍〻深く、或は凄婉、或は優美、或は滑稽等の美に就きて、詩歌の妙趣を論じ、其の神韻を說くところありしが、論の根本的に天地人の本躰に亘り、絕對的に美術の本領を定め、其の眞價を論ずるの點に至りては、何れも朦然、漠然の感あるを免れず。今人がラスキンの說を讀まば、首肯しがたき點もとより屢〻あるべきも、兎も角も其の自然の精神を解釋し、人間と自然との契合を論じ、あらゆる高尙なる美術品より來たる靈妙なる聲を解釋し、私欲を破し、我慢を離ずる條に至りては、其の深と廣との點に於て、英國過去の學者中には其の右に出づべきもの殆ど空しきのみならず、之れを海外に見るも、過去には競爭者多からざるを覺ゆ。

さはれラスキンが美論はもとより系統の整然たるものにあらず、否、其の所見は往々にして前後矛盾せり。彼れみづからも常にこれを自覺しながら、尙且つ安然たりしものゝ如し。彼れ曰はく

凡そ重要なる事柄は、概して三面、四面又は多々面を有す、而して件の多面體の周邊を一歩づゝ取調ぶることは、頑なる人々にとりてはいとつらき業なるべし。予にとりては、何事にもあれ、それに關する說を、尠くも三度ばかり、案ドかへたる後にあらざれば、妥當なりと安んずる能はず。

と。彼れは、彼の靈妙不可思議にして無數の方面を有せる美といふ性物に對して、果して幾回の考察をか遂げたりし、知るべからず。彼れが美の定義は到底曖昧にして捕捉し難きものなり。加之、其の用語例毎に甚だ濫りなりき。

要するに、ラスキンが所說は嚴正なる最近の科學的眼光に照せば、條理紛雜、見るに堪へざるものなりと雖も、其の美術と宗敎とを以て相離るべからざる姉妹なりとし、兩者に關する眞正の領會の孤立しては得難かるべき由を述べたる一段の精神に至りては、一二學者の論難を以て容易に覆すべからざるものあり。

アーノルド、ラスキン等に比すれば、品位も、所說も、共に負かの下級にあるも、尙ほ批評壇に於て若干月日の間、一種の異彩を放てりし者をヂョン、リチャード、ヂェフリーズとす、一千八百四十八年に生れ、十八歲にして新聞事業に從事し、"North Wilts Herald" といふ雜誌に寄書家たりしこと十年餘り、さて後ロンドンに上り、同

七十八年に "The Game-Keeper at Home" と題せる小品文集を著しき。此の書は多數の讀者を得る能はざりしかど、一たび讀みし者の間には稱贊の聲低からざりき。

かくて尙ほ同種の作若干をものせし後、轉じて半ば哲學の性質を帶びたる論文を著しゝが、其の著常に冷遇せられ、數奇不平の間に、病を得てロンドンを去り、一千八百八十七年齡僅かに三十九にして歿しき。其の名は其の訃と共に各所に喧傳し、久しく塵底に埋葬せられたりし著書、今や定價の四五倍にて數日間に賣盡され、諸種の新聞、雜誌爭ひて其の文躰を模倣せし程に行はれき。かくの如き一時のヂェフリーズ熱は忽ちにして冷却し、今や其の著はまた再び饗乘せらるゝに至れり。

蓋し、ヂェフリーズの詩人的性質は、ウォオズヲオスに超え、其の世界觀の哲學的なる、亦たウォオズヲオスよりは一層精微にして、其の世界歌ふや、其の成功せるものに至れば、頗る見るべきものありと雖も、之れを以て彼のラスキンの巧妙辭に比すれば、彼れは瓊葩綉葉の名花、是れは名なく實なき枯木のかへり咲きに過ぎず。宜べなり、其のラスキンと相幷びて多く風騷の顧客を得る能はざりしや。然れどもヂェフリーズも亦た一詞才なり、其の派の論說と文躰と

は、饒かに一流をなせりき、彼のギルバアト、ホワイト及びクレーの如きは此の派に屬したりしなり。

アーノルドとラスキンとは、兎に角に近世英國散文壇の泰斗なり、就中文藝批評の方法に關しては其の影を仰げるもの、現に尙ほ多しと雖も、今は一々細叙せず、左にはたゞ最も著明なる一二人を畧説するのみ。

ウォルタア、ホレーショー、ペータア は一千八百三十九年に生れき。オックスフォオドの校友に選ばれ、終生大學に在りて力を盡しき。處女篇を "Studies in History of Renaissance" となす、一千八百七十三年出版せられき。主題の旨味深きと文致の清新にして且つ巧妙なるとによりて大に讀書社會に注目せられき。其の文章の瑰麗にして詩的なるは、或はラスキンにも過ぎたるべし。後 "Marius the Epicuean" "Imaginary Portraits" "Appreciations" 等の著あり、何れも行文の典麗を以て聞えたり。"Marius the Epiurean" は或は其の傑作なりと稱せらる。ペータア、初めは希臘の美術、文學を愛好して殆ど耽溺せんばかりなりしが、漸く最近思潮に感染し、隨うて其の說も好尙も一變しき。"Imaginary Portraits" は、美術の批判たるよりは寧ろ美術

家が製作の瞬間に於ける心機の妙用をさながらに說明せんと試みしものなり。此等の諸篇、其の最妙の個所に至れば、ラスキンの暢達に加ふるに、トマス、ブラウン及びデクィンシーの巧緻を以てせるが如きも多く此の妙文家に許すべからず。

ヂョン、アッヂングトン、シモンヅ はペータアと同一の派に屬せり、其の說の精練は彼れに及ばざること一等なれども、尙同代文士中の錚々たり。一千八百四十年に生れて、同九十三年に羅馬にて歿しき。父より遺傳せし病の爲に力を其の業に專らにすること能ざりしかど、其の一生の心血は "History of the Renaissance in Italy" に濺がれて、今尙ほ多數の讀者を有す。蓋しシモンヅは東歐の文藝に精通せる人にして、希臘の學藝、美術及び伊太利に於ける學藝復興の事蹟につきては平生精しく考査する所ありき、されば、之れに關する論說は、屢〻時の新聞紙、雜誌にも揭載せられき。彼れの屬せりし批判家の一派は、もとは多少ラスキンの末流を汲めりし輩なりしが、時を經るにつれて、先づ其の倫理的、宗教的方面を離れ、やがて次第に獨立の研究を事とするに及びき。シモンヅの所論中頗る見るべきもの乏しからねど、

さすがに一家の學説と見做すべき程のものにもあらねば、こゝには之れを細説せず。

ウィルヤム、ミントー は千八百四十五年に生れて、同九十三年に歿しき。アバアヂーンの大學にて論理學及び英文學の教授たりき。ミントーは文學、美術の品隲に美學的觀察を用ふること少なく、且つ文章詩歌的に修飾する事少かりしは前の二人に比して異色ある所なり。嘗て "Examiner" (雜誌)の主筆となりしが、同誌の批評文はこれより騷壇に重きを置かるゝに至りき。後ち去りて "Daily News" に入り、暫らくにて辭して去りぬ。この間又小説若干をものしき、"The Crack of Doom" 傑作と稱せらる。是れより先き英國の韻語、散文に關する論文をものし、又彼の『エンサイクロピヂヤ、ブリタニカ』の爲めに若干の寄稿をなしき。ミントーの特質は、博く過去の文藝に通じ、且つ深く最近の思想に感染せるにあり。其の史論及び文學論は全く兩者の融合より成れるものと評すべし。其の失は、批評眼のあまりに近代的に偏して、作を廣く宇宙的(ユニヴァーサル)に觀る能はざりし處にあり、但し、こはあながちミント一一人の失にあらず、近代美學評論家の殆どまぬかるゝ能はざりし通弊なり。ミントーの文章は雅馴平淡、よく其の言はんと欲する所を悉すを得たり。

第十九章　哲學壇及び神學壇

哲學界の文士——ヂエレミー、ベンサム——スチュアート、ミル——ミルの諸著——ミルの特質——ウィルヤム、ハミルトン——ヘンリ、マンセル——ホエートリとホイウエル——法理學、經濟學界の文士——ガースチン——メーンスチーブン——神學界の文士——ピュージー——キーブル——ニューマン——其の畧歴——其の諸著——所謂オックスフォード派の運動——文章家としてのニューマン——オックスフォード派の諸文士——其の反對派の文士

文學を廣義に解して、思想、感情、信仰等の文章となりて表はれたる一切を含む者となす時は、哲學上の著述の如きは、思想の方面より、神學上の書籍の如きは思想、兼、信仰の方面より文學上頗る重要なる位置を保つべく、隨うて其の變遷發達の跡を討ぬるは文學史家の忽にすべからざるとゝなるべし。さりながらさやうの文學史は、純文學はいふに及ばず、哲學、宗教、などの歴史をも含むものとなりて、容易くは企つべからず。されば、本講義の如きは、哲學史、宗教史などとは全く引き離して、單に純

文學を中心とし、只折々純文學と密接の關係ある哲學、神學の思想、感情幷びに純文學と見做さるべき同種の著述のみを紹介せんとす。

第十九世紀に於ける哲學家及び神學家の諸著述は、之れを純文學の方面より觀るも、(取りわけて彼の當世紀の前期よりはじまりしオックスフォード派の學者の中には、文才ある者頗る多く、其の著書中には散文の詩歌として賞玩すべき者も少からず。然るに降りて最近二十年に至りては、英國の科學者等は殆んど皆美文を遺却し、言ひあはせたるやうに乾燥枯冷の文章をものすることゝなりぬ。かゝるは彼れら科學者等が、獨逸の學風に化せられたりし爲か、或は天資文才に富めるものゝ出でざりし爲めか、こは本章に於て論定すべき限りにあらねど、讀者にして西歐十八九世紀間に於ける思想變遷の跡を察せば、思ひ自ら半ばに過ぎん。下に略述せんとするは、英國十九世紀間の哲學及び神學の著述家中にて、純文學の方面より見ても大家と稱し得べき人々の上のみにして、ミル、ハミルトン、ニューマン等を首とせる數人に過ぎず、且つこゝに主眼とせるは其の着想、落筆の巧拙の評なり。若し夫れ此れ等碩學が科學上に於ける事業、功績を精察せんとせば、須からく哲學史及び神學

史を繙くべきなり。

ヂェレミー、ベンサム は一千七百四十八年ロンドンに生れき。十三歲にしてオックスフォードなるクィンス、コレッジに入り、十八歲にして卒業し、六年の後ち父の業を繼ぎて狀師となりしが、性來哲理の考究を好みしかば、夙に佛國の哲學諸家を論評し、多少の名聲ありき。同七十六年法律家ブラックストンの所說を批評せる一篇"Fragment on Government"を著はし、一躍して「ホイッグ派の預言者」といふ稱を得、其の說一派の間に喧傳せられき。其の後"Theory of Punishments and Rewards""Letters on Usury"(1787)"Introduction to the Principles of Morals and Legislation"(1789)"Treaties on Evidence"(1813)"Fallacies"(824)等の著あり、一千八百三十二年齡八十四歲にて歿しき。

ベンサムが倫理、政治、及び法律上の持論の中心となりし者は、其の利用(ユーティリティー)の說にして所謂利用論即ちユーチリテリヤン、シオリー(功利主義)是れ也。彼れはプリーストレーが用ひし陳套の語を借り來りて「最大多數に最大幸福」を與ふるとをば其の倫理論の眼目となしにき。而も其の多數といふ意義如何(例へば、小人、八十を占め、君子

僅かに二十なる國に於ては如何)、所謂幸福とは何ぞや、厚生利用の眞義如何、等の如き重大なる問題に就きては、一たびも精說せず、所詮、上に言へる如き漠然たる語に基く孟浪の說を建てしのみなりきと雖も、當時英國の社會は、隣國の革命によりて、人心頗る騷然たりし時なりしかば、ベンサムが說く所此の機に應じて多少精神界に貢獻する所ありしや疑ひなし。嚴にいへば、彼れは政治哲學者などいふべき者にあらずして、一の政論家たりしのみ。其の文章は頗ぶる華やかにして力あり、シドニー、スミッスが名篇にも伯仲すべきものあり。兎も角も一時多數の讀者を感動せしめしは事實なり。

ヂョン、スチュワート、ミルは一千八百六年ロンドンに生れき。父はヂェームス、ミルといふ有名なる哲學者、經濟學者にして、著書頗る多し。ヂョンは幼時は父の許にて敎育を受け、後ち佛蘭西に移りて數年を送り、十七歳に及びて印度局の書記となり、三十四年間此の職に從へりき。是れより先き父の紹介によりてグロート及び其の他の學者と交り、又た時の有名なる文士に接し、殊にカーライルと相善かりき。彼のカーライルが『佛國革命史』の稿を、後に其の妻となしゝテーロア夫人より借覽して、圖らずもこれを燒失せしは此の頃のことなり。かくて哲學者、政治經濟學者、批評家としてのミルの名聲は日に揚り、一世の學宗と推尊せられしこと十餘年、此の間國會に入り、佛蘭西に遊び、一千八百七十三年齡六十八歳にして歿しき。其の資性溫厚にして交友甚だ多かりき。其の著(殊に後年の著述)は此れ等交友の助けによりて成りしものも多しといふ。

ミルが壯年の著は新聞雜誌の爲めに物せしもの多し、自らも "London and Westminster Review" といへるを發行して、盛に其の健筆を揮ひき。彼れは一たびも筆を創作に試みしことなく、哲學、政治乃至文學の評論のみをものしき。一千八百四十三年 "A System of Logic, Ratiocinative and Inductive" を著はしき、是れ其の名著の第一なり。五年の後有名なる "Political Economy" 成りぬ、こは今尙學者の推重する所なり。同五十九年 "Liberty" を著し、其の翌年論文集 "Dissertations and Discussions" を出版し、ついで『功利主義論』及び『コント論』を著しぬ。はじめ彼れは佛のコントと其の說を一にせりしが、晩年に至りてはコント偏僻に流れしかば、ミル之れを辯折するに至りしなり。彼れが辯折の筆は、やがて一層の銳を加へて蘇のハミルトンの哲

學に及び、同六十五年には有名なる"Examination of Sir William Hamilton's Philosophy'をものしき。ミルが神學及び純粹哲學上の統系を組織せしは此の時なりと稱せらる。晩年の著書中にて名高きは"Representative Government"及び"Subjection of Women"等にして、其の自傳は、殁して後ちに世に出でき。

以上の著述中に含まれたるミルが所見は、すべて學説として頗る注意すべきものなり、就中經濟學上の説の如きは、今こそは稍〻棄てられたれ、一時は殆ど爭ふべからざる眞見のやうに激賞せられき。仔細に察すれば、何れの論説にも多少の瑕疵はあれど、今は之れを論ずるの遑なし、要するに、彼れはかいなでの文人的哲學者の如くに、一時の所感にまかせて論理の邪路を走過する如き失全くなかりき、隨うて若し其の論を覆さんとせば、兎も角も第一前提より破壞するの他、術なきもの丶如し。彼れは論理學の史上に於ても、明かに一席を占むべき大家なるだけありて、其の文の精緻明晰、古今の文壇に比少なく、一たび其の根本思想に同意すれば、其の何れの著を讀むも徹頭徹尾殆ど悉く首肯せざるを得ざるに至るの概あり。而して彼の議論を進むるや、件の論理術を右にし、左には修辭の方則を控へ、天禀の文才を以て

之れを行る故に、整々堂々、險を馳せず、邪を行かず、滔々として大河の百流を集めて下流するが如く、觀る者おのづから氣の爽然を覺ゆ。之れをマコーレーが文に比せんに、其の明快流暢は兩者異なる所なしと雖も、彼れには、全躰に於て、事理の脈絡時としては模糊たるものあり、間〻其の思想の朦朧を示す、然るに此れは飽くまでも瑩然、洞然、事理徹透して微塵も隱す所なし。即ちミルが文にはマコーレーの華麗なく、デ、クィンシーの色彩なく、又ラムの輕妙なしと雖も、讀みて誤解すべからざる明晰と讀過の際不可言の快を覺ゆる暢達とは、他の文人に其の例を見る稀なるものとす。宜なり、今に至りても尙議論文の範たるや。

ウィルヤム、ハミルトンは一千七百八十八年に生れき。祖父と父とは相襲いでグラスコー大學の教授たりしが、着實の學者なりき。ウィルヤムも同學校にて教育を受け、バリオルに移り、卒業の後ちは蘇格土の狀師となりしが、其の職を實踐せしとはなかりき。一千八百二十年ウィルソンと大學に於ける倫理學科の教授たるの位置を競爭して敗れ、一時は『エヂンバラ評論』の寄書家となりて哲學上の評論を擔當せしが、同三十六年遂にウィルソンに代りて大學に入り、論理學及び形而上學を

擔當して名聲頗る高く、其の講説筆記は處々に傳はりてもてはやされき。されど如何なる故ありてか、彼れは之れを印行せず、且つ他にたづさはりし業務もありて其の一生中著述といふは、僅かに "Dissertations" と題せる一篇の論集あるに過ぎず。一千八百五十九年に歿しぬ、其の講説錄は友人の手によりて死後初めて出版せられき。ミルがハミルトンを論評せしは重に此の書に關してなりき。

ハミルトンの哲學は "Philosophy of the Conditioned." と名稱せらる、是れヒュームに反對して嘗てトマス、リードが唱へいだしたりし所謂「蘇格土哲學」を援助せんが爲めに立論せしもの、要するにカントを祖述せるなり。こゝには其の梗概をだにも叙する能はず、たゞ其の所説のトマス、スペンサア、ベーンス及びヂェームス、フレデリック、フェリヤァ等數家に感化を與へたりし事を記しおかんのみ。文章家としては殆ど取りどころなし。思索家としてはデ、クィンシー、コールリッヂ等の如きまがひ日耳曼通とは同日に談すべからず、彼れは眞成に日耳曼的研究法を用ひたり、隨うて語法文脈まで彼の國の科學者ぶりを學び、其の失までも傳へたり。

ヘンリ、ロンゲ并ル、マンセルは或人々の間には英國十九世紀中の最大哲學者なりと稱せられ、又たマーク、パッチソンよりは「仲買の長」(arch-jobber) と毀られたれど、現今に於ては兎も角も、「精緻なる思索家」といふ公評に其の位置略ぼ定まりたるが如し。惜い哉、彼れ命甚だ長からず、加ふるに大學校の事務多端なりしと生來やゝ怠惰なりしとによりて著書あまり多からず、隨うて彼れが造詣の眞境は察するに由なし。一千八百二十年に生まれ、小學校より歷進してオックスフォードなるセント、ヂョン大學に入り、卒業して其の校友となりたりしが、彼の "University Commission" といへる組織に反對なりしかば "Phrontisterion" と題せる一書を著はして之れを攻擊せり、骨に徹する諷刺嘲謔の隨處に隱見するの妙また當世紀の一奇書たるに耻ぢず。後ちコムミッション社の爲めに選ばれて、倫理及び純粹哲學の講坐を得たりしが、其の講説は議論の內容と措辭の巧妙とによりて名聲を博したり。後年親友ミルマンの死するに及びて、セント、ポールの監牧師となりしが、幾程もなくして歿しき。時に一千八百七十年なりき。著書は彼の "Phrontisterion" の他に講説筆記 "Bampton Lectures" 論理書 "Prolegomena Logica" 等あり。『クォールタリー』及び他に掲げられし小論文は彼の "Phrontisterion" と合綴せられて其の歿後に

世に出でき。

マンセルは甚だ多方面なる學者にして、滑稽の才もあり、亦た世間智にも疎からざりき。是れ其の講説の大に學生に喜ばれ、其の著書の學者をも益し、且つ俗人にも解せられし所以なり。其の或人々に毀らるゝも、亦た此の點にあり。學者として其の本領は、自家の哲學系を立てゝ一派の開山たらんよりも、寧ろ忠實に先人の哲學を傳へて精細に思想の變遷を叙説せんとするにありしなり。されば彼れは多く獨乙書を讀みしかど、これにより自家の意見を固めんとするにもあらず、彼の "Bampton Lectures" の如きは、ミルが批評 ("Examination of Hamilton") の中に於てはハミルトンの敷衍と見做されし程にハミルトン哲學を攝取したれど、時にはハミルトンとは全く異なる解釋を試みしこともありき。要するに、彼れは雜誌、の評論家、當時にては隨分不正直にして、隨分偏狹ならざれば出來難き職業として、は餘りに周匝明晰の頭腦を有し、又哲學組織家としては(ソフィスト風の所皆無にて)は大哲學の組織は覺束なき者なるに、あまりに精細なる論理癖を有しき。即ち彼れは忠實精細なる哲學史家たるに過ぎず。而してこの種の論説には最も適した

る筆致を有しき。其の短生涯中、多く雜務の爲めに時を奪はれ、爲めに首尾完備せる哲學史をものすること能はざりしは惜むべし。尙當時に出でし哲學書の稍〻文學的價値あるものゝ名を擧ぐると下の如し。

Frederick Denison Maurice—"Moral and Metaphysical Philosophy"

William Archer Butler—"Lectures on the History of Ancient Philosophy"

G. H. Lewes (ヒリオット女史の夫) "Biographical History of Ancient Philosophy" 等

哲學、科學及び神學上の著述に關して、時を同うしてオックスフォオドとケムブリッヂとより各〻一俊才を出だしき。ホェートリー及びホィウェル是れなり。兩者各〻其の學校の特色を備へたりし故に、一見明かなる相異の點あり、前者は創意に富みたれど、博通に於て缺くる所あり、後者はやゝ其の反對たり、但し二人共にヂョンソン風の獨斷家たることは一、即ち同樣の論法を以て歷史を論じ、哲學を論じ、宗教を論じ、又た教育を論じき。

リチャード、ホェートリー

リチャード、ホェートリーはロンドンの人、一千七百八十七年に生れき。父は僧にして教會の事務に執掌しき。リチャードは廿五歳の時オリエル大學を卒業し、オ

W. Whewell.

クスフォオドに在ること二十年にしてセント、アルバンス院の長となり(ニューマン副長に擧げらる)一千八百廿九年經濟科の教授となりぬ。一千八百卅一年ホイッグ黨に推されてダブリンの監督長となり、難局に處ること卅餘年、一千八百六十三年に歿しき。著作は多からぬ方なれど、いづれも名あるものなり。"Historic Doubts relative to Napoleon Bonaparte"は眼光の明透と論鋒の犀利とを以て稱せられ講話筆記"Party Feeling in Religion"は之れに次ぎ、『論理學』及び『美辭學』亦た頗る名あり。概觀せんに彼れはシドニー、スミッスに同じく、オックスフォオド學風の結果として、觀察の細緻と所見の博大とを缺きたり、但し批判眼と文才とは決して貧なりしにあらず。

ウィルヤム、ホィウェル は工匠の子なりき。幼にして數學の才に長じ、ケムブリッヂなるトリニチ大學を卒業し、校友となり、教授となり、後ち教頭となりき。彼れは、科學にも、哲學にも、數學の才を應用して頗る發明するところありき。"The History" (1837) "The Philosophy of the Inductive Sciences" (1840) "Astronomy and Physic in Reference to Natural Philosophy" (1833) 及び "Plurality of Worlds" (1853) 等皆名あり。其の文章は取りいでゝいふに足らず。

H. J. S. Maine. J. Austin.

純正哲學の名家を擧げ來たりし以上は、應用哲學と稱すべき法理學、經濟學の大家をも併せてこゝに序すべきなれど、紙數に限りあれば、只其の最も著れたるもの二三のみを紹介して止まん。

ヂョン、オースチン (一七九〇—一八五九)は軍隊生活より轉じて教授となりし人、"Province of Jurisprsudence Determined" を著して世に知られき。功利派の法理家なり。其の夫人また文才あり"Story without an End"を首として數編の好著作あり。夫の歿後其の講說草案を集め、匿名にて刊行しき"Lectures on Jurisprudence"(『法學講說』)是れなり。オースチンの文章は明晰精刻、但し何となくせゝこましく和らぎなき筆致なり、一は其の論理法と思想の質との然らしめし所なるべし。

ヘンリ、ザームス、サムマア、メーン (一八二二—八八)はケムブリッヂ大學を卒業してトリニチ、ホールの校友となり、後ち教頭に進み、在職中に歿しき。著述は法學、政治學、史學等に涉りて頗る多し、最も名あるものを"Ancient Law"(1861) "Village Communities" (1871) "Early Law and Custom" (1883) 及び共和政治を痛論せる"Popular Government"(一八八五)等とす。文躰亦た老成なり。

E. B. Pusey　　J. F. Stephen.

ヂェームス、フイッツ、ヂェームス、スチーブン（一八二九―九四）はケムブリッヂのトリニチ大學を卒業して狀師となり、晩年法官となりにき。其の著には政治、神學などに關する評論多く、頗る批判に長じき。"Liberty, Equality, and Fraternity"（一八七三）は其の一例なり。父ヂェームス、スチーブンも亦た有名なる評論家にして、ケムブリッヂにて近世史の教授をなしゝ傍ら "Essays in Ecclesiastical History" 及び "Lectures on the History of France" 等の著ありき。

倘ほこの他に、『人口論』の著者トマス、ロバート、マルサスの如きあり、『論理學』『貨幣論』の著者ヂェヂンスの如きあり、いづれも文章家としても推重するに足る。

さて神學の方面を觀るに當時に於て最も注目を惹きしものは「オックスフォード派」と稱する一派なりき。こは半は聖典派（エワンゼリカル、ムーヴメント）に反動し、半は改進派と自由派とに反對して起りしものにて、最も名あるものをピュージー、キーブル及びニューマンの三家とす。

エドワード、ブーヒリー、ピュージーは一千八百年に生れき。幼時オリエルに送られ、基督教會（クライストチャーチ）にて教育せられ、業を卒へて後ち獨乙に赴き、神學と東洋の

J. Keble.

國語とを研究し、二十七歳の時、國に皈り、ヒブルー語の教授となりてやゝ名あり。一千八百三十三年はじめてニューマン、キーブル等と相結托して宗教上の事につきて盡瘁すること數年、遂に主義の爲めに大學の長官より説教を禁ぜらるゝに至りぬ。同八十二年に歿しき。著述少なからず。中にも "Sermons" 及び "Eirenicon" の二は文學的價値に乏しからず。其の文章はニューマン、キーブル等のとは頗る異なれり、或は露骨、或は晦澁と刺られたりしが、今日の目を以て見れば必しも然らざるが如し。

ヂョン、キーブル（一七九二―一八六六）は牧師の子なりき。家庭にありて嚴峻なる教育を受け、十四歳の時、募に應じてオックスフォード大學に入り、夙に神童の名ありき。十九歳の時同校の助教授を托せられしが、後ち職を辭して著述に從事し "The Christian Year" の著あり。一千八百三十八年同校の詩學教授となり、終生此の職を奉じき。キーブルの著作は "The Christian Year" の他に "Lyra Innocentium" および詩集 "Miscellaneous Poems" あり。キーブルの詩才はロセッチ女史に似て而も彼れの神秘傾向に代ふるに博大なる學者風を以てしたりき。彼れは又ウォオヅ

ヲオスの感化を受けしこと少なからず、されど其の模倣者たるに止らずして、別に一家の風をなせり。

キーブルが作詩に從事せしことは大に其の批評眼の發達を資けたりき。彼れは實に詩歌の批評家中に於て當時錚々たる一人なりき。其の名著 "Prælectiones Academicæ" は、惜むらくは學者社會の例によりて、羅甸語にて綴りしが故に、讀者甚だ少く、隨うて世の注意を惹くこと少かりしも、其の英文にてものせし批評文は衆の注視する所となりにき。彼れが教授せし美學は大に倫理論の色彩を帶びたりきと雖も、さりとて彼れは一切の詩歌を道義の原則によりて律し去らんとせしものにあらず。但し彼れは飽くまでも宗教的事業を其の本領となせりしが故に、勢ひ全力を文學的批評に用ふること能はざりき。

ヂョン、ヘンリ、ニューマン はロンドンの人にして、一千八百一年に生れき。少うしてオックスフォオドなるトリニチ大學に入り、卒業の後ち同校の助教授となり、又セント、アルバンス院の副長となり、次いでオリエル大學の教授となりぬ。千八百二十七年にはホーキンズに嗣ぎてセント、メレー院の法教師(ヂカン)となりしが、こは彼れが持説を實行するに最も適當なる地位なりき。さて其の説教は世間の問題となり、隨うてこれに關する著書も多かりき。ニューマンが該職に在りし十六年間の事業は、オックスフォオド派運動の歴史の骨子となれるものなり。該派運動は當時の宗教的局面を一變せんとせしものなり、されば、物議紛然、辨難沸くが如く、前後此の問題に關して世に出でたりし諸著を蒐めば、殆ど一圖書館を成すに足るべしといふ而も之れに對する終局の斷案は今尚定まらざる有樣なり。ニューマンは一千八百四十三年にハーレル、フルードと共に南歐に赴きしが、此の漫遊中心機一轉し、歸來セント、メレー院を去り、オックスフォオドを去り、爾後三十二年間は同校に飯り來ることなかりき。按ふに、是れ彼れが精神上の大煩悶、大苦鬪の秋なりしなり。彼れは屢々反對派の人々の爲めに妨げられ、若しくは讒誣せられて、逆境に陷り、居を易ふることも數回に及びしが、晩年に至りては機運一變し、一千八百七十七年には故鄉なるトリニチ大學の名譽校友(オンヲリーフェロー)に擧げられ、且つ法王レオ十三世の知を得て、同七十九年には「カーヂナル」の榮職を授けられき。仍りて一たび羅馬を訪ひ、やがてビルミンガムに飯りて靜かに餘生を養ひ、同九十年に歿しき。此のころには

彼れが眞意も初めて世に知られしかば、其の死を悼惜するもの無慮數万人、學者、僧侶の別なく、贊辭を列ねて其の墓碑を飾りき。程なく其の著述全集上梓せられしが、書翰及び隨筆の類を除きてすらも、大冊四十卷を成すに足りき。今少しく、之れによりて、彼れが思想と文章とを略評せん。

ニューマンが著の大部分は、いふまでもなく、散文の論說なれども、彼れは韻語の作者としても、文學史上、稀かに一の地位を占むるに足るなり。中にも"The Pillar of Cloud"の如きは優美巧妙なる讃美歌にして、宗教上の理想を詩化したる技巧、同代比少なしと稱せられて、頗る人口に膾炙す。此の作は、南歐漫遊の歸途、シヽリーよりマルセールズに航せし時の船中の詠にして、當時の他の諸篇と共に意氣横溢の餘に成りしものなり。尙其の前後にも名作に乏しからず、中に"The Dream of Gerontius"は最も長篇にして、またそが一生の傑作と稱せらる。按ふに、是れそが複雜多樣なる行路の絕所を過ぎて、今や靜かに來し方をふりかへり見し時の作なればなるべし。

韻語の作以前の美文にては、傳奇的物語"Callista"及び"Loss and Gain"の二篇あり、

措辭に巧妙なる個處少からねど、敎訓の目的を寓したる跡あまりにあらはにして餘情乏し、且つ多數人に讀ましめんことを專とせしが爲めに、趣致の俗に流れたるは惜しむべし。

さて其の著作の大部分を占めたる神學上の文章につきて觀るに、處々にてものせし講說集十二卷、セント、メレー院にてものせし通俗說敎集八卷、論文集四卷、歷史論三卷、其の他、飜譯、神學論、辯難等十餘卷あり。其の最も不得意なりしは史學なりき、彼れは他の史を重んずる者を好古癖の論者として一嗤に附せしことさへありき。隨うて、自家の所論中には史上の事實を引證すること少く、稀れに有るも年代などを誤まれるが多かりき。以下、彼れが宗敎上の意見を覗はん。

ニューマン及び其の徒は、彼の十七世紀の淸淨敎徒に對しては、些の同情を有せざりき。クラップの記する所に據れば、人若しオックスフォオドに於て、ミルトンは大詩人なり」と立言して同意を求めんとするも、恐らくは一人の之れに應ずる者なかりしならんと。彼等が淸淨敎徒に對する反感情はかばかりなりき。然れども此のオックスフォオド派の首領たるニューマンは或意味に於ては(或は眞正の意味に於ては)淸淨

教徒たりしなり。ニューマンの起ちて教導に從事せしや、其の事業の標的は當時の世俗のあまりに卑俗なるを匡正して宗教の眞旨を振興せんとするにありき。所謂眞旨とは宗教の峻嚴なる方面是れなり。

彼れは曰はく「方今誰れか上帝に對して眞に畏敬の念を持するものぞ。誰れか熱情を以て其の神聖を認むる者ぞ。誰れか眞に罪惡の嫌ふべきを知る者ぞ。誰れか罪人を見て眞に恐怖震慄する者ぞ。誰れか上帝を褻瀆する異端の卑むべく、且つ憫むべきを知る者ぞ。略言すれば、今の一時に於て誰れか宗教の嚴肅を知るものぞ」と。

是れ豈に一種の清淨教徒の言ならざらんや。然り、ニューマンの率ゐたるオックスフォド派の舊教徒は、實に新教的舊教といふべきもの若しくは十九世紀的新教といふべきものなりき。

ニューマン曰はく「予はあくまでもリベラリズム(自由神學派)と戰はんと欲す、聖儀を非し、聖典を議する我意放埒の一派、及び其の一段進歩せるものと戰はんと欲す。」

「夫れ心の靜平なると行ひの悠々たるとは、彼の聖典を熱信するよりして得たる賜なり」云々。彼れが焦慮して研究したる問題は「如何にせば教會に自由派を生ずることなくして止むべきか」といふにあり。彼れは謂へらく、有漏の人間は茫々たる宇宙の迷津に立てる丐兒のみ。吾れは、何處より、如何にして來りしかを知らず。日暮れて彼岸は遠し、此の時に方り、忽然として我が前に現はれ、我れを撫て、我を導くものは、彼の大慈悲の御手なり、誰れか之れを疑懼して、殊更に行く手を轉ぜんとするものぞ。盡く聖典を疑はば、聖典なきに如かず、吾曹の依從すべきは此の唯一の聖典なり、黑朦々裡の大悲の御手なり、云々。

此の說の當否はこゝに評せざるべし、但し、爲我の念世界の全面に氾濫し、安心依從の本地までも爲に覆殺せんとせし十九世紀の精神界の、如何に混亂紛擾の有樣を呈せしかは、ニューマンが立脚地によりては、兎も角も英國十九世紀精神界の一側面を代表するものとして永く史上に記せらるゝに足らん。

ニューマンは文章家としても一世に冠たりき。彼れは一派の文人の如く格を破りて文を修飾する弊なし、意の赴くに隨うて筆を進むれども、行文皆典據ありて一語

苟くもせず、讀者の易解を主として平順明正を第一とせり。されば文章中形容詞の數いと少く、直喩、隠喩、證例の如きも、動もすれば險に陷り易しとて常に力めて之れを避けき。されば一種の批評家はあまりに平明なりとて貶するものもありしが、彼れが天賦の詩才は始終其の文に現はれ、温潤和光の趣致酌めども盡きざるの觀あり。加之、主題によりてはよく此の平板を脱し、曲折波瀾の妙を盡したる場合も少からず。

尚ほオックスフォード派中の有名なる文士を擧ぐること下の如し。

カーディナル、マンニング（一八〇八―九三）は羅馬教會に屬し、派中ニューマンと名聲を爭ひし人なり。文才は夐かに其の下にあれども、教會中の説教は世に喧傳し、著述また多し。

リチャード、ハーレル、フルード（一八〇三―三六）は史家ヂェームス、フルードの兄なり、其の説はニューマンに感化を與へしこと尠からずといふ。されば正當にオックスフォード派の先達ともいふべき人なり。不幸短命にして著作も少く、事業の見るべきものなし。

アイザック、ウィルヤムス（一八〇二―六五）はニューマンに次ぐ同派の詩人なり。「小キーブル」と稱せらる。

ウィルヤム、ジュールジ、ウォード（一八一二―八二）は「理想のワード」といふ綽名あり、其の著"Ideal of Christian Church"の甚しく蕪雜なる著書たりしに係らず、同派の急先鋒として頗る注意するに足りしが故なり。

ヂョーン、チャアチ（一八一五―九一）は同派中の錚々たる文士なり。ダンテ、アンセルム、スペンサー等の評論をものして名あり。晩年オックスフォード派運動の史を起稿し、中途にして歿しき。

ヘンリ、バーリー、ピュー（一八二九―九〇）はピューゼー Pusey の傳をものして名あり。講説に有名なるもの少からねど、いづれも冒よりは修辭の巧妙なるを以て稱せられたり。

さてオックスフォード派と其の反對派との中間に立ちし神學者中にて忘るべからざるものは、オックスフォード及びウィンチェスタアの監督たりしウィルバアフォース Samuel Wilberforce（一八〇五―七三）なり。初はオックスフォード派に屬し、後は殆ど反對の地

M. Pattison.

位に立ち、再びオックスフォード派にかへりし人なり。僧官としての事業多かりしが中に、其の説教は時俗を化導するに效ありしは著き事實なり。且つ文才に富みて宗教に關する著作少からず。

さてオックスフォード派の正反對の位置に立ちし人々の中にて稍顯はれたりし者三家あり。スタンレー、バッチソン及びヂェットこれなり

アーサア、スタンレー（一八一五—八三）はアーノルドの感化を受けて其の傳記を著しゝ人なり。大學に助教師たりしこと十年許り、後ちカンタアベリの教師となり、クライスト、チャアチに轉じ、又オックスフォード大學にて宗教史の教授となり、終にウェストミンスタアの監牧師（チャプレン）となりき。此の間著述少からず、殊に多年の研鑽を重ねて、パレスタインの地理及びイースタア、チャアチ（Easter Church）の變遷史を著しき。文章は流麗にして平易なり。

マーク、パッチソン（一八一三—八四）はリンコン大學の校長たりき。其の初めニューマンを助けて爲す所少なからざりしが、ニューマン南歐に走るに及びて、漸く説を變じ、遂に自由信仰を唱ふるに至りき。さはれ彼れは他の其の名籍は教會にお

きながら、私に懐疑説を持する徒の嚮に倣はず、公々然反對の意見を發表しき。彼の "Essays and Reviews" に於て他の六人と共に當時の宗教及び教會を論じて頗る物議を惹き起しゝが如きは其の著き證なり。されど其の思想の全躰をば社會に發表せざりしが故に、其の懐疑の傾向は果して如何さまなりしか、今知るに由なし。平常「書籍を著さば最良の書籍たるべし」との主義なりしかば、多く筆をとらず、『英國文豪列傳』の爲めに『ミルトン傳』をものし、『クォールタリー評論』及び『サタアデー評論』などに小品を寄せたるのみなりしも、其の學才は夙に知人に推服せられたりき。行文流石に一家をなして、雅馴遒勁の名あり。

ベンヂャミン、ヂェット（一八一七—九三）は、其の經歷は略ぼパッチソンに似て、身は宗教大學の長たると同時に、バッチソンにひとしく、"Essays and Reviews" の記者の一人たりき、但しニューマン等が主唱せりし「宗教復古（レリヂヤス、ルチサンス）」に對しては、毫も同情を寄する所なかりき。その著作の大部分はプレトーの反譯にして、文章はパッチソンに劣れり。オックスフォード派の運動が其の頂點に達したりし時は、蘇格土教會の分裂の衰運に傾きし時なりき。此の派に於て最後の運動の最も勢ひありしは、**トマス、チャル**

マ！ズ なり。一千七百八十年に生れて、一千八百四十七年に歿しき。一千八百二十三年セント、アンドリュースにて倫理哲學の教授となり、後エヂンバラに轉じて神學講師となりぬ。著書は "The Adaptation of Eternal Nature to the Moral and Intellectual Constitution of Man" を其の一とな す、頗る浩瀚なり。說教者としての名は高かりしも、學者、教師としての名譽は大ならず、「論理よりは修辭に長じたり」といふ評はあれど、其の修辭だにも文學史上に特筆する價値なし。

エドワード、アアヰング (一七九二—一八三四)はカーライルが親友にして、一時はチャルマアズを援けて蘇土教會の爲めに盡瘁し、チャルマアズがグラスゴーにて名聲を馳せし頃、アアヰングは單身ロンドンに赴き、ハットン、ガーデンにて說教を試みき。說教者としての伎倆はチャルマアズに及ばざりしかど、文人としては其の上に出でたり、殊にコールリッヂに就きて文學を學びし後の如きは其の筆大に見るべし。蓋しチャルマアズは天資宗教家にありながら、布教の方便にとて文學の力を借りし者、アアヰングは本來文學者にありながら途を失して神學界に入りし者と評すべし。

第二十章　科學壇の文才

博言學乃至古語學界の文士——ブライヤント——ウェークフィールド——ボオソン——コニンゲトン——マンロー——セラー——スミス——理化學界の文士——デーヰー——フェアフアクス——ダーヰン——チャムバアス——ヒュー、ミラー——ハックスレー

前章、神學壇及び哲學壇の名家を略說せし折にも、文學史上に揭ぐべき者として之れを取捨選擇するの易からざるを感じたりしが、今科學壇の文才を紹介するに當りては、其の取捨選擇の一層容易ならざるを感ぜざるを得ず。哲學や、神學や、素と純文學の範圍に入る者にあらず、而も其の應用せられて評論、說教の文となるに及びては、文致や、旨趣や、多少の文學的價値無きにあらず、隨うてそを捃摭して略說する必しも難き業にあらざれども、他の科學に至りては、遠く純文學と隔たれるものゆゑ其の文章につきて純文學的評隲を試みんは、頗る爲し易からざる業なり。されども、實際につきて見るときは、科學壇にも亦た文才の士なきにあらず、其の著述の中にいみじき文章も尠からねば、こゝに試に其の最も著明なる例二三を說かん

J. Bryant.

か。

第一に擧ぐべきは、彼の博言學者、古語學者の人々なり。按ずるに、中世の頃には、所謂古學未だ興らず、殆ど一人の之れを專攻するものなかりしが、降りて學藝復興期に至れば、苟も操觚の業に從ふ者にして多少これを修めざりしはなく就中彼のエラスマスの如きは(古學興隆の初期に於て)最も著名なる學者なりき。爾來一方には國文學發達し、一方には希臘、拉典の古文學盛んに研究せられ、十七、十八世紀の頃に至りては、所謂古學は普通の文學と立離れて特に專攻せらるべき者となりぬ、さもあれ文學者にして古學の知識なきは尙不具者と見做さるゝ有樣にて、其の分離も未だ全きを得ざりしが、十九世紀の初に至りて、古學は遂に全く普通文學と立離れて科學の部分に入るとなりぬ。下に述ぶるは分離以後の學者につきてなり。まづ最も聞えたりしはヂャコブ、ブライヤント・ギルバアト、ウェークフィールド及びリチャード、ポオソンの三家なり。但し此の中の二家は專門學者としての功績は著大ならず。

ヂャコブ、ブライヤント(一七一五—一八〇四)は當時遺却せられたりし古代の

R. Porson　G. Wakefield

神話を研究せし人として記すべし。**ギルバアト、ウェークフィールド**(一七五六—一八〇一)はケムブリッヂの出身なりしが、敎會を去りてヂャコビン派に入り、激烈なる筆を振ひて盛んに宗敎上の事を論議し、遂に讒謗罪にて入獄し、赦されて後ち多く古學に關する書を著し、斯道を益せしこと尠からず。中にも "Silva Critica" は最も名高かりき。**リチャード、ポオソン**(一七五九—一八〇八)は其の文章の流麗を以て著はれたりき。千七百七十九年ケムブリッヂのトリニチ大學に入りしが、在校中夙に俊才の名あり、殊に擬古風の詩文に長じき。卒業に及ばずして校を退き、同校にて希臘語の敎授となり、後ちロンドン敎育會の圖書館係りとなり、在職中に歿しき。ポオソンは學者として最も貴重すべき精確の知識、鋭利の洞察力を有し、其の文章また得易からざりしが、惜い哉、生來の酒癖は筆と共に長じ、正則の業務に堪ふる能はざりき、それが爲め著作の見るべきものを遺さずして逝りぬ。

以上三家の歿後、オックスフォオド、ケムブリッヂ及びエヂンバラより各〻一名の古文學者を出だしたり。

オックスフォオドより出でしはヂョン、コニングトン(一八二五—六九)にして、卒業

するとやがて羅甸語の教授となり、終生其の職に從事せりき。ホレース、ホーマア及びヴァジル等の飜譯を首として、南歐の古文學を紹介して文壇を益せしこと尠からず。其の古學に於ける學風は、日耳曼の學者のごとく精緻なるを得ず、また英倫の學者の如く堅實なるを得ざりきと雖も、多く子弟を啓發して、遺憾なく古學の堂奥を窺はしめし伎倆と、彼の死記死誦の弊竇を脱して、よく古文學を現文壇に復活せしめたりし功績とは、共に長く忘るべからざるものなり。

ケムブリッヂより出でしはヒュー、アンドリュー、ヂョンストーン、マンロー（一八一九—八五）なり。トリニチ校を卒業して、同校の拉典語教授となりし人なり。學者としての力量はコニングトンの上にあり、ベントリー、ポオソンなどの業を大成せしは此の人の力なりと稱せらる。或は Lucretius を飜譯し、或はホレース、カタラス（Catullus）等を評論し、其の他、古學の研究に屬する斷篇少からず、中にも希臘、拉典の詩歌を國詩に飜しゝ伎倆は、當時獨歩なりき。たゞ其の風調の妙を傳ふる能はざりしを遺憾となすのみ。

エヂンバラより出でしはウィルヤム、ヤング、セラー（一八二五—九〇）なり。其の

著述は以上三家のに比して一段文學的趣味に富めり。グラスゴー及びセリオルにて教育せられ、數年の後ちダルハムとセント、アンドリュースとに教授たりしが、一千八百六十三年エヂンバラに轉じ、終生そこに奉職せりき。在職中"Roman Poets of the Republic"の著あり、同種の作中空前の名著なりと稱せらる。後ちヴァジル、ホレース、チバラス（Tibullus）及びプロペルチウス（Propertius）等に關する評論を著しぬ。其の他、前の著と躰を同うせるもの一二篇あれど、今も取りいでゝいふに足らず。

さるほどに、古學の研究は一歩を進めて、或はエヂプトの古文學を研究し、或はセミチック族の古語を討ね、更に印度を中心として東洋諸國の語學を修め、兼ねて其の文學、宗教等を紹介するもの現るるに至りしが、一々語るに遑あらず。下にはウィルヤム、ロバアトソン、スミッスの上のみを略叙して、他の科學者に移らんとす。

ウィルヤム、ロバアトソン、スミッスは一千八百四十六年に生れて、同九十四年に歿しき。アベルヂーンシャヤのフリーチャアチ、コレッヂといふ學校にて、希臘語の教授となり、文壇に立ちては獨逸風の評論に知られたりしが、「エンサイクロピヂヤ、ブリ

タニカ』に載せし文忌諱に觸れて其の職を失ひ、轉じてケムブリッヂに入りて亞剌比亞語の教授となり、又圖書館の館友となり、遂に『エンサイクロピヂヤ』の寄書家となり、編輯助手となり、更に編輯發行の主任となりき。彼れの最も長じたりしは東洋の古典にして、新約書に關する重ずべき考證少からず。其の他"Kinship and Marriage in Early Arabia"及び"The Religion of Semites"の二著あり。文致は少くも當時の第二三流に列するを得べし。

さて理化學壇の文士に移らんに、**ハムフレー、デーヰー**(一七七八—一八二九)は先づ第一に紹介すべき人ならん。彼れは有名なる化學者にして、炭坑用の安全燈を首めとして諸種の發明あり、もと詩人ベッドースの父なる(クリフトンにて有名なる)醫師の弟子となり、其の助手となりし間に諸種の有益なる研究をなしゝと共に上流の人々と交り、殊にコールリッヂ、サウヂー等の一派の詩人と相往來して大に文學上の知識を得たりき。

かくて廿三歳の時選ばれてロンドンなる「ロイヤル、インスチチューション」の講師となりしが、其の講話の趣味に富めるは前後比ひ尠なかりき。後には彼の有名なるフ

ァラデー、チンダルも其の講話を助けたりき。著書は"Salmonia"及び"Consolations in Travel"の二冊あるのみなれど、何れも當時に歡迎せられ、其の他の小著にもまた文才の見るべきものあり。

デーヰーと同時に出で、數學、天文、地文等の學者にして、文名嘖々たりしは**メレー、フェヤファックス**(Mrs. Somerville)なり。一千七百八十年に生れて、同八百七十二年に歿しき。其の自傳は筆致流麗、有趣味の記事に富めるを以て稱せらる。其の他にては David Brewster (1781—1868 數學、理學の專門家) John Herschel (1792—1871 天文學者) Charles Lyell (1797—1875 地質學者) Robert Murchison (1792 1871 同上) John Tyndall (1820—93 物理學者)等なるが、皆文名ありきの。

チャールス、ダーヰンは彼の十八世紀中韻語を以て著はれ、兼ねて科學の造詣淺からざりしエラスマス、ダーヰンの孫にて、一千八百九年二月シュリューズベリに生れき。初めエヂンバラにて教育せられ、後ちケムブリッヂなるクライスト大學に入

り、最も心を理科學に傾けしが、卒業の後南海に航して實地探檢を試み、滯在五年間大に得る所あり、同三十六年本國に歸り、其の觀察を元として其の學説の組織に力め、傍ら南洋巡見記の出版に從事せりき。かくて同五十九年に至りて、有名なる"Origin of Species" の一書を公にして世界の學界を聳動し、倚引きつゝきて夥多の注意すべき書を著し、一千八百七十一年には更に "The Descent of Man" を公にしき。蓋し、掉尾の大作なり。同八十二年に歿しき。齡七十四。

晩年に至りて其の人に語りし所に據れば、彼れはいたく文學を好み、ことにシェークスピヤを愛誦せりき、而かも其の詩文を耽讀せしは、老後よりも寧ろ少壯のころなりきといふ。そが文學的素養の文學と最も緣遠き學術研究の當時にありきとは奇ならずや。彼れが文才は、英氣の旺然たる少壯時には其の勢を潛めたりしが老成一家の見を樹つるに及びて煥發せりき。"Voyage of the Beagle" "The Origin of Species" "The Descent of Man" 等、一として文致の老成を見ざるはなし。ダーヰンの文躰は明晰と强健とを旨として無要の修飾を加ふることなし、而も其の事を叙し、理を論ずるや、主客整然、緊張宜しきを得て、宛らに其が學説の眞相を發揮し來る。

ダーヰンより前に出でゝ、早くもダーヰンまがひの一進化説を "Vestiges of Creation" と題せる一書にて唱へ、忽ち世俗に喧傳せられ、學者より手痛き攻擊を受けし者あり。其の名はロバアト、チャムバアス、といひて、エヂンバラにて其の兄と共に多年通俗にして有益なる種々の書籍を刊行して名ありし人なり。件の書は科學説といはんよりは寧ろ隨感錄の整ひたるものともいふべきものなるだけに、讀みての趣味は少なからず。説の斬新なる、文の感情的なる、いづれも時の讀書社會を動かすの力ありき。此の人の著は尙ほわれど、いづれも此の著には遠く劣りたり。チャムバアス及びダーヰン等が説に對する攻擊はさま〳〵なりしが中に、最も激しく反對せし者は、いふまでもなく、時の宗敎家なりき。而して "Vestiges" の攻擊者中にて最も力ありしはヒュー、ミラア（一八〇二—五六）なりき。彼れは半は宗敎的、半は科學的なる見地に立ちて、根本的に其の所謂邪説を顚覆せんとなしき。ミラアは當時の英才にして、觀察の周細を以て著はれ、地質學を專攻しながらも侮るべからざる文才を有し、多年新聞雜誌の編輯、寄書に從事して、論難に老練なりし人なれば、チャムバアスの薄弱なる議論の如きは、忽ちに挫け敗れき。ミラア中

J. H. Huxley.

ろ神經衰弱の餘り發狂し、遂に自殺して失せたりしかば、其の專門的著述は "Old Red Sandstone" (一八四一)の外、多く見るべきものを殘さずして了りぬ、されども其の通俗ながら雅馴明快なる文致は、多とするに足るべきものなり。

さて十九世紀科學壇の彬々たる文才の殿として、餘業の今尙顯著なる者をトマス、ヘンリ、ハックスレーとなす。ミラアよりは二十年、ダーヰンよりは十五年の後に生れて、一世に重んぜらるゝこと四十年、一千八百九十五年に齡七十一歲にして歿しき。早く海軍軍醫となりて、ダーヰンにひとしく、南洋に航して實際に研究する所ありしが、其の名世に知らるゝには至らざりき。齡二十六歲にして學士會員となり、齡六十歲に至るまで件の學會の講演に從事し、諸科の學を研鑽せり。彼れが科學界の功業は彼の進化說を特殊の見地より見て確立不動のものとなしゝを第一として、其の外枚擧するに暇あらず。其の博覽强記にして根柢の廣く固きは、更にもいはず、其の斷案の力ありて確かなるなどは、皆人の稱ふる所なり。彼れが批評家としての技倆は、一千八百七十八年『英文豪列傳』"British Men of Letters" の爲めに著しゝ『ヒユーム傳』に於て知らる。引證該博、議論雄大にして情理透徹、文致亦た之れに副へり、彼れもまた一世の文豪たるに恥ぢざるなり。

第二十一章　脚本

十八世紀以前の脚本と十九世紀の脚本との相違——インチボール
婦女史の作——ヂョン、ガキーフの作——ベーリー女史——技巧悲劇——傳奇劇復興運動——學者劇——シェリダン、ノールズの諸作——リットンの諸作——梨園外の作劇家

第十六世紀このかたの英國脚本を通覽せる者は、必ずや其が第十九世紀に至りて一大變化を經過したるを覺らん。按ずるに、十八世紀以前に在りては、脚本と演劇とは大抵相一致せりき、即ち脚本として作られたるものは、大抵必ず演ぜられ、演ぜらるゝものは讀み物としてもまた興味ありしが、第十八世紀の末より第十九世紀へかけては、兩者次第に相分離し、机上に巧妙の文學として持て囃さるゝ脚本は、舞臺にかけては成功せざるが多く、舞臺に面白く演ぜらるゝ脚本は讀みては興味の索然たるを常とするに至りぬ。要するに、脚本中に演ずべき脚本と讀むべき脚本との二種を生ずるに至りたり。奇なる現象といひつべし。今其の原因を尋ぬるに先だち、演劇と脚本との實況を語るべし。

一千七百九十年より一千八百十年に至る間に於ける舞臺に上りし演劇の臺帳は、一千八百十一年インチボールド女史の手にて"Modern British Theatre."と題せる十卷の冊子となりて世に出でしが、其の眞詩趣に乏しきこと甚だし。セインツベリ氏の如きは「之れを通覽せんには、他に一冊の書もなき絶海の孤島に於てか、又は長雨に降りこめられたる旅亭の徒然に堪へざる時か、さなくば餘程狂氣じみたる好奇心に驅られたる時ならではかなはず」といへり。さて件の十卷中につきて見れば、フレデリック、レイノルド(多作の脚本作者、『エルテル』を脚本に翻しゝ人)の作二卷餘、インチボールド女史の作一卷、ホールクロフトの作一卷、カムベアランドの作一卷、コールマン其他の作五卷にして、いづれも凡作といふものから、實用上より觀るときは、ホールクロフト及びコールマンなどの如きもやゝ堪能の作家なり、其の他の作者の伎倆はた幾分か取るべきものあり、オキーフの如きも、蓋し其の尤なるものか。

ヂョン、オキーフ(一七　八—一八三三)はダブリンの人、壯時は自ら俳優となりて本を作せしが、晩年明を失ひて筆を絶ちしかば、其の老熟の作を見るを得ず。一千

七百八十一年より同九十八年に至るまでに大小五十種の作ありと雖も、自ら選びて出版せしものは三十種に過ぎず。多くは滑稽劇にして、眞喜劇の趣に近きものと單に一場の戲謔に過ぎざるものとあり。其の直接の文學的價値はいと少けれど、何れも舞臺上に當りを博せしものなれば、脚本として多少參考するに足るものなり。"The Merry Mourners"は粗大なる笑謔劇にして、"The Castle of Andalusia"は珍らしき野賊の事を作れるもの、"The Poor Soldier"は愛蘭土滑稽樂劇なり。其の他"Wild Oats""A Beggar on Horseback""The Doldrum"など見るべし。いづれも愛蘭土風を帶びたる所其の特質なり。

さて前にもいへる文學と劇との分離を生ぜし端緒は、**ベーリー女史**(一七六二—一八五一)が作せし頃にありといふべし。女史は當時閨秀として一世に讃美せられし女にて、其の作に多少見るべきものあり。久しき間ハムプステッドに住して、スコット及び其の他の名士と交りたりき。一千七百九十八年"Plays on the Passions"と題せる叢書(シリーズ)の第一卷を出版せしが、これには十八世紀の主なる人情を表はさんと期して、喜劇、悲劇、さま〳〵の形とりまぜて、著き憎怨、恐怖、戀愛等の感情を描かん

と試みたり。この卷の序に、劇に關する議論を附し、且つ開卷第一には"Basil"と呼べる書齋劇(クロゼットドラマ)を載せたり。此の書忽ちに遠近に傳はり、忽ちにして三版を重ぬるに至り、其のうち"De Monfort"の如きは上場せられて、喝采を博しき。さて一千八百二年に、同じく第二卷を、同十二年に第三卷をものし、尙其の間に"Miscellaneous Plays"を著しき(一八〇四出版、後ち短篇の詩文若干を加へき)。女史が作は概して演じてよりも寧ろ讀みて趣味あり。其の悲劇の無韻律語は、辭は精練なれども、熱誠の神興に乏しく、且つ多くは一地方の特風乃至一時代の特風に偏し、ビザンチン、サクソン又は學藝復興等の一時一處の類型的人物を主とせるが故に、個人の性格は漠として捉へ難きを常とせり。喜劇の作には時に無邪氣の可笑味なきにあらねど、これはた科白上の滑稽に乏しく、且つ破綻乃至和解の因緣を人物の性格に置かざりしが爲に、興味深からず。要するに、女史が一世に名を成しゝは、其の作の價値ありしが爲めにあらで、寧ろ恰も文學の間歇期なりしが爲めなり。

かくて十九世紀の初めつかたより所謂"技巧悲劇"Artistic tragedy (artistic comedy に對して云ふ)起り、劇界に新現象(好現象とはいはず)を呈しぬ。其の由來を尋ぬるに、氣

銳の作家等が當時の劇の、或は價値なき佛劇の摸倣にとゞまり、或は荒唐なる夢幻劇の類ひにして、到底爲すに足らざるを感じ、翻然遠く十七世紀に沂り、たゞちにシェークスピヤを模範として之れに十九世紀の新思想を注ぎ、以て一新劇を興さんと企てしに因したり。按ふに、是れ傳奇派運動の一波たるに外ならねど、流石に此の種の劇の起りしは偶然にあらざりしなり。既に之れより先きにも、チャールス、ラムの作に"John Woodvill"あり、コドヰンが作に"Antonio"あり。また彼のバイロンが悲劇の如きも、詩としては他の諸名篇に劣り、劇としては舞臺的効果に乏しかりきと雖も、また決して凡作にあらざりしなり。たゞし同じく劇を試みながらも、スコットに至りては作劇の才甚だ乏しく、シェリーが"Cenci"の如きも詩才の燦然たる割には、劇としての趣味は乏しかりき。特りコールリッヂに至りては、作劇の才能詩人派中に冠絶し、舞臺上にも成功しき、但し"Remorse"及び"Zapolya"の如きは其の傑作にあらず。

かゝる失敗の引きつゞきしにも拘らず、演劇をして(若しくはせめて劇詩をして)趣味多からしめんの企圖は常に息まず、如何にもしてこれを實現せんと欲せしは明

かなる時の需なりき。こゝに於てか、或はベッドースが傳奇劇復興(エリザベス朝の人にあらざれば到底夢幻劇の成功覺束なきこと、猶ほ我が今日の夢幻劇の新作の到底、元祿享保の夢幻劇に及ぶ能はざるが如きものなるに拘らず)となり、或は所謂學者劇(アカデミックドラマ)となりぬ。ミルマンが"Fazio"タルフォオドが"Ion"などは、學者劇の標本なり。而して、いづれの方にも、一として成功の著きものはなかりき。タルフォオドは寧ろ、ブラウニングが新作の紹介者となりて、彼の神韻幽渺たる"Strafford"及び情感深刻なる"Blot in the 'Scutcheon"を上場せしめし功勞に關して記憶せらるべきなり。

かくて當世紀上半の文學と劇とをして全く分離せしめしはシェリダン、ノールズ(一七八四—一八六二)なり。大シェリダンの血つゞきに生れしかば、少にして文壇知名の士と交りしが、長ずるに及びて一たびは民兵隊に入り、又醫師ともなりしが、性來の嗜好は藝苑に馳せて、遂に某劇場に入りて俳優となり、又演劇術の師ともなりしが、著き成功なく、遂に三十歲にして劇の作者となりぬ。其の作は、當時殆ど確言視せられし、劇場の實際知識なくては好脚本をものする能はず、といふこと

と、文學の才に秀でし人は、不思議にも、劇場に意を得ざる世なり、と言ふとゝを實證せり。但し、こは反面より實證せしにて、彼れが作は、其の劇の實際に通じたりし爲めに、舞臺上には成功したりしが、文學上の價値は甚だ乏しかりしなり。其が悲劇中にて最も著名なるは"Virginius"にして、作として佳なるは"Caius Gracchus"(一八三六)及び"William Tell"(一八三四)なり。而して喜劇の傑作は"The Hunchback"(一八三二)及び"Love Chase"(一八三六)等、いづれも例の artificial comedy をやゝ改善せるものと見るべし。本來神興によりて筆を馳せしことなきが上に、あまりに多く舞臺の事情に拘束せられし爲め、其の人物、動作等、いつも型に拘したるものとなり、文學上及び美術上の價値を損じたるは亦た已むを得ざる結果なりき。

舞臺上の成功はシェリダンに次ぎ、文學上の價値は流石にシェリダンよりも優りしはブルワア、リットンの脚本なり。"The Lady of Lyons""Richelien"(一八三八)"Money"(一八四〇)等は、けだし其の傑作なるべし。"Richelien"は甚しき妙所なき代りに、咎むべき難もなく作られたるは、頗るシェリダンの作の似たり、"The Lady of Lyons"は不自然にしてすべて大袈裟なれども、流石に看者の同情を動すに足る妙處あり。

而して"Money"に至りては例の技巧的喜劇 artificial comedy の上乘なる者なり。其の他"Duchesse de la Valliere"を始めとして、作あまたあれど、皆文學としても、劇としても、以上三作の列にあらず。

以上の作者はシェリダンを除く外は、大抵專門の劇作者にあらず、いはゞ劇の極衰期にいでしが爲めに、多少の名をなしゝ門外文士なり。しかるに、こゝに門外文士にして、流れ〳〵て竟に劇界文士となりしもの一人あり、ブランシ是れなり(一七九六—一八八〇)。もと古物學者にして多少の名ありしが、一千八百十八年頃より著作に從事し、飜譯、創作の長短篇、合せて百餘に及べり、そのうち劇の作は正劇より端物に亘りて頗る多し、いづれも輕妙以上の讃辭を與へがたし。

此の外、當期中脚本に指を染めし者を擧げ來らば、ミットフォオドよりテニソンに至るまで、詩人、小說家の名若干を擧ぐべき筈なれど、彼等の作は其の本領にもあらず、且つは劇壇を輕重せし作にもあらねば、今は總て省くことゝせり。要するに、十九世紀に於ては、文學者の劇詩は、おしなべて遙かに其の人々の詩歌、小說の作に劣り、詩歌、小說に秀でざりし人々の脚本は文學的價値殆ど蕩然たりき。

第二十二章　總收

十九世紀文學の價値—詩歌變遷の五期—自然主義—ローマン派—詩人の輩出—テニソンとブラウニング—模倣と創作—プリ、ラファエル派の運動—詩歌の全盛期—小說界の變遷—文學と生活—定期出版物の發達—匿名の流行—歷史文學—劇文學—神學—科學—美學家其他—現未の疑問

既に論述したるが如く、第十九世紀の新文學は前世紀の末に起りし歐州革命の所產にして、其の萌芽は既に十八世紀の末にあり、就中一千七百八十年より一千八百年までの間に此の氣運最も著かりしなり。此の間に出でし著作は、單に文學のみの上より見れば、價値多きものにあらず。所謂文學鑑賞家等は以爲へらく、此の期の文學中ボスエルが『ヂョンソン傳』、バアンスが詩歌の數篇、及び"Lyrical Ballads"等を除くの他は、亦た大に見るべきなしと。又以爲へらく、小說の如きも、大抵は荒唐蕪雜、稚氣を脫せざるもの多しと。さもあれ比較研究の態度を取れる文學史家乃至國史家などの見地より見來れば、流石に、作の價値以外に、幾多の取りどころあるをおぼゆ。例へば、クラッフ若しくはクーパアをとりて、ゴールドスミッス若しくはト

ムソンと比較せば如何。更らに之れをウォオヅヲオス若しくはコールリッヂと比較せば如何。斯くの如く比照すれば、當時の諸作家が小品だにも、別に新意義を生じ來る。況んやバアンス、ブレークが新聲をばサウヂー、コールリッヂ、ウォオヅヲオスが初期の作と比照したる場合をや。所詮、過渡時代の作の價値は、作其の物の上にのみ存せずして後の傑作の導火線たりし上に存す。

當期の小說界の狀況またこれにひとし、當時の小說家等が後代の作家を指導せし力は多少詩人らのに劣りたれども、其の勞苦の度は彼れらのに越えたり。ベックフォオドが物語(アールス)はバアンスが詩歌と對すべく、ホールクロフト、ゴドヰン等の小說はクーバア以下の作と相照らすべし。而してスコットが小說上の新事功に至りては、ウォオヅヲオス、コールリッヂ等の韻語上の功蹟よりも、或意味に於ては、一段困難なる事功なりしなり。且つや當時の韻語詩人にありては、若し十八世紀の無氣力爛熟に厭きたらん場合には、直ちに古に復りて、其の師表を紀元前四五世紀の希臘に求むるを得べく、中世の伊太利に求むるを得べく、學藝復興時代の各國に求むるを得べかりしが、特り小說家はさる便宜を得る能はざりしなり。按ふに、小說作家の則るべかりしものは十八世紀の自國の作物か、さなくば佛蘭西、伊太利の物語類ありしのみ。而してこれ等の作はた新小說の創搬に對しては殆ど何の裨益する所もなかりしなり。彼等は徒らに闇黑中を模索したりき。後世がスコットの功を多とすべき所以は、蓋し此に存す。

評論壇、神學壇などの模樣も亦詩歌、小說壇の趣と大差なし。要するに、件の二十年間は文學界全躰が未だ緒に着かざりし時なり。

そのころより今日までの間に詩歌界は變遷の五期を劃せり。其の第一期、第三期及び第五期には創才ある詩人彬々として輩出し、第二期と第四期とには、彼等が名作相接踵して出版せられき。即ち第一期は一千七百八十九年代即ちスコットつぐ十五年間にして第三期は一千八百十年より以後の十五年なり。第四期はそれより一千八百三十六年まで、第五期はモオリスの生れし年より今日までなり。件の第一期に於てはローマンス(傳奇的詩歌)復古の勢ひめざましく、中世文學の復活、佛蘭西革命の影響、及び神秘的觀念の勃興等は之れを助けて力ありき。自然

に復れ「新たに立脚地を自然界に求めよ」などいふ聲は、まづ半無意識にクーパーとクラップとによりて揚げられ、バアンスとブレークとによりて他方面より助長せられ、程なく"Lyrical Ballads"は出版せられ、遂に確然たる精神的のものとなりてウォオヅヂオス。コールリッヂ。シェリー及びキーツよりスコット。バイロン以下サウジー。カムベル。リー、ハント。モーア等に傳はりたり。要するに、當時の詩壇は自然主義を以て一貫したりきといふも可なり。而して其の派の詩人が社會に及ぼし、勢力の多少は必しも件の精神を享受せりし度合には關せず。スコット。バイロンの如きは、詩人としてはウォオヅヂオス。コールリッヂ。シェリー。キーツの下にあり、其の自然主義はた四家のに及ばざれども、其の社會上に得たる名聲に至りては、遙かに彼等が上にありしなり。リー、ハントも詩人たるの天才、技倆は更らに一段の下にありしも、其一時の感化力はウォオヅヂオス。バイロンに越ゆるものありき。

さてこゝに注意すべきことあり、何れの代にても、名匠、巨手の輩出したるあとには、騒壇の景氣一時沈落するに至るか、さなくば小手腕の作家が模倣の作のみはびこるが常なるに、當期に於ては毫もさることなかりしことと是れなり。テニソン。ブラウニング。アーノルド。ロセッチ。モオリス。スヰンバアンの如き俊才が、ウォオヅヂオス以下前代名家の後嗣として一層の光彩を門戸に生じたりしは、更にもいはず、フォド。ブレード。マコーレー。テーロア。ダーリー。ベッドーズ。小コールリッヂ。ホオン等の如き第二流の詩人すら、各〻獨得の伎を有して、他の摸擬を事とせず、兎も角も一家の詩躰を持して、此の間に參はりしは、奇觀とすべし。彼れ等群詩人のウォオヅヂオスに對するは、エリザ晩朝の詩人等のチョソン。フレッチャアに對し、若しくはスペンサアに對せしが如くならざりしのみならず、寧ろ新生面を開き來りて英國の詩歌を富贍ならしめき。彼等の作は一つ〳〵に取りいでゝは見どころも少けれ、引きくるめて評すれば、容易に得難き吟詠集とたゝへつべし。

さて次ぎにあらはれしテニソンとブラウニングとは、共に詩歌の俊才といはんよりは寧ろ神才といふべきものにして、全く同時に出で同行路を取り、作詩に從事すること共に六十年、且つ修養の爲めに久しく作を絶ちしこと、其の修養の大效ありしこと、爾來孜々として作詩に從事し、終生之れを怠らざりしこと等に於

て、兩者相ひとしかりしのみならず、其の作詩の質に於ても、二人の差は、チューサア・スペンサア・ウォオヅヲオス・シェリー等の個々の間に存する差異ほどに著大なるにあらず。二人共に自意識して現在を歌ひ、又未來を歌へり。其の差等は此の未來を謳歌せし深淺と作詩の伎倆、特質とにあるのみ。かくも同樣なる天才の同時代に出で、同一方面にあらはれて、半世紀以上の文壇を飾りしは、稀有の盛觀といふべきなり。

テニソンとブラウニングとが作を誦するに方りて、毎に想起せらるゝはキーツが功蹟なり。彼れが著作の量は多からず、又社會に對して勢力ありしものにあらず。然れども彼れは明かに第三期の首に坐せりしもの、彼の十九世紀詩歌の特質の一たる歴史、美術、文學を歌ふことは、主としてキーツによりて端を發かれしが如し。人或はキーツが作を以てテニソンが作の父なりとなす、かゝる意味より言はゞ、或はブラウニングが作の祖なりともいひつべし。

テニソン、ブラウニングの二文木が、枝を交へ、葉を重ねて、一世紀間の文園を蔽ひし時、幾多の名草、芳樹、其の下蔭に生長しき。詩才に兼ねるに批評眼を以てし、春秋の

眺めもあかぬはマッシュー、アーノルドが楓の一もと、異邦の手ぶりゆかしき梅柳の兄妹はロセッチの一家、清影月を迎へ、琅玕風に鳴るはモオリス・スヰンバアンが修篁の一叢、クラッフ、ロッカア、リットンの諸英將た此の間を點綴して紅紫繽紛正に是れ不老の長春園、仙鶴松韻に和し、戀語雨聲を縫ふの概。

テニソン、ブラウニングに至りて十九世紀の詩歌は其の頂點に達し、これより暫時また衰期に向はんとする徴ありしは、第一期、第二期には影もなかりし摸倣といふ事の此の時に起れるを見ても知るべし。もとより大詩人の作は、或は想に於て、或は形に於て、後代に影響することと夥しく、現にウォオヅヲオスの如きは、殆ど一百年間多數人(散文家をも含む)の間に大なる勢力を有し、シェリーの如きも、久しく盛んに摸倣せられたりしとあれど概して、言へば第一期、第二期の作者は、或一二家を標的とせず、寧ろこれを階段として一層の高處に登らんと試みしなり。然るに、テニソン、ブラウニング出づるに及びては、十九世紀詩人の爲し得べき頂點ほゞこゝに定まりしか、只管に二人を師表とせんとするもの續出しき。想に於て、二人の如くならんと勉むるは或は可なるべし、晦澁險怪なるブラウニングが詩形を學びて、そも何

どとをか爲さんとすらん。

との摸倣の卑しきを知り、獨立して自家の感想を歌ふべしといふ主意を立てゝ、健氣にも現はれし彼の**痙攣派**と謂ふ一派ありしが、惜しむらくは此の派のうちに偉大なる詩才なかりしかば、何の志でかしたることもなくて衰へにき。かゝりしかば摸倣の潮勢は倍く其の甚しきを致したりき。彼のマッシュー、アーノルドの如きさへ、一たびは熱心なるウォオヅヲオス崇拜者なりしのみか、ゲーテ、テニソン等の詩風をも攝取したりき。或批評家は曰はく、彼れにして、若し先輩の感化に動かさるゝと一段すくなく、卓然獨立して作せしならば、其の成功或は一倍なりしならん、と。アーノルドが果して然るべかりしか否かは容易に斷じ難けれども、リットンに至りては、明らかに前人摸倣の弊に陷りしものなり。かゝる例は尚其の他にもあまたありき。第四期に於て最も注意すべきは**「先ラファエル」派**の事なり。此の派の生起せし發端は美術界にあり。繪畫界、彫刻界に於ては今尚其の勢力盛んなり。而して詩歌界に於ける其の代表者はロセッチ兄妹、モオリス、スヰンバアンの四家とす。十九世紀後半に於て此の派の勃興せし伏線を尋ぬれば、近くはテニソン、遠くはスコット、更に遠くはバアシーの中古文學皷吹にあり。按ふに、此の派の主義は單に復古たるに止まらざりしなり。彼等は趣向に言語に過去を學びし外に、更にお

の〳〵其の見る所によりて新生面を開きたり。ロセッチの多感にして感情燃ゆるが如き、ロセッチ女史の宗教的にしてやさしくみやびたるは更にもいはず、スヰンバアンの妙辭流るゝが如くにして韻調鏘然たる、モオリスの物語歌の美妙にして温雅なる、何れも近代の佳什にして、上代にも稀れに見る所の珍品たり。要するに、此の派の詩歌は、彼の荒唐無稽なる、併しながら天眞爛熳たる中古詩歌の骨髓を取りて、之れに加味するに十九世紀的精緻と深邃とを以てしたる者といふを得べし。

第十九世紀は實に詩歌の全盛期なり、**英國詩歌の全盛期**なり。其の量より見るも、其の質より見るも、其の主題の範圍より見るも、古今、內外、かばかりの盛況に達したりし例はあらず。試に"Ancient Mariner"より"Crossing the Bar"に至る九十年間の作物を見よ。其の價値の度の上より見るも、世界中何れの國の詩歌か能くこれに凌駕すべき。其の詩風の上より見るも、シェリー、ウォオヅヲオスの如きは他國に其の等比を見易からざるに非ずや。加ふるに、往昔行はれたりし長篇の物語

に妙趣あるを認めて之れを再興せんと圖る者ありき。すなはち詩歌は、及ばん限り、あらゆる方面に於て、發暢を試みられたり、其の成功せざりしは、僅かに彼の劇詩を韻語もて綴ることゝ、深刻なる諷刺詩を試る事との二ありしのみ。所謂應用詩歌の類すらも興らざるなかりき。所詮、十九世紀の英國抒情詩は、其の圓滿なることに於て、殆ど希臘の昔に接近するものといふべく、其の範圍の廣きことに於て、世界の詩風を籠蓋せるものといふべきなり。「詩中の詩」たる抒情詩に於て此の域に達したる英國の功績贊美すべし。

さて小説の上を言はんに、十九世紀の小説は、其の興隆の初めには確乎たる標準なかりしが爲め、五里霧中にありしことは、前にもいへるが如し。十八世紀末二十年間及び十九世紀の初め十五年間にて見るべきものは、僅かにエッヂヲオス女史の作など二三篇に過ぎず。スコットが韵語より散文に轉ずるに及びて、近代小説はローマンス派の一風を加へ、今に至りて絶えず。其の作"Waverley"の如何に成功せしか、其の成功の如何に急速に歴史小説を誘起せしか、歴史小説の如何に時風小説を誘起せしか、これと共に起りしシオドーア、フックが滑稽小説は如何、この兩者の間に立ちしリットンは如何、さて十九世紀の中葉に至りて歴史小説の火氣一たび熄み、如何にキングスレーが作新光焔を揚げしか、これと共にサッカレー、ブロンテ女史、ジョージ、エリオット、アンソニー、トロロップ、ヂッケンス等の起りし模樣は如何、現今に於ける諸種の小説の區分如何等は、略〻既に説きおきたれば、今これを重説せざるべし。只注意すべきは詩歌の全盛と小説の全盛との關係なり。

詩歌と小説とは共に十九世紀英文學の大現象にして、共に近世大革命の影響によりて現はれしものにはあれど、詩歌と小説とは、元來其の勃興の動機を異にせる由を知らざるべからず。古今、東西を問はず、人の或境に臨みて詩情を催すは天性なれど、人は必しも他の詩歌を玩讀するを好むものにはあらず。かるが故に、古今、東西、詩歌は頗る多けれども、其の後世に傳はるはいと少し。其の同時代に傳播する範圍また知るべきのみ。幸ひにして多數の讀者を得る作者だにも、これのみによりて生計を立つるは難し。然るに、古今東西、斬新にして趣味ある話説を好むは人の天性なり、これを語るものゝ又これを聞くものゝ多き言を俟たず、而も之れを組織し、又は之れを文に草して、一部の小説となす技倆あるものに至りては割合は少數

なり。此等の事情によりて詩歌と小說とを比較せんに、前者は需要少くして供給多く、後者は供給少くして需要多し。かるが故にホーマアは食を市に乞ひ、リットンは一作十万金を得たりき。

以上は通じて見たる詩歌、小說と讀者との關係なるが、今之れを英國の十九世紀に見んか、文明の進歩は日に月に著く、敎育は急に普及し、國民の大かたは文字を解するに至り、世間一般に生活の餘裕生じたりしかば、こゝに娛樂を求むる心起り、人々小說類を歡迎しき。かるが故に、少しく文才、機智あるものにして、筆を小說に染むれば、其の作としての價値は兎も角もあれ、相應に一生に支ふるを得たりき。こゝに於てや僅々五六十年間に出でし作其の數に於て過去全躰のに幾十倍するに至りぬ。此の間に出でたりし小說は、必ずしも悉く拙劣なる急作にはあらず、其の質に於て、概して十七八世紀の幼稚なるものより進歩せるは更にもいはず、更にこの五六十年の間にも進歩したり。要するに、小說の作は今より大凡卅五年乃至四十年前の頃を極盛の期となす。ヂッケンス、サッカレー、ジョールジ、エリオット、ブロンテ、トロロップ、キングスレー、ブルワア、ヂスレーリ等の名家は皆千八百五十年代に最も多く作せしものにて、彼の小說を以て文學の生命となせる佛國すら、當時は及ぶ能はざりき。これより二十年が程のうちには、サッカレー、ヂッケンス相次ぎて歿し、トロロップも、エリオットも、また大作をものせざるに至り、キングスレー、ブルワア將た漸く老衰するに至りしかば、作の質稍〻下落せし觀あり。但し第二流の作の量に至りては、寧ろ前代に倍せんとし、世間の歡迎は愈〻加はり、遂には單に書物としいへば小說のことと解する者も生じ、若しくは文學と小說とを同一視する者夥しくなりぬ。而して、一世紀の前に於て、率先して小說界の蓁莽を闢き、此の全盛の種子を蒔きしは、主としてスコットの力なりといふも過言にあらじ。

かく詩歌と小說とが、等しく全盛を極めたりし動機は如何。前者は全く自動的に革命の潮氣に感じて續發せしにて、後者は重に他動的に社會の要求に應じて起りしなり。

次ぎに注意すべきは定期出版物の進歩なり。彼の新聞、雜誌的小冊子の、政治界などに頗る勢力ありしは、遙かに前の時代にして、當時は其の數もいと少かりしが、アヂソン、スチフトさてはデフォーなどの頃は、斯業大に衰へ、一般に價値なきものと

見做され、掲載の記事なども、纔かに"Robinson Cruso""Sir Launcelot Greaves."等の持て囃されしのみにて、評論文の如きは一向に世に冷遇せらるゝ樣なりしが、十八世紀の末に至り、一葦水を隔てゝ佛蘭西革命の大活劇の演ぜらるゝや、英國民は爭ひて其の事相を知らんと欲し、新聞紙の勢力はこゝに一轉するとなりき。(これには また讀書社會の擴張などいふ內部の因緣の添ひしはいふを俟たず)。かくて讀者の歡迎につれて、發行者もまた成るべく記事に趣味を加へて讀者を誘ひ、つゞき起る他の出版物と競爭するに至り、こゝに定期刊行物の亂發を來しき。時しもチャコビン黨は新聞、雜誌を機關とし政治界の活動をはじめたり。是に於て反對黨も亦同じく新聞類に據りて議論を闘はすることとなり、いよ〳〵世界の注意を惹きぬ。後程なく、便利なる新聞紙條例定まり、印刷術の進歩と共に價額も減じ、其の隆盛加はりたり。さる程に定期出版物は文學の全類を集め、詩歌、小說の創作より歷史、哲學、宗敎、科學の評論に至るまで、大概の著作は、其の單行する前に、一たびは新聞、雜誌に掲載せられずといふことなく、每日、每週、每月、每季等の出版物を通覽すれば、文學の全貌窺ひ得てほゝ遺漏なきに至りぬ。

定期出版物と文學との關係はこれに止まらず、其の盛んなる頃は大抵の文士は皆これに關係を有するに至り、小作家、小評論家もなほこれによりて生活し、彼のグラブストリートの文學ごろつきの如きは、全く其の跡を絕つに至りぬ。或意味よりいへば、定期出版物の力が文學者の地位を高めしなり。さてこれら定期出版物に掲載せし文章、詩歌には、大かた**匿名**を用ふるを例としたりき。特に十九世紀の初めには、何れの新聞、雜誌にても、徹頭徹尾、匿名を用ひたりしかば、所謂文學通にこそ其の論旨、筆致等によりて大凡の見當もつきたれど、普通の讀者は曉る能はず、人を離れて文のみを讀みにき。後には此れが一種の愛嬌と見做されて、知名の文人等もわざと帔衣(エプロン)を用ひ、遂には大雜誌の主筆さへも異樣なる別號にて社說をものせしことありき。かくていつしか此の風止みて、本名を署することゝなりしが、其は何時頃よりなるか明知し難し。"Household Words"にチッケンスの人物評論を物して公然署名せしなど、其の早きものなるべく、ひき續きては週刊の"Academy"月刊の"Fortnightly"などの、佛蘭西風を用ひて匿名を廢せしなど、最も著き例なり。但し、批評文の如きは、今日に至るまでも、以前と異ならず。投評文に匿名を用ふる

ときは、何となく記事に責任輕く、ようせずは刺傷、嘲謔の道具となり、さらでも作或は作者の眞價を穩當に論定するよりは寧ろ自家が着眼の奇警を衒はんとするが如き傾向となるは必然なれど、さりとて全く本名を署するとしては、其の寄書もかれがれとなるべく、讀者の快味も減少すべし。

要するに、定期出版物の狀況は、すべて今の我が邦の新聞、雜誌に徵して大かたは察知せらるべし。

さて或又意味に於て、科學に屬すれども、また文學に密接の關係ある(いはゆる純文學と科學との中間にある)歷史につきては、十九世紀中には目覺ましき事もなし。されど其の研究の勞力及び其の未來の史家に供給せし便宜などにつきて考ふれば其の功必しも多く他の文學に讓るべくもあらず。ケムブリッヂ大學の敎授アクトン嘗て學生に語りていはく「歷史は今や歷史家と離れて獨立す」と、この語はよく十九世紀史學の得失兩方面を藏へる者といふべし。これを希臘、羅馬の古へに徵するに、有名なるシューシヂヂース、ヘロドタスなどの歷史は、單に直接に聞覩せる事柄又は自家が讀みて感激する所ありし傳說等によりて綴れるものにして、今の歷史家の眼を以て見れば、到底不具なるを免れず。而して爾後數百年の後に至るまでも、歷史は、各國共に、同樣の有樣なりき。是の如くにして成れりし歷史は、史家が知見と感情との範圍內に於ける歷史即ち主觀の歷史にして、眞正の客觀的歷史にはあらず。

十七世紀の末より十八世紀の初へかけて、英のギッボンは卓越の識見を持して史の研究に佛蘭西派の風を用ひ、周到精密、一に事實の採拾に從ひしが、當時獨逸にても此の種の研究行はれ、大勢茲に改まり、遂に十九世紀に至りては、其の極端まで推進するに至りたり。マコーレー、カーライルの著の、如何に經營慘憺たるものなりしかを見れば、此の理明かならん。往時は荒唐無稽の囈語として棄てられし傳說、古記錄の類も、今や史料の最上級を占め、出所不明の逸話すらも、拾摭して博を衒ふものさへにいでき。傳說、古記錄の類は、もと杜撰なるが多し、相互の矛盾もあり、意外の過誤もあり、之れを統べ、之れが隱微を解釋し、之れに有機躰的生命を賦與するは、一に史家の手腕を要す。然らざれば、死記、死誦の徒が千百の機械的考證のみ、何の爲す所かあるべき。主觀に偏して詩歌的なりし往古の歷史は、今や客觀に偏して無機、

無生のものとならんとしき。皆これ歴史攻究法の不備より來れるもの也。歴史が歴史家を離れて獨立するはよし、而も歴史家は、到底活人情、活世相と離るべからざるなり。彼のマコーレー、カーライル、フルード等の史は、幸にして如是死物とならざりしも、寄餘りに同事物の考證に密なりしが爲めに、十二年間の記事に四卷を費し、五六十年間の歴史に十二卷を費したり、時弊を免れざりきといふべし。

要するに、十九世紀中の史的事業は過去の獨斷の風を矯めんが爲めに、あまりに機械的に流れたりし慨あれども、夥多の史家が鋭意に研究し出だしゝ史料は、今や積みて山の如く、以て後の眞史家の出づるを待てるが如くなれば、歴史の地盤はやゝこゝに固きを得たりといふべきなり。

十九世紀に於て最も振はざりしものは**劇文學**なり。其の量の上より見れば敢て前世紀に讓らざれど、臺張となりて舞臺に演ぜられしものに至りてはいと稀なり。劇の形式上の工夫、古傑作の研究などは大に歩を進めたりしも、新作に至りては大抵は凡上劇、學者劇、文學劇たるに止まりにき。其のうちリットンの作二三篇は屢々、テニソンの全盛時代の作は稀に、演ぜられしことなきにもあらねど、大なる興味を看客に與へたりとはいふべからず。かくて追々文學と劇場との間に一大溝渠を見るに至りしかば、學者はさまざまに其の原因を求めて調停の運動もありしかど、させる功果もなくて今日に至りぬ。案ふに、こは作劇そのものゝ困難なるによれるなり。シェリダン以後英國に眞の劇詩家の出でざりしは主として之れに因る。

さて應用文學の他の一つなる**神學**につきて見るに、其の振はざりしこと遙かに歴史の下にあり、概言すれば、神學上の著述は、十七八世紀より追々と不振に赴きたりき。十九世紀の初めには、やゝ見るべきものもありしが、中頃より今日に下るに及びて其の不振いよ〳〵甚しくなりぬ。單に出版物につきて見れば、其の分量他種のものに讓らずと雖も、これを文學的方面より見れば其の價値いよ〳〵少なく、彼の讃美歌なども現今のに至りては、情高きにあらず、趣清きにあらず、辭妙なるにあらず、否、無意味にして乾燥なるを常とせり。此の間たゞ僅かに歴史熱の餘炎によりて著されたる高僧の傳記、宗派分裂の由來、若しくは教義の變遷等を錄せるものの讀むべきものあるのみ。有名なるアーヂング、チャルマァス等の如きも寧ろ人

物として秀でたりしのみ、著述の上より見て大なりしはたゝニューマン一人のみ。

さて又文學とは最も緣遠き科學の壇上に當時二三の文章家を出だしたりしは頗る奇なり。科學本來の性質より言へば、其の說明に美文を要することはなかるべき筈なれど、科學者の或者につきて見れば天性文學の嗜好に富みし者あり、若しくは其の文章の自からにして修辭の法にかなへるもあり。第十九世紀の科學者中にはハックスレーを首としてかゝる文章家鮮からず。

終りに科學よりは文學に緣近き美術家、博言家等につきて一瞥するに、其の聰明なる一二を除くの外は、概ね蛙鳴蟬噪の徒にして、未だ文園を飾るに足らざりき。似而非美學家が、二三の書物によりて得たる覺束なき知識を基礎として、一足飛びに批評壇に上り、自家が賞鑑力、判別力の不具なるをも知らで、杓子定規の批評を試るの片腹いたきは更にもいはず、純文學の修養もなき博言家が手當り次第に外國文學をとりて紹介若しくは批評して俗耳を驚かすなど、何れの國にもありがちなから、特に英國近代の騷壇に此の輩の跳躍の盛んなりしを見る。蓋し文學全盛の春風にふきあげられにし大路の塵埃ならんのみ。

近代文學の概況はほゞ以上に盡きたりと信ず。こゝに一言を加へたきは第二十世紀に於ける英文學は如何なるべきかの問題なり。

つら〳〵現今の英文壇を見渡すに、此の世紀の初めつかたに生れ出でし名家は大抵簒を易へ、中ごろに出でし人々のみが現騷壇の牛耳をとれる次第なるが、暫く眼を轉じて過去の一百年を一瞥すれば、多少深感なき能はざるものあり。見よ、詩壇に、小說壇に、批評壇に、其の他あらゆる文學、準文學の壇に、何ぞ名家の秋天の星の如く多かりし。正に是れ芳芬漲天の春、スコットや、バイロンや、シェリーや、キーツや、ウォルヅヲオスや、テニソンや、ブラウニングや、カーライルや、マコーレーや、ヂッケンスや、サッカレーや、エリオットや、キングスレーや、枚擧に遑あらず。これを今の文壇に見んか、彼の今尙生存せる二三の老作家を除くの外は、滿目悉く黃茅白葦、然らざれば春華の艶を摸して及ばざる狂花のかへり咲きに過ず。是に於て、人或は曰はく、現今の文壇は沈息せりと、又曰はく、これ更らに一轉するの兆と。沈息にあるか、轉機にあるかは疑問ならめど、兎に角に文壇の振はざるは事實なり。六百年間(文學隆盛期として未曾有の長日月)榮えにし文壇は、更らに百尺竿頭一歩を進むるを得べき

か、否か。十八世紀末より十九世紀の始めへかけて起りしが如き世界的大革命の再び起ることなくして沈着なる英國人が大に奮發することあるべきか否か。彼の如き動機なく、彼の如き素養なく、彼の如き感奮、激怒、恐怖、希望等なくして更らにかの如き革新運動を試ることを得べしや、否や。これ現未の問題なり。講者は輕々しく此の大問題に答ふることを好まず。且らく未決のまゝに之れを存して、更に讀者と共に研鑽討究を重ねん。

英文學史 大尾

坪内博士の英文學史を讀む

（帝國文學第十二）

蒼梧洞主

坪内博士の英文學史上梓せられてよりこゝに月を重ぬる事すでに五六に及ぶ。今にして此れに向て蕪辭を陳ぶるは極めて機を失したるが如しと雖も、博士の此著もとより一讀架上に束ね去らるべき蜉蝣的の書にあらざるを信ず。從つて時日の遲速の如きは問ふ處にあらざるべきか。こゝに吾が所懷を記して問ふ處あらんと欲す。

邦文を以て外國の文學史を叙したるもの、蓋し此書を以て嚆矢とす。ケードモン、ベウオルフの古より、ラスキン、スチンバアンの現代に至るまで、上下千餘年整然として發展し來りし英文學の經過を叙し、作品の批判をなして、此れを一卷に收めん事容易の業にあらず。況んや此書の如く簡明にして了解に易からしめん事、博士の精勵と博識とを以てするにあらざるよりは、決して能くし得べからざる處なりとす。博士は明らかに此の書の頁ふ處の諸家の名を列擧せられたり。曰く（ブルツク、ドーデン、ゴツス、セーンツベリ、テーヌ等と。然れども此れ等諸家の文學史評論は、博士の思想を通ぜて融然相和し少しも混亂の狀態を露はさず。而も此れ等諸家の以外に亘りて、時に歐洲評家の意見をも參照せられたる跡あり、其勞まことに多しと云ふべし。よし、大體の結構ぶり原文の引照に至るまで多くは前記諸家の文學史の一二より、其まゝに引用せられたる處少なからずと雖も、吾は大體に於て此書に對し贊辭を呈せんとするものなり。

然りと雖も、吾は此書に於て頗る了解に苦む個處あるを認む。即ち其十九世紀文學史に就て極めて粗雜なるにあり。抑も外邦の文學にして尤も吾人に適切の關係あるは主として其近代文學にありとす。其思想に於て、其文學に於て、若くは實用的語學の上に於て尤も重

な爲すは近代にあり。よし、更らに深く進みて言語學の研究若しくは文學發達の跡を尋ねんとせば、やがて古に返りて深く其起因を明らかにするの要あるべしと雖も、此れが「總收」を爲す、近代を輕視せんか、文學史は則ち安全と云ふを得ず。

吾は乎實、近代英文學史に就て博士の高見に接んとして此書を繙けり。此れが批評の如きは淺學薄識の吾に於て到底及ばざる處なり、左ればこゝに此書を一讀して特に其十九世紀の一段に關して起れる疑點を記し、教を乞はんと欲するなり。更に言はんか、吾は博士の高見を聞かんとして失望せり。何となれば其十九世紀の一段は、此れ直ちにセーンツベリ氏の十九世紀文學の醵譯とも見らるべきものなりければなり。然れども吾が失望は吾が不注意の致せし處にして、博士は初より其セーンツベリ氏に據れるを明言せられたりしなり、實に博士の意、一個の意見を述べんとするに非ずして、英文學史を公平に記するにありしなれば吾が希望は當初より誤られしなり。然れども更らに此れをセーンツベリ氏の醵譯と見るものゝ疑念なき能はず、今其一二を記さんか。

ロセッチの條下に千八百五年(五十年か)ロセッチが、「プリラファエル派の雜誌に Germ と題せる詩篇を掲げ」(七六九頁)たりとあり。ロセッチ等が數號繼續せし Germ と稱する雜誌を發刊せしよしは知られたれども、未だかゝる詩を見し事なし。

スターリンゲに就て「カーライルは彼れを評して詩文共にテニソンとハラムの間にありとなせりき」(七七八頁)とあるは如何なる意義なるか。ハラムの詩文とテニソンの詩文と如何なる關係あるかは、此書の一言も說き及ぼさゝりし處ならずや。セーンツベリ氏の書には散文壇に於けるスターリンゲとカーライルの關係は韻文壇に於けるテニソンとハラムの關係に等しとの意を記せり。余は前後の關係連絡より推して、此の一段の或は誤讀に出でしにあらざりしかを疑ふ。

更らにミルの條下に曰く、かのカーライルが「佛國革命史」の稿を後に其妻となしゝテーロプ

夫人より借覽して圖らずも此れを燒失せしは云々と(八四二頁)吾はかの原稿をミルより借りたる夫人か下婢の過失より燒棄したる小話を聞きしかども、未だミルが此れを燒失せしを聞かざりき。此一段亦セーンツベリ氏の史にも見えたり。

此れ等の諸條は或はセ氏の十九世紀文學を誤讀しはた誤譯したるにあらざるかの疑極めて多し。然れどもセ氏は其上版の當時土曜評論(?)が評して事實に於ても誤謬ありと言ひて幾多の例證を擧げしほどなれば、此れ等の諸條も或は凡て博士の訂正に依りしものならんか。

又第六九六頁にマコーレーの印度より歸ふや(千八百三十八年)一生涯の資產を作り得ければ、斷然政界を退きて云々と記されたり。千八百三十八年に政界を退きしとは何の依る處ありて定められしか其のエヂンバラアより撰ばれて下院の議員となりしも、上院に議席を占めしも、陸軍大臣たりしも、議會に於て幾多の大演說を試みしもみな三十八年以後の事ならずや。千八百十一年メルボーン內閣の仆るゝと共に職務を解かれたりと雖も、政界を退きしにあらず。其政界に關係を斷ちしは千八百四十七年議席を失ひし頃よりの事にあらずや。マコレーの如き大家に就てかゝる誤傳あるは甚た怪むべし。

僧正ニューマンに就てやゝ詳細に記述されたるは喜ぶべしと雖、其最も緊要なる舊教に改宗轉入せし事に一言の說き及ぼす處なかりしは甚だ惜むへし。

最近の詩人に就てモリス、スウインバーンの諸家を收めしは素より然るべきなり。然れども フィッゼラルドを記さゞりしは何等の失念ぞ。たまゝ雜誌記者として氏の名の列せられたるを見ると雖、近代の一大醵譯たるオマー、カイヤムのルバイヤット並に其醵譯者としてのフィッゼラルトに就ては亦一言の論及せられたるものなく、家庭親愛の情をうつして名あるバトモアの近代詩人の一たる榮を得ざりしはいよゝ怪しむべし。抑もルバイヤットの一篇は今日こそ多少反動として批難の聲を聞け、其出版の當時より現時に至るま

之と吾記見た發此上所むて
れてはきゆと記述謂し名
を果今れるDowdenとAnneの梅數項は一階なほ何人に譯者
看し疑たる氏を談記にせば彩色を有し て其の相
遷す吾が氏のア記査ば影多の疑點の新刊見し應
ろが一々カーンにせ色を於て嚴の新刊見し成
を思ふ列デ如ンきと常にドーンとし Donne を ドーンとせる處の其の一部を擧げたるに過ぎず。若し能く
好まず如記ンきすとすでにドーンとし Donne を ドーンとせる處の其の一部を擧げたるに過ぎず。若し能く
ずくなるる能べきにあらざ呼ばれたるが如し。
こなら能はずしばらくこれ呼ばれたり。こは如何なる博士かき私叡の少なから
ゝに人は、吾は等諸ゝ條に筆を止め由あり叡でせドーンが如ず。
に人は、吾は等諸ゝ條に筆を止め由あり叡でせドーンが如ず。
半見を陳して博士の談議に筆を止め由あり叡でせドーンが如ず。
見を陳して博士と湖江議を止め理由あり叡でせドーンが如ず。
を陳して博士と湖江議を止め理由あり叡でせドーンが如ず。
陳して博士と湖江議を止め理由あり叡でせドーンが如ず。
して博士と湖江議を止め理由あり叡でせドーンが如ず。
博士と湖江議を止め理由あり叡でせドーンが如ず。
士と湖江議を止め理由あり叡でせドーンが如ず。
と湖江議を止め理由あり叡でせドーンが如ず。
湖江議を止め理由あり叡でせドーンが如ず。
江議を止め理由あり叡でせドーンが如ず。
議を止め理由あり叡でせドーンが如ず。
を止め理由あり叡でせドーンが如ず。
止め理由あり叡でせドーンが如ず。
め理由あり叡でせドーンが如ず。
理由あり叡でせドーンが如ず。
由あり叡でせドーンが如ず。
あり叡でせドーンが如ず。
り叡でせドーンが如ず。
叡でせドーンが如ず。
でせドーンが如ず。
せドーンが如ず。
ドーンが如ず。
ーンが如ず。
ンが如ず。
が如ず。
如ず。
ず。

INDEX

Addison, Joseph (1672—1719)... 378
Adventures of Roderick Random, the.... ... 463
Ainsworth, William Harrison (1805—82). 634
Alfred, King (849—901). 23
Amelia.... 461
Ancient Mariner, The Rime of. 616
Arbuthnot, John (1667—1735)... 401
Arcadia, The. 111
Arnold, Matthew (1822—88). 768, 831
Arnold, Thomas (1795—1842).... 698
Ascham, Roger (1515—68). 76
Asolando. 758
Athenium. 830
Atterbury, Francis (1662—1732). 402
Austen, Jane (1775—1817). 628
Austin, John (1790—1859). 857

Bacon, Francis (1561—1626). 162
Baillie, Joanna (1762—1851). 883
Barbour, John (1316?—95). 57
Barrow, John (1764—1848). 666
Battle of the Books. 390
Baxter, Richarb (1615—91). 303
Beaconsfield, Benjamin Disraeli, Viscount (1804—81). 652
Beaumont, Francis (1584—1616). 228
Bede, the Venerable (673—735). 22
Behn, Afra (1640—89). 354
Bentham, Jeremy (1748—1832). 847
Bentley, Richard (1662—1742). 401

Beowulf... 14
Berkeley, Bishop George (1685—1753).... 404
Blackmore Sir Richard (1650?—1729). ... 421
Blackwood's Magazine... 667
Blair, Robert (1699—1746). 515
Blake, William (1757—1827). 612
Bolingbroke, Henry St. John, Viscount (1678—1751). 402
Borrow, George (1802—81). 654
Boswell, James (1740—95). 506
Bothwell. 796
Bowles, William (1762—1850)... 623
Boyle, Robert (1627—91).... 293
Brontë, Anne (1820—49).... 800
Brontë, Charlotte (1816—55). 800
Brontë, Emily (1818—48) 803
Browne, Sir Thomas (1605—82). 275
Browning, Elizabeth Barrett (1806—61). 765
Browning, Robert (1812—89). 754, 893
Bryant, Jacob (1715—1804). 872
Buckle, Henry Thomas (1821—62).... ... 727
Bunyan, John (1628—88).... 306
Burke, Edmund (1729—97). 510
Burnet, Thomas (1635?—1715)... 305
Burney, Frances (1752—1840). ... 479, 624
Burns, Robert (1759—96)... 560
Bulton, John Hill (1809—81). 727
Burton, Robert (1577—1640). 282
Butler, Bishop Joseph (1692—1752). ... 406
Butler, Samuel (1612—80). 324
Byrom, John (1692—1763). 514
Byron, George Gordon Noel, Lord (1788—1824)... 600

Caedmon. 19
Campbell, Thomas (1777—1844). 620

Carew, Thomas (1598?—1639?). 247
Carlyle, Thomas (1795—1881). 711
Castle of Indolence, The 517
Chalmers, Thomas (1800—47).... 870
Chambers, Robert (1802—71).... 879
Chapman, George (1559?—1634?).... ... 235
Chatterton, Thomas (1752—70). 526
Chaucer, Geoffrey (1340?—1400). 39
Chester Plays, The 176
Childe Harold's Pilgrimage. 603
Christmas Carol 640
Churchyard, Thomas (1520?—1604). ... 97
Cibber, Colley (1671—1757). 362
Clarendon, Edward Hyde, Earl of (1608-74). 280
Clarissa Harlowe. 445
Clough, Arthur Hugh (1819—61). 788
Cobbett, William (1762—1835). 659
Coleridge, Hartley (1796—1849). 683
Coleridge, Samuel T. (1772—1834).... ... 615
Collins, Wilkie (1824—89). 824
Collins, William (1721—59). 517
Comus 250
Complaint, or Night Thought. 514
Congreve, Willam (1670—1729). 360
Conington, John (1825—69). 869
Constable, Henry (1555—1615?). 154
Contemporary Review... 829
Cornhill Magazine. 822
Coventry, The 176
Cowley, Abraham (1618—67). 303, 334
Cowper, William (1731—1800). 565
Crabbe, George (1754—1832). 614
Crashaw, Richard (1613?—49). 247
Crawne, John (1640?—1705?). 358
Cudworth, Ralph (1617—88). 303

Daniel, Samuel (1562—1619). 154, 156
Darwin, Charles Robert (1809—82). ... 877
Davenant, Sir William (1606—68). ... ...
... ... 248, 335, 349
David Copperfield. 640
Davies, Sir John (1569?—1626). 158
Davy, Sir Hamphry (1778—1829). 876
Day, John (? — ?). 235
Decline and Fall of the Roman Empire. ... 502
Defence of Poetry, The 118
Defoe, Daniel (1661—1731). 426
De Quincey, Thomas (1785—1859). 680
Deserted Village 533
Dickens, Charles (1812—70). 639
Dillon, Wentworth (1634—85). 538
Disraeli, Benjamine (1804—81). 652
Disraeli, Issac (1766—1848). 667
Dobell, Sydney (1824—74). 787
Donne, John (1573?—1631). 157, 245
Drayton, Michael (1563?—1631). ... 154, 156
Dryden, John (1631—1700). 340
Dunciad, The 416
Dyer, John (1700?—1758). 515

Ecclesiastical Polity. 159
Edgeworth, Maria (1767—1849). 626
Edinburgh Review. 661
Elegy written in a Country Churchyard. ... 521
Endymion. 619
English Dictionary. 488
Esmond, Henry 645
Essays. (Macaulay's) 173
Essays of Elia 670
Essay on Criticism. 413
Essay on Man. 415
Etheredge, Sir George (1635?—91?). ... 351

Euphues. 107
Evans, Mary Ann (Mrs Cross, "*George Eliot*") (1819—80).... 804
Evelyn, John (1620—1706). 304
Every Man in his Humour. 220
Excursion, The. 590
Expedition of Humphry Crinker. 466

Fabyan, Robert (late 15th cent.). 101
Fairfax, Mary (1780—1872). 877
Fairy Queen. 126
Farquhar, George (1678—1707). 363
Fielding, Henry (1707—54). 452
Fielding, Sarah (1710—1768). 477
Finch, Anne (1660—1720). 338
Fitzgerald, Edward (1809—83). 688
Fletcher, John (1577—1625). 228
Ford, John (? — ?). 236
Forster, John (1812—76). 727
Fortnightly. 829
Francis, Sir Philip (1740—1818). 511
Frederick the Great, the History of. 716
Freeman, Edward Augustus (1823—92).... 729
Froude, James Anthony (1818—94). ... 731
Froude, Richard Harrell (1803—36). ... 866
Fuller, Thomas (1608—61). 283

Galliver's Travels 391
Galt, John (1779—1839). 634
Garrick, David (1717—79) 487, 517
Garth, Sir Samuel (1661—1719). 338
Gascoigne, George (1525?—77). 96
Gay, John (1685—1732). 423
Geoffrey of Monmouth (12th cent). 32
Gibbon, Edward (1737—94). 498
Gifford, William (1756—1826). 658

Gilpin, Edward (? — ?). 157
Godwin, William (1756—1836). 691
Goldsmith, Oliver (1728—74). 477, 530
Gorboduc. 186
Gower, John (1320—1402). 57
Gray, Thomas (1716—71). 519
Greene, Robert (1560—92). 197
Greville, Fulke (1554—1628). 154, 158
Green, John Richard (1837—83). 730
Green, Mathew (1696—1737). 514

Hake, Thomas Gordon (1809—94). 784
Hall, Bishop Joseph (1574—1656). 157
Hallam, Henry (1777--1859). 692
Hamilton, William (1788—1856). 851
Hamilton, William (1788—1856). 851
Hamlet. 217
Hazlitt, William (1778—1830). 671
Herrick, Robert (1591—1674). 247
Heywood, John (1497?—1580?). 184
Heywood, Thomas (? —1650?). 235
History of Charles V. 497
History of England from the Accession of James II. 702
History of Joseph Andrews. 458
Hobbes, Thomas (1588—1679). 284
Holinshed, Raphael (? —1580). 102
Holl, Edward (? — ?). 101
Hook, Theodore (1788—1841). 635
Hooker, Richard (1554—1600). 159
Household Words... 826
Howell, James (c. 1594—1666). 283
Hudibras 327
Hume, David (1711—76). 493
Hunt, Leigh (1784—1859). 621, 682
Huxley, Thomas Henry (1825—95). ... 880

Hyde, Edward, Earl of Clarendon. 280

Idylls of the King. 750
In Memoriam. 742
Inquiry into the Sublime and Beautiful. ... 510
Instauratio Magna. 168
Irving, Edward (1792—1834). 864

James, G. P. R. (1801—60). 634
Jane Eyre 801
Jefferies, Richard (1848—87). 840
Jeffrey, Francis (1773—1850). 661
Johnson, Samuel (1709—84). 477, 481
Johnstone, Charles (1719?—1800?). ... 480
Jonson, Benjamine (1573—1637). 218
Jowett, Benjamine (1817—93). 869
Junius. 511

Keats, John (1795—1821). 618, 894
Keble, John (1792—1866). 859
Kinglake, Alexander (1809—91). 726
King Lear. 217
Kingsley, Charles (1819—75). 812
Kingsley, Henry (1830—76). 830
Knowles, James Sheridan (1784—1862). ... 886
Kyd, Thomas (16th cent.). 199

Lamb, Charles (1775—1834). 668
Lamb, Mary. 669
Landor, Walter Savage (1775—1864). ... 622
Langland of Langley, W. (1332?—1400?). 57
Layamon (fl. 1200). 33
Lee, Nathaniel (1655—92). 357
Lever, Charles (1806—72). 651
Lewes, George Henry (1817—78). 805
Lewis, Matthew Gregory (1775—1818). ... 624

Life of Richard Savage. 486
Life of Samuel Johnson. 508
Lingard, John (1771—1851). 694
Lives of the English Poets 491
Locke, John (1632—1704). 290
Locker-Lampson, Frederick (1821—95).... 790
Lockhart, John Gibson (1794—1854). ... 678
Lodge, Thomas (1558?—1625). ... 157, 199
London Magazine... 667
Lydgate, John (1370?—1451?). 61
Lyly, John (1554?—1606?). 106, 194
Lyndsay, Sir David (1490?—1555?). ... 80
Lytton, Edward George Bulwer, Lord (1803—73). 636, 887
Lytton, Edward Robert, Earl of (1831—91). 791

Macaulay, Thomas Babington (1800—59). 699
Macbeth. 217
Mackenzie, Henry (1745—1831). 481
Mackintosh, Sir James (1765—1832). ... 691
Macmillan's Magazine 828
Maginn, William (1793—1842). 684
Maine, Sir Henry James Sumner (1822—88). 857
Malory, Sir Thomas (15th cent.). 62
Mandeville, Bernard de (1670—1733). ... 404
Mandeville, Sir John (1300?—73?). ... 59
Manning, Cardinal (1808—93).... 836
Mansel, Henry Longueville (1820—71).... 852
Marlowe, Christopher (1564—93). 200
Marryat, Captain Frederick (1792—1843). 650
Marston, John (1575?—1634).... ... 157, 236
Martineau, Harriet (1802—76). 655
Marvell, Andrew (1621—78). 337
Massinger, philip (1583—1640). 236

R

Rossetti, Dante Gabriel (1828—82). ... 774
Rowley, William (1585?—1642?). 236
Ruskin, John (1819—1900). 832

Sackville, Thomas, Earl of Dorset (1536?—1608). 94
Sartor Resartus 714
Saturday Review... 827
Savage, Richard (1697—1743).... 514
Saxon Chronicle 24
Scott, Sir Walter (1771—1832) 573, 631, 662
"Scriptual Metrical Paraphrase." 20
Seasons... 515
Seller, William Young (1825—90). 874
Settle, Elkanah (1647—1724). 358
Shadwell, Charles (fl. 1718—20). 352
Sheftesbury, Anthony Ashley Cooper, Earl of (1671—1713). 403
Shakespeare, William (1564—1616). ... 205
Sheffield, John (1649—1721). 337
Shelley, Percy Bysshe (1792—1822). ... 591
Shepherd's Calender. 121
Sheridan, Richard Brinsley (1751—1816). 536
Shirley, James (1596—1666). 236
Sidney, Sir philip (1554—86). 110
Silas Marner 808
Sir Charles Grandison 450
Skelton, John (1460?—1529). 79
Skene, William Forbes (1809—92).... ... 727
Smith, Alexander (1830—67). 788
Smith, Sydney (1771—1845). 664
Smith, William Robertson (1846—94). ... 875
Smollett, Tobias George (1721—71). ... 462
Sonnets.... 217
Southerne, Thomas (1659—1746). 359
Southey, Robert (1774—1843).... ... 571, 692

Spectator ... 380, 397, 828
Spenser, Edmund (1552?—99). ... 121
Stanley, Arther (1815—83). ... 868
Steele, Sir Richard (1672—1729). ... 396
Stephen, Sir James Fitzjames (1829—94). 858
Sterling, John (1806—43). ... 687, 784
Stevenson, Robert Louis Balfour (1850—94). ... 821
Supposes, The ... 187
Surrey, Henry Howard, Earl of (1517?—47). ... 81
Swift, Jonathan (1667—1745). ... 385
Swinburne, Algernon Charles (1837—) ... 795
Symonds, John Addington (1840—93). ... 843

Tale of a Tub ... 338
Task ... 567
Tatler ... 397
Taylor, Bishop Jeremy (1613—67). ... 270
Temple, Sir William (1628—99). ... 304
Tennyson, Alfred, Lord (1809—92). ... 736, 893
Thackeray, William Makepeace (181 — 63). ... 644
Thomson, James (1ST.) (1700—48). ... 515
Thomson, James (2ND.) (1834—82). ... 780
To a Skylark ... 597
Tom Jones. ... 460
Towneley, The ... 176
Tourneur, Cyril (? — ?). ... 157, 235
Trench, Archbishop Richard Chenevix (1807—86). ... 784
Trevisa, John de (? —1413). ... 59
Tristram Shandy ... 471
Trollope, Anthony (1815—82). ... 818
Tupper, Martin Farquhar (1810—89). ... 783
Turner, Sharon (1768—1846). ... 694

Tyndale, William (1485?—1536). ... 77

Udall, Nicholas (1516?—56). ... 185
Utopia ... 74

Vanbrugh, Sir John (1666?—1726). ... 362
Vanity Fair ... 648
Vicar of Wakefield, The. ... 477

Wakefield, Gilbert (1756—1801). ... 873
Waller, Edmund (1605—87). ... 333
Walpole, Horace (1717—97). ... 481
Walton, Izaak (1593—1683). ... 283
Warner, William (1558?—1609). ... 159
Watson, Thomas (1557—92). ... 154
Webbe, William (16th cent.). ... 120
Webster, John (? — ?). ... 234
Weekly Register ... 659
Westward Ho! ... 815
Whately, Richerd (1787—1863). ... 855
Whewell, William (1794—1866). ... 856
Wicheley, William (1640—1715). ... 354
Wilberforce, Samuel (1805—73). ... 867
Wilkins, Bishop John (1614—72). ... 289, 303
Wilmot, John (1640—80). ... 338
Wilson, John (dramatist) (1622?—90?). ... 349
Wilson, John (essayist, etc) (1785—1854). 675
Winchelsea, Anne Finch, Countess of (1660—1720). ... 425
Wyatt, Sir Thomas (1503—42). ... 81
Wyclif, John (1324?—1384). ... 36

Young, Edward (1681—1765), ... 513

THE END.

明治三十四年五月三十日印刷
明治三十四年六月二日發行
明治三十五年二月十日再版

定價金貳圓

著者　坪内雄藏　東京市牛込區大久保余丁町百十二番地
發行者　高田俊雄　東京市牛込區赤城下町二十七番地
印刷者　佐久間衡治　東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地
發行所　東京專門學校出版部　東京府豐多摩郡戸塚村大字下戸塚六百四十七番地
印刷所　株式會社秀英舍第一工場　東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地

發賣元　博文館
東京市日本橋區本町三丁目

發賣所　有斐閣書房
東京市神田區一ツ橋通町

同　東京堂
東京市神田區表神保町

同　吉岡書店
大阪市東區備後町四丁目

東京專門學校出版部出版圖書目錄

早稲田叢書

米國プリンストン大學政治科教頭
文學博士ウッドロオ、ウイルソン原著
法學博士　高田早苗譯

政治汎論（八版）
一名　沿革實用政治學
背皮金文字入上製　正價壹圓五拾錢
一千二百五十頁　小包料四百匁
全一冊

英國ケムブリッヂ大學教授アルフレッド、マーシャル原著
法學士　井上辰九郎譯

經濟原論（大十一訂正版）
背皮金文字入上製　正價壹圓貳拾錢
八百頁　郵稅拾八錢
全一冊

英國ウオルフ原著
法學博士　天野爲之
柏原文太郎譯

國民銀行論（四版）
一名　信用組合新策
背皮金文字入上製　正價金壹圓
五百餘頁　郵稅拾四錢
全一冊

英國全國文學士
法學博士　田島錦治譯

經濟政策（三版）
附外國貿易論
背皮金文字入上製　正價壹圓四拾錢
六百五十頁　郵稅拾六錢
全一冊

國際法專攻
法學博士中村進午著

新條約論（三版）
背皮金文字入上製　正價壹圓參拾錢
六百五十頁　郵稅拾六錢
全一冊

英國シヂウヰック原著
パステーアル士子金四郎共譯

經濟學研究法（三版）
背皮金文字入上製　正價金壹圓
四百五十頁　郵稅拾貳錢
全一冊

英國ジー、エー、キーエンス原著
法學博士　天野爲之譯

英國國會史（三版）
背皮金文字入上製　正價壹圓參拾錢
八百餘頁　郵稅拾八錢
全一冊

英國ピー、ジー、スコットオ原著
法學博士　高田早苗譯

近時外交史（五版）
背皮金文字入上製　正價壹圓五拾錢
七百餘頁　郵稅拾六錢
全一冊

國際法學會員
法學博士　有賀長雄著

英國憲法論　全一冊
附英國憲法講義
英國エー、ヴイ、ダイシー原著
法學博士高田早苗
文學士梅若誠太郎共譯
背皮金文字入上製　正價壹圓七拾五錢　九百餘頁　郵稅貳拾錢

財政學　（再版）　全一冊
英國シー、エフ、バステーブル原著
法學士井上辰九郎
學士高野岩三郎共譯
背皮金文字入上製　正價貳圓貳拾錢　一千六百頁　小包料四百匁

歐洲外交史　（再版）　今世　全二冊
佛國アー、ドー、ビヴール原著
故酒井雄三郎譯
背皮金文字入上製　正價參圓五拾錢　一千六百頁　郵稅參拾六錢

國際法　（再版）　全二冊
露國フリードリッヒ、フオン、マルテンス原著
國際法專攻法學博士中村進午譯
背皮金文字入上製　正價金四圓　一千八百頁　郵稅四拾錢

英國今代史　上卷
一名女皇之御宇
英國ジヤスチン、マッカシー原著
日本高田早苗
吉田巳之助共譯
全部三卷上卷千百餘頁背皮金文字入上製正價貳圓參拾錢　小包料四百匁
文學士姉崎正治著

宗教學概論　全一冊
米國コロムビヤ大學政學部行政法教授フランク、ジエー、グッドノウ原著
日本東京專門學校講師浮田和民譯
背皮金文字入上製　正價壹圓五拾錢　六百餘頁　郵稅拾六錢

比較行政法　全一冊
背皮金文字入上製　正價金貳圓　八百頁　郵稅貳拾錢
英國ミケール、マルホール原著
日本ドクトル、オフ、ポリツチカル、サイエンス大石熊吉
前川九萬人共譯

萬國國力比較　全一冊
背皮金文字入上製一千頁　精巧圖面三拾餘頁挿入　正價貳圓五拾錢　小包料四百匁

社會學　（再版）　全一冊
米國ギデイングス原著
文學博士元良勇次郎閲
文學士遠藤隆吉譯
背皮金文字入上製　正價壹圓卅五錢　五百五十頁　郵稅拾四錢

哲學概論　（再版）　全一冊
文學博士桑木嚴翼著
背皮金文字入上製　正價壹圓四拾錢　五百五十頁　郵稅拾四錢

國際私法論　（再版）　全一冊
瑞西法學博士野澤武之助
國際法專攻山口弘一共著
背皮金文字入上製　正價壹圓四拾錢　六百頁　郵稅拾四錢

社會統計學　全一冊
米國古倫比亞大學教授メーヨー、スミス原著
日本吳文聰譯
背皮金文字入上製　正價壹圓五拾錢　六百餘頁　郵稅拾四錢

社會問題解釋法　（再版）　全一冊
安部磯雄著
背皮金文字入上製　正價金壹圓貳拾錢　四百五十頁　郵稅拾貳錢
男爵林董
法學博士有賀長雄
佛國學士會員アナトール、レルア、ボリユー原著
日本林穀陸譯

露西亞帝國　全一冊
男爵林董
謙田榮吉
栗原亮一序
有賀長雄
鎌田榮吉閲
背皮金文字入上製　正價金貳圓　八百五十頁　小包料四百匁

國法學　上卷
法學博士有賀長雄著
下卷近刊
背皮金文字入上製紙數七百頁　正價壹圓七拾五錢　郵稅拾八錢

政治罪惡論　全一冊
佛國訴裁判所長エークス控ルイ、ブロール原著
日本東京專門學校講師松平康國譯
背皮金文字入上製　正價金壹圓　三百五十頁　郵稅拾貳錢

政治學及比較憲法論　全二冊
米國ジオン、ダブリユ、バルジエス原著
日本法學博士高田早苗
吉田巳之助共譯
下卷近刊　正價金壹圓五拾錢　上卷紙數六百頁　郵稅十四錢

西洋倫理學史　全一冊
煙山專太郎編著
背皮金文字入上製紙數五百五十頁　正價金一圓三十錢　郵稅十四錢

無政府主義　近世　全一冊
獨逸ルドルフ、ロツカー著
法學博士有賀長雄譯
背皮金文字入上製紙數四百頁　正價金壹圓　郵稅十二錢

近刊

公法學
獨逸ラバント著
法學士副島義一譯

國際法
獨逸シユルチエー著
法學士副島義一譯

普國國家法論

早稲田小篇

歐洲政治史論　（再版）　十九世紀　全一冊
故酒井雄三郎著
正價金參拾錢　郵稅金四錢

獨逸ボルンハツク著
法學士菊地駒治譯

國家學原理
法學士竹井耕一郎著

帝國憲法論
英國ニコルソン著
佐藤愨三郎譯

經濟原論
獨逸ロツシエル著
法學博士松崎藏之助
法學士神戸正雄譯

經濟原論
獨逸オルデンブルグ著
三浦藤作譯

佛陀
浮田和民著

史學原論
島村瀧太郎著

新辭學
美濃部達吉著

佛國巴里大學法學博士ルイ、ルノール原著
國際法教授有賀長雄序
法學士宮本平九郎閲
川崎新譯

國際法論 全一册
正價金參拾五錢 郵稅金四錢

法學士織田一著

支那貿易 全一册
正價四拾錢 郵稅金四錢

横山正修編著

非鐵道國有論 全一册
正價金貳拾五錢 郵稅金四錢

ドクトル、オヴ、フイロソフイー高木正義纂譯

トラスト 全一册 (三版)
正價金參拾錢 郵稅金四錢

小山松壽著

南清貿易 全一册
正價金壹拾五錢 郵稅金六錢
各國勢力範圍支那交通產業圖挿入

英國アーチバルド、アール、コフーン原著
法學士立作太郎抄譯

最近之支那 全一册
正價 金三拾五錢 郵稅 金四錢

伯爵大隈重信講演

菅公談 全一册
鮮明肖像入
正價 金參拾錢 郵稅 金四錢

綱島榮一郎纂譯

快樂派倫理 全一册
正價 金五拾五錢 郵稅 金六錢

法學博士高田早苗抄譯

帝國主義論 全一册
正價 金四拾錢 郵稅 金六錢

法學士三木猪太郎抄譯

犯罪學 全一册
正價 金四十錢 郵稅 六錢

ウイローピー及ポサンケイ原著
浮田和民解說

國家哲學 近刊

歷史叢書

法學博士高田早苗校閲
山本利喜雄著

露西亞史 全一册 (再版)
正價金壹圓廿五錢 郵稅金拾貳錢
總クロース上製四百五十頁鮮明地圖挿入

パチエラー、オヴ、ロース松平康國編著

英國憲法史 全一册 (再版)
正價金壹圓廿五錢 郵稅金拾四錢
總クロース上製四百五十頁鮮明地圖挿入

米國シカゴ大學政治科教頭
ハーリー、ブラット、ジヤツドソン原著
東京專門學校講師大內暢三譯

歐洲十九世紀史 全一册
正價金壹圓廿五錢 郵稅金拾貳錢
總クロース上製四百餘頁鮮明地圖挿入

パチエラー、オヴ、ロース松平康國編著

世界近世史 全一册
正價金壹圓廿五錢 郵稅拾貳錢
總クロース上製紙數四百餘頁
鮮明地圖挿入

長田忠一編著

佛蘭西史 全一册
正價金壹圓廿五錢 郵稅金拾貳錢 近刊
總クロース上製紙數四百餘頁
鮮明地圖挿入

近刊

浮田和民編 **希臘史**

浮田和民編 **羅馬史**

松平康國編 **英國史**

文學士 隈本繁吉編 **獨逸史**

文學士 坂本健一編 **伊太利史**

文學士 村川堅固編 **西班牙葡萄牙史**

文學士 坂本健一編 **荷蘭白耳義史**

文學士 高桑駒吉編 **北歐史**

長田忠一編 **土耳古波留汗史**

小崎弘道編 **米國史**

長瀨鳳輔編 **中央亞細亞史**

文學士 高桑駒吉編 **印度史**

文學士 矢野仁一編 **清國史**

文學士 河合弘民編 **近世殖民史**

文學叢書

文學博士 坪內雄藏著

英文學史 全一册 (再版)
總クロース上製美本九百餘頁
正價 金貳圓 小包料四百匁

高安月郊譯

イブセン社會劇

全一冊

總クロース上製 四百餘頁
正價金壹圓 郵稅拾四錢

巢林子撰註

近刊

文學博士 坪內雄藏著

英詩文評釋

近刊

東京專門學校講師 增田藤之助著

英詩文評釋

近刊

宮崎三昧選

元祿名著集

近刊

近刊

宮崎三昧譯
支那小說史 艶

トルストイ伯著 尾崎紅葉 瀨沼夏葉譯
アンナ、カレニナ

フライタッグ著 登張信一郎譯
ゾルウンド、ハアベン

フロウベル著 上田敏譯
マダム、ボヴリー

ハーディー著 梅澤精一譯
テス

ホーソン著 內田貞譯
スカーレット、レター

尾崎紅葉著
俳諧七部集略解

赤堀又次郎著
有職故實

ストツダアド著 千葉鐵造譯
英國小說進化論

ドウデン著 中島茂一譯
シェークスピア

早稻國文學會編述
謠曲評釋

島村瀧太郎譯
歐米名家短篇集

森槐南著
元曲舉隅

經濟學叢書

伊國法學博士ルイギー、コツサ原著
日本法學士 永井直好重譯

社會經濟原論

全一冊

總クロース上製三百餘頁
正價金壹圓 郵稅金拾錢

英國タブリユー、エー、ショウ著
日本信夫淳平譯

歐洲貨幣史

近刊

米國エドワード、カロル原著
法學博士 天野爲之閲
伊藤正譯

金融之原理及其實際

近刊

近刊

法學博士和田垣謙三閲 岸田虎三譯
コンラード氏經濟學
(上)國民經濟學 (中)經濟政策學
(下)財政學

法學博士松崎藏之助閲 岩城之寛譯
ハドレー氏經濟學

文學士梅若誠太郎 埴原正直共譯
アダムス氏財政學

法學博士天野爲之閲 原田駒之助譯
クレアー氏外國爲替論

法學士 永井直好譯
パッテン氏消費論

文學士 聰譯
吳スミス氏經濟統計學

法學士 柳田國男譯
クラーク氏分配論

文學士 杉江輔人譯
クーレー氏交通機關論

マスター、オウ、アーツ千葉鐵藏譯
塡國價値論

譯者未定
ボン、バワーク氏資本論

譯者未定
デヴィドソン氏賃銀論

法律叢書

法學博士 鳩山和夫
法學博士 富井政章
法學博士 岡村輝彥
帝國大學校教授 ドクトル レーンホルム
法學博士 穗積陳重
法學博士 戸水寬人 批

法學博士 梅謙次郎
獨逸伯林大學教授 ハインリヒ、デルンブルヒ原著
法學博士 中村進午
法學士 瀨田忠三郎
法學士 副島義一
法學士 古川五郎
山口弘一 合譯
法學士 菊池武夫 評

(再版)

獨逸民法論

全四冊

附獨逸民法正文 正價金八圓
菊判三千五百餘頁背皮金文字入上製
第一卷 總則 第二卷 物權
第三卷 債權 第四卷 親族、相續

●正價 ○第一卷金壹圓七拾五錢 ○第二卷金壹圓七拾五錢 ○第三卷金貳圓貳拾五錢 ○第四卷金貳圓貳拾五錢
●郵送料 ○第一卷金十六錢 ○第二卷金十六錢 ○第三卷金二十錢 ○第四卷金二十錢●全部小包料壹貫文

獨逸商法論

全二冊

法學博士鳩山和夫　梅謙次郎批評
獨逸ボンウイルヘルム、エンデマン原著
大學教授
法學士堀内秀太郎　法學士古川五郎合譯
中村健郎

紙數千二百餘頁背皮金文字入上製美本
正價金參圓五拾錢小包料四百匁
附獨逸商法正文

獨逸刑法論

近刊

獨逸リスト原著
法學博士岡田朝太郎閲
法學士乾政彦
法學士吾孫子勝共譯

近刊

獨逸ヘフテル著　法學士堀口九万一譯
國際公法
獨逸パール著　法學士古川五郎譯
國際私法
佛國フイオレー著　法學士宮本平九郎譯
國際私法

獨逸レーマン著
法學士古川五郎
法學士玉川次致共譯
法學士里見三作
形法論

法學士小山溫法學士鈴木喜三郎共著
民法要論

法學士青山衆司著
商法要論

法學士朝倉外茂鐘著
海商法

法律教科書

法學士小山溫著
民法總則

全一冊

正價金四拾錢　郵稅金四錢

判事今村信行著
民事訴訟法

第一篇

正價金四拾錢　郵稅金四錢

法學士平沼騏一郎著
債權法總則

全一冊

正價金六拾錢　郵稅金六錢

法學士牧野菊之助著
親族法

全一冊

正價金四拾五錢　郵稅金六錢

法學士和仁貞吉著
保險法

全一冊

正價金四拾錢　郵稅金四錢

法學士青山衆司著
商法總則

全一冊

正價金六拾錢　郵稅金六錢

法學士鈴木喜三郎著
物權法

全一冊

正價金五拾五錢　郵稅金六錢

法學士青山衆司著
商行爲

全一冊

正價金七拾五錢　郵稅金八錢

教科書類及雜書

學海依田百川序
省軒龜谷行引
晚香菊池三九郎編
文章眞訣（五版）

全一冊

正價金七拾五錢　郵稅十錢
體製別百篇　法則別百篇　時代別百篇

金卓廊序
三島中洲評
土屋鳳洲序
菊池晚香輯
漢文綱要

全一冊

正價金六拾錢　郵稅金六錢

赤堀又次郎　千秋季隆共編
國文綱要 平家物語

全一冊

正價上製金六拾五錢　並製金五拾錢
郵稅金六錢

東京專門學校講師增田藤之助編
英語文章軌範

全一冊

總クロース頒美本　紙數二百頁
正價金五十錢　郵稅四錢

法學博士岡田朝太郎贊評
判事藤澤藤十郎著
改正草案 刑法評論

全一冊

正價金五十錢　郵稅金六錢

法學士古川五郎　山口弘一合譯
獨逸新民法商法 正文

全一冊

正價金壹圓　郵稅金拾四錢

新法典正文

全二冊

髓頭對照

民法之部

●法例●民法●民訴手續法●外三法全一冊　正價四十五錢
郵稅八錢

商法之部

●國籍法●商法●商法施行法●不動產登記法●供託法全一冊
正價廿八錢郵稅六錢

法典修正案理由書

全二冊（三版）

菊版　全二冊　一千五百頁
正價壹冊金七十五錢　郵稅一冊十四錢
●民法、法例、國籍法
不動產登記法、民法施行法　壹冊
●商法　商法施行法　壹冊

刑法改正案參考書

全一冊

近刊

東京專門學校出版部出版圖書目錄

色特大一の誌本む集を識智の界世密綿査調大正論議

早稻田學報

毎月一回二十五日發行

論　講　雜　政　文　海　早
說　演　纂　法　藝　外　稻
　　　　　經　教　現　田
　　　　　濟　育　象　記
　　　　　　　　　　事

定價
一部金十六錢
郵稅共
一部金十五錢
一部金八十錢
一部金一圓六十五錢

大賣捌
神田有斐閣
神田東京堂
芝福島屋
本郷盛春堂

發行所
早稻田學會
東京市牛込區早稻田東京專門學校出版部內

國際法學會員法學博士
有賀長雄氏主筆

外交時報

毎月一回二十日發行

肖像畧傳　記事　論說　國際法文　公　萬國赤十字　外交家傳　外交史談　書評　雜報

定價
一部郵稅共
一部金十六錢
一部金九十六錢
一部金一圓七十五錢

大賣捌
神田有斐閣
神田東京堂
本郷丁酉社

發行所
外交時報社
東京市牛込區早稻田東京專門學校出版部內

十

91
14

終